ナ 2R-29

志賀重昂校閲 兼 批評
牧口常三郎著

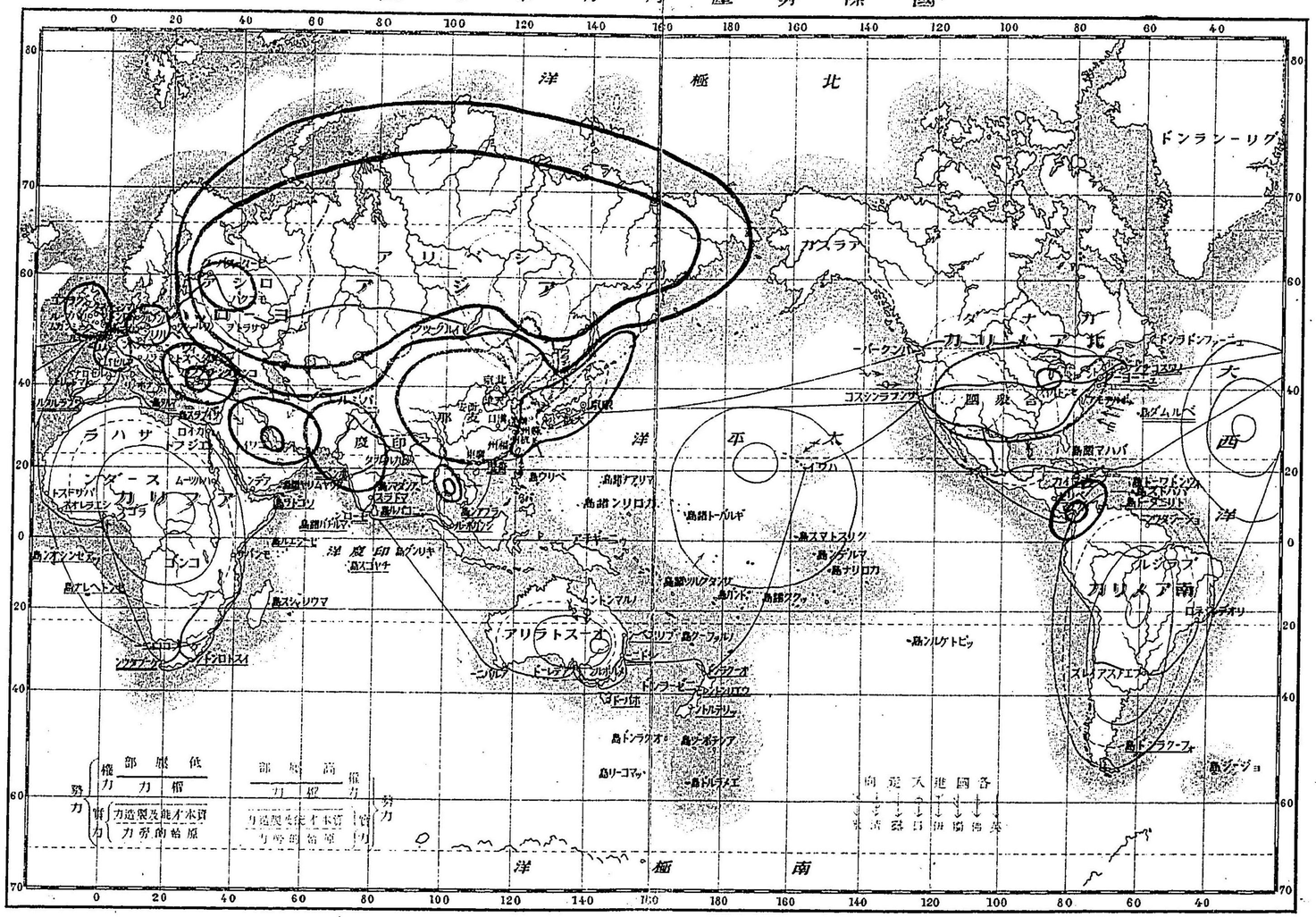
人生地理學 全

東京書肆 文會堂發兌

290.1
M154z

219335

國際勢力分布略圖


極北洋
ドンランーリグ
アラスカ
カナダ
カリフォルニア
ドクラドンファーニ
ーバークン
コスタリカ
ダムルベ
島嶼マハバ
太平洋
西洋
ルジアブ
カリフォルニア南
ロスアンジェリス
スレイアスアエス
島ドンラクーフォ
島ジェジョ
島ルケトビッ
アリラトスーム
アフリカ
ハサ
ロイカ
フジエ
ンダース
カリフォルニア
ンゴ
ムーツハバ
トスドリバ
オイレエン
ンゴラ
島ツゴリ
島ムリムヤ
島ルエンド
島ンオンセア
島アレヘンセ
ンクアーク
ドプロトスイ
島スンリワマ
ンドンマルノ
ンドルア
ドーレア
ルボルン
ドラーピー
ンドンシロウ
ントルテリッ
ドーバ
島トンラクオ
島ンボテイア
島リーコマッ
島トルライエ
島ンドド
島諸クッ
島諸ツルクタンガ
島スマトスリク
島ンブルア
島ナリロカ
アチギーン
島諸トールギ
島諸ンリロカ
島アリマ
島ウリベ
イコバ
島諸ンブラ
ルボンング
島ルロー
島マダガア
スラ
島スコゴチ
洋度印
島ブルキ
島諸ンリロカ
ンドラ
ドクリ
ンリ
ンバ
ンバ
ンバ

序

牧口常三郎君『人生地理學』一卷を著はさる、其の校閲は予の聊か責に任じたる所、卷中亦た批評せし所も少しとせず、乃ち此著に就き復た予の加ふべきものなし、因りて此著と予との關係を記せんとす。

昨明治三十五年春夏の交と覺ゆ、新潟縣牧口常三郎君なる人來り、刺を通じ、初めて予を見、地理と人生との關係を著述するの志を述べ、既成の草稿厚サ六寸に餘るものを示し、且つ曰く、明治二十六年來、北海道師範學校に教職を奉ぜしも、此志を果さん爲め、三十四年、職を辭し、專ら之れに當れりと。予、君が志を壯とし、其の大成を期望す、君快然として去る。今年春、衆議院選

舉の事を以て三河に在るや、君三河に來り、其の著述に批評せんことを求めらる。予、力及ばずと雖も、君が衣食の窮乏に耐え、而かも矻々として其志を成さんとするに感じ、乃ち之れを諾し、歸京後、此著の校閲及び批評に當ること茲に半年餘、今此書の出版成るに當り、予も亦た君と共に心に快然たるものあり。抑も此著、原稿二千ページに上らんとす、唯だ出版の都合に依りて今之れを其の半に縮めて公行す、之れ君の爲めに恨むべしと雖も、君が志を大成するの日來るや必せり、君今より予と共に益々發憤せられんこと、予の私に斯學の爲めに祈る所なり。

君の此著を出版せんとするや、一は君が名聲の未だ世に知られざると、二は草稿の浩瀚なるとを見ば、東京市中數百の書肆、恐らくは之が出版を斷ずるものなからん、獨り文會堂なるものの、君及び予と何等の緣故なく、且つ未だ世に知られざる書肆なりと雖も、奮て出版の事を諾し、遂に此の大部の著述を公行す。片々たる小冊子を編述する著者、之を出版する書肆の間にありて、此の如き著者と書肆とあるは、亦た以て人意を强うするに足れり。予は此書の著者と此の書肆とが將來必ず大成すべきことを豫想するものなり。

明治三十六年十月

志賀重昂撰

例言

一、擅に特別の名稱を冠して茲に一書を公にす、淺識不敏の身を以てして其僭越甚しきを怖る、乃ち一言以て世の寛恕を乞はんとす、不肖、教育の職に在ること多年、其間、地理學の教育上重要の地位にあらざるべからずして而かも甚だ輕んぜらるゝを感ずること久し、而して嘗て思へり、若し此學の教授法にして今少しく改良せらるゝを得ば、現今に於ける教育上の痼疾の大半は除去せらるべしと、爾來性癖の興味に驅られ、揣らず此學の研究に志し、教授の案を起すにつけ、諸科の著書を繙くにつけ、或は新聞、雜誌を讀むにつけ、或は老練なる實業者の雜話を聽くにつけ、或は四周の天然、人事を觀察するにつけ、即ち必要に應じ、感ずるに隨ひ、手記し、抜抄したるもの積り積りて一冊子をなすに至れり、されど假初にも一科の學を云爲するが如きは固より企て及ぶべきにあらざれば、筐底に藏めて多年の後を期したりき、然るに愚にも興味は次第に深くなり、予が鈍き腦髓は次第に之に因りて拘束せらるゝに至り、遂に他の何事に從事するも、多少の隙さへあれば、

忽ちそが意識を占領して意の向ふ所を妨ぐるに至れり。思れ貧しき予にとりては頗る大なる苦痛にして之れを脱るゝことは一身の生活上甚だ重要なることなりき。偶々出版のこと意外に進行したれば幾多の躊躇はしたりしかども、寧ろ斷然之を手放して暫らく其苦悶を忘れんにはと決心せり。斯くて一旦出版者と約せし後は非常に完結を迫られ、材料の精査に暇なく、茲に匆忙印刷校正を結了するに至れり。されば内容の粗漏、文辭の杜撰等は固より多からん。是れ予の慚謝に堪へざる所。幸ひに大方識者の叱正を得ば曾に予の悦びのみにあらざるなり。

一、本書の題名については未だ從來に慣例を見ざる所、恐らくは世の異感を惹かん。然れども之れ頗る苦慮の結果止むを得ざるに出でしものなり。世には「政治地理學」の名稱ありて「自然地理學」に對しての意義に用ひらる。されど「政治」といふ一般の概念よりすれば其稱の不當なるは明かなる所。是に於てか之に代はるに「人文地理學」の名稱あり。之を單に「地文學」に對しての名稱とせば可ならんも、其他に於ては精確に内容上の意味を表はさず、從ひて世間の之に對する概念は頗る廣漠たるを免れざるが如し。然らば「人類地理學」といはんか、之れ比較的本書の内容を表はすに適當なりと雖も、既に「人類學」なるものありて特別の意味に用ひられ居るが如きを奈何せん。偶々「人生」なる熟字は最も本書の内容に對して適切にして、而かも一般に漸く用ひられ來れるが如ければ、寧ろ斷然之に從はんにはと、斯く考へつゝ既に數年を經しが今に適當なる名稱を得ず、乃ち姑らく之を假用して他日適當なる名稱の出づるを俟つことゝせり。

一、「人生」の語は其結局は同じからんも、一見、二樣の意味に用ひらるゝものゝ如し。「人の一生」と「人間の生活」と是れなり。こゝのは其後者の意味に從ひたるものにて人類の物質的及び精神的の兩方面の生活を意味し、從って其中には經濟的、政治的、軍事的、宗教的、學術的等諸般の生活を包含す。人類社會の生活の此等諸方面と地理との關係を論ずることは之れ本書の聊か豫期したる所。

一、吾人の四周を圍繞せる自然は絶えず吾人の物質的精神的諸般の生活に影響す。されば吾人若し精細に其各要素と吾人の生活との關係を觀察せば、之に依り所謂「地誌」に記載する各地各國の狀況を了解するの基礎は得らるべし。果して然らば之れ即ち地理學の通論たるべきものにして、之に對すれば地理學の各論と名

づけ得べき各地各國の地理は其原則を適用するによりて粗匡解釋せらるべきなり。不敏揣らずも聊か努力したる所のものは此基礎の幾部分を得んとしたるに外ならず。唯だ予が淺學未だ之が結構に就て範の則るべきを見出す能はず、僅かに窺ひ得たる教育學上の理法に遵ひ、漸く材料の排列を試たるに過ぎざればなり。果して豫期の如く爲されきや否やは今尚ほ危懼に堪へざる所。從ひて材料に於けると同じく結構上に於ても多くの缺點あらん。予は此點に就き特に先輩諸君子の是正を仰がんと欲す。

一、吾人觀察の對象は常に現在の活社會にあるが故に、正當に解せんとせば勢ひ時事の問題に接觸せざる能はず。されば本書の目的上より常に戒めつゝも、時に筆端の主題外に逸したる所なきにあらず、是れ亦た讀者諸君の諒察を乞はんと欲する所なり。

一、本書の晩成を期する能はざりし事情は前陳の如ければ、予一身に對する批難は之を願ずとするも、せめては誤りを社會に傳へざらんが爲にも、將た出版者の大なる危懼に對しても、斯學專門の大家に校閲を受くることは予の當然の義務なり。唯だ恐らくは此の如き範圍の廣き問題に對し、且つ大部のものに對して眞に其人を需むるも得ること甚だ難からんを。時に志賀先生は予素より一面の識なしと雖も、予が地理學に對する興味は主として其の著述によりて養はれ、且つ本著に當りて直接に引用せる所も頗る多ければ、先生は予が需むる少數者中の一人なりき。乃ち其門を叩き、具さに志望を談れば直に情を動かし、快く諾せられ、加ふるに各章に批評を以てせらるゝことなれり。本書の出版に意外の進行を見しは全く之に因るなり。爾來繼續すること茲に半歲を超えしに拘はらず、先生内外公私の劇務を繰り合せ、永き煩勞を厭はせられざる其後進を誘腋するの情と斯學に對する熱心とは余の深く感銘する所なり。篇中其の著書を引用するに當りて表せんとせし幾多の敬意は之を遠慮して省略したりしかば茲に併せて謝意を表はす。但し之を以て此かる大部の内容上に關して責任を分つの理由となすべからざるは言ふを俟たざる所なり。

一、予は尚ほ本著に對する文學博士坪井九馬三先生の參助に就きて一言の感謝を禁ずる能はず。回顧すれば三年前の初夏、突然先生を向ヶ岡の邸に訪ひ、刺を通じて

教を請ふ當時何人の紹介をも持たざりしに、早速其請を容れられ、寒暄未だ終らざるに忽ち學術談は開かれ、因りて予が獨學に於ける幾多の疑問は氷解しき。爾來幾回時は短しと雖も、此の企圖の價値に關し、結構の大略に關し、研究の手段に關し、將た其他の疑ひに就て予の得し所は多くの讀書に優れるとを疑はず。予は此の厚情に就いて永く忘るゝ能はざるなり。

各章の終りに主要なる參考書を附記したるは、是れ實は淺識を表白する者、余の深く耻づる所と雖も、余が四周を觀察する上に直接に間接に幾多の指導を受けたる學者諸君子に對する感謝を表はすの意味に於て、予が當然なさゞるべからずと信ぜし所。但し余が此學に志しゝこと久しく其間何心なく抄記せし所多きを以て、尚ほ附記すべきもの甚だ多しと雖も、今は記憶に浮ばざるを遺憾とす。是れ亦た予の慚謝に堪へざる所。若し夫れ之れ丈けにても後進の士に向ひて一層深究の便宜となるあらば望外の幸とする所也。

一、本著に就きて直接に間接に知友諸君に助力を受けしと尠からず。或は予が窮狀に同情を寄せ書を飛ばし內願の意に就いて幾分の援助を與へんとせられしあり、或は藏書を貸與して研究に便宜を與へられしあり、或は新着の書を贈りて參考に資せられしあり、校正の幾部を補助し且つ文辭上に幾多の助言を與へられしあり、其他材料の寄與に一般の助力に是れ亦た予の深謝する所なり。

明治三十六年十月　東京本郷駒込の僑居に於て

著者識す

距離及温度の改算

一米（メートル）	三・二八一
一粍（ミリメートル）	〇、〇〇三三
一粁（キロメートル）	三三〇〇、
一尋	六、〇三五七
一里	一二九六〇、
一浬	六一一八、二
一哩	五三一〇、七四

温度の改算　華氏ノ度×$\frac{9}{5}$＋32＝華氏ノ度

人生地理學目次

緒論

第一章　地と人との關係の概觀……一
問題と吾人―吾人と世界―吾人と我國―吾人と郷土―世界觀察の順序―地理學と吾人

第二章　觀察の基點としての郷土……一一
不可思議なる勢力―郷土の範圍―郷土觀察の重要―郷土の要素

第三章　如何に周圍を觀察すべきか……二三
地人は如何に交渉するか―肉體的交渉―精神的交渉（知覺的、利用的、科學的、美的、道德的、同情的、公共的、宗教的）―社會と諸般の交渉及び其程度―吾人の着眼點―郷土要素取捨の標準―地理學の範圍

第一編　人類の生活處としての地

第四章　日月及び星（地上現象の總原因としての）……四三
第一節　日光と人生……四三
第二節　温熱と人生……四八
第三節　太陽と精神的人生……四八
第四節　日本人と太陽……五〇
第五節　太陰並に星と人生……五二

第五章　地球……五四
第一節　地球の形狀と人生……五五
第二節　地球の大サと人生……五七
第三節　地球の運動と人生……六二
第四節　地球の部分と人生……六九
第五節　水界及び陸界……七五

第六章　島嶼……八二
第一節　島國の性質……八二
第二節　島の種類と人生……八七
第三節　貿易上及國防上に於ける島……九四
第四節　島と英雄及び聖人……九七
第五節　開明時代に於ける島……九八

第七章　半島及岬角……一〇一
第一節　半島の特質及成因……一〇一
第二節　半島と文明……一〇三

第三節　半島の配置并に運命……一〇八
第四節　半島の利用……一一二
第五節　岬角と人生……一一二
第八章　地・峡……一一三
第一節　地峡の種類并に地峡と人生……一一三
第二節　地塊に對する近世の努力……一一六
第九章　山嶽及谿谷……一二二
第一節　山の高度と人生……一二三
第二節　山の各部と人生……一二七
第三節　山の集合と人生……一三一
第四節　山脈の方向と人生……一三四
第五節　山脈の成因と人生……一三九
第六節　火山と人生……一四二
第七節　谿谷と人生……一四九
第八節　結論……一四九
第九節　開明人に對する山……一六九
第十章　平原……一七二
第一節　平原と人生……一七二
第二節　平原の區別……一七九
第三節　高原と人生……一八三
第四節　河谷低原と人生……一八九
第五節　海濱低原と人生……一九八
第六節　各種平原の分布……一九九
第十一章　河川……二〇五
第一節　概觀……二〇五
第二節　河の長・幅及深と人生……二〇六
第三節　速度と人生……二一二
第四節　河の方向と人生……二一五
第五節　河の部分と人生……二一八
一、上流　二、中流　三、下流　四、河口
第六節　河の人生に對する物質的方面……二三五
第七節　河の人生に於ける精神的方面……二三九
第八節　河の害……二四三
第九節　水源……二四六
第十節　開明人に對しての河……二四九
第十一節　河と土地……二五一
第十二章　湖沼……二五四
第一節　湖の特質と人……二五四
第二節　湖沼の成因及所在と人……二五六
第三節　湖沼と人生の物質的方面……二六〇
第四節　湖沼と人生の精神的方面……二七〇
第十三章　海洋……二七四
第一節　現勢に於ける海洋……二七四
第二節　海洋と未開人民……二七六
第三節　開明人と海洋……二七九
第四節　海國と島國……二八四
第五節　海流と人生……二九一
第六節　海洋と氣候……二九七
第七節　海洋と衛生……二九九
第八節　海洋と產業……三〇二
第九節　波浪及び潮汐と人生……三〇四
第十節　海洋と心情……三〇七
第十四章　内海及海峡……三一八
第一節　内海と人生……三一八
第二節　内海の配置……三二六
第三節　日本海とバルチック海……三四〇
第四節　海峡と人生……三四二
第十五章　港灣……三四四
第一節　港灣と人生……三四四
第二節　港の要素……三四八
第三節　港灣要素の人工的補缺……三五八
第四節　要素具備の程度によりて生ずる港灣の種類及階級……三六八
第五節　貨物の吞吐作用によれる港の區別……三八一
第六節　港灣の成因と要件……三八六
第七節　港灣の盛衰……三九二
第十六章　海岸……三九八
第一節　海岸線と文明との關係……三九八
第二節　海岸の種類……四〇三
第三節　砂岸と人生……四〇六
第四節　岩岸と人生……四一一
第五節　佳良なる海岸……四一五

第二編　地人相關の媒介としての

自然……

第十七章　無生物……四三一
第一節　無生物と物質的人生……四三一
第二節　無生物と精神的人生……四四五
第三節　無生物と文明……四五〇
第四節　岩石の種類及び成因……四五四
第五節　鑛物の產出狀態……四六六
第六節　有用鑛物の分布……四六八

第十八章　太氣……四七一
第一節　氣界と人生……四七二
第二節　水陸氣三界の相互關係と其分類……四七五
第三節　氣岸線と文明……四七七
第四節　空氣……四七九

第十九章　氣候……四八〇
第一節　氣候と人生……四八一
第二節　氣溫と人生……四八三
第三節　氣溫の分布……四九〇
第四節　風と人生……四九八
第五節　氣壓……五〇九
第六節　風の種類と人生……五一一
第七節　濕氣と人生……五一八
第八節　雲と人生……五二二
第九節　雨と人生……五二四
第十節　雪と人生……五二七
第十一節　降水量の分布……五三〇

第二十章　植物……五三二
第一節　植物の人生に對する實用的關係……五三三
第二節　栽培植物と人生及地……五三五
第三節　森林と人生及地……五五〇
一　森林の生業に對する直接効果……五五〇
二　森林の生業に對する間接効用……五五五
三　森林と國防……五五八
四　重要林樹と人生及地……五六〇
第四節　海藻類と人生……五六七
第五節　植物の人生に對する精神的方面……五七一
第六節　植物と文化……五七五
第七節　陸生植物の分布……五七七
第八節　植物の土質及地勢に對する分布……五八〇
第九節　海藻の分布……五八二
第十節　植物分布の原因……五八三

第二十一章　動物……五八八
第一節　動物と人生……五八八
第二節　獸類と人生及地……五九〇
第三節　鳥類と人生……六一一
第四節　魚類と人生及地……六一七
第五節　軟體類及殼皮類と人生及地……六二四
第六節　爬蟲類と人生及地……六二六
第七節　昆蟲類及甲殼類と人生及地……六二七
第八節　珊瑚及海綿と人生及地……六三一
第九節　動物と心情……六三二
第十節　動物と文化……六三四
第十一節　動物の分布……六三九

第二十二章　人類……六四六
第一節　人類の特質……六四七
第二節　人類の數及其棲息區域……六四九
第三節　人種及其分布……六五〇
第四節　人種の階級と其分布……六五六
第五節　各人種の優劣と其將來……六六一
第六節　人類の數量的分布……六六七

第三編　地球を舞臺としての人類生活現象

第二十三章　社會……六七三
第一節　社會とは何ぞや……六七三
第二節　社會と社會的團體……六七七
第三節　全體社會と部分社會……六八一
第四節　社會の心意……六八七
第五節　社會の進化……六九三
第六節　社會は有機體なりや……六九五

第二十四章　社會の分業生活地論……六九八
第一節　社會の各種活動……六九八

第二節　實業及政治……七〇二
第三節　宗教及其と地……七〇七
第四節　學術及其と地……七〇九
第五節　道德、教育及其帶と地……七一六
第六節　美術、娯樂及其帶と地……七二〇
第七節　社會の階級……七二三
第八節　各階級の配合と社會及地……七三五

第二十五章　產業地論上……七四〇

第一節　消費せんとする欲望と地……七四〇
第二節　生產業の種類……七四三
第三節　產業の發達……七四六
第四節　職業の身心に及ぼす影響……七五一

第二十六章　產業地論中……七六六

第一節　原始的產業と地……七六七
第二節　製造工業の性質及其分類……七七六
第三節　手工製造業と地……七七八
第四節　機械工業と地……七八三
一　製造業の各要素と製造地……七八五
二　將來の製造業最盛地……七九五
三　特殊製造業と地……八〇一

第二十七章　產業地論下……八〇九

第一節　商業地理及其原則如何……八〇九
第二節　交通機關の種類及要素……八一二
第三節　交通機關の發達及其各種の長短……八一四
第四節　交通手段の進歩と人生……八二四
第五節　交通の進歩と社會國林の變動……八二八
第六節　道路系統と地……八四〇
第七節　食物流通の徑路……八四八
第八節　食物流動の距離……八五五
第九節　食物移動の分量及時期……八五八
第十節　中心市場と地……八六一
第十一節　立國の基礎としての產業……八六二

第二十八章　國家地論……八六七

第一節　國家の職能及目的……八六七
第二節　國家の富强……八七四
第三節　國家の種類……八八一

第四節　國境……八九〇
第五節　殖民地……八九二
一　殖民地の意義及び原因……八九三
二　殖民の目的及び手段……八九六
三　殖民地の種類……八九九

第二十九章　都會及村落地論……九〇四

第一節　村落の形狀と地……九〇四
第二節　都會の意義……九〇九
第三節　都會の起原……九一〇
第四節　都會の發達地……九一二
第五節　都府の吸引力及盛衰……九二〇
第六節　都府の種類……九三一

第三十章　生存競爭地論……九三七

第一節　生存競爭單位の變遷……九三七
第二節　生存競爭形式の變遷……九三九
第三節　生存競爭の地的影響……九五一
第四節　生存競爭の程度と地……九五三

第三十一章　文明地論……九五六

第一節　現今文明の中心點……九五六
第二節　文明の中心點の移動……九五八
第三節　將來の文明中心點……九六六

結論

第三十二章　地理學の研究法……九七一

第一節　從來の記載的地理學の弊害……七七一
第二節　科學の研究法……九七三
第三節　地理學研究の順序……九七六
第四節　地理學の研究法……九七八

第三十三章　地理學意義及範圍……九八五

第一節　地理學の定義……九八五
第二節　地理學は科學なりや……九八九

第三十四章　地理學の豫期し得べき効果……九九三

人生地理學目次終

人生地理學挿版目次

六大強國權力一覽（附英國海上權力一覽）（卷首）……八八六頁及九〇〇頁對照
國際勢力分布略圖（卷首）……八八六頁及九四九頁對照
火山の活動……一四六頁對照
火山岩の風景……二二〇頁及四四七頁對照
山間湖并に喬木帶の風景……二五八頁及五七二頁對照
日本等溫線圖……四九一頁對照
日本氣壓及風向圖……五一一頁對照
世界人種圖……六五四頁對照
世界人口疎密……六六七頁對照
世界文明の中心……九五七頁對照

人生地理學

志賀重昂閲乘評
牧口常三郎著

緒論

第一章　地と人との關係の概觀

問題と吾人—吾人と世界—吾人と我國—吾人と郷土—世界遊觀の順序—地理學と吾人

問題と吾人

地と人との關係や、言ふ迄もなく非常なる大問題に屬せり。普に範圍に於て然るのみならず、深遠の程度に於ても、殆んど盡るべからざるものあり。從つて同時に至難の問題たるや又論を俟たず。然りと雖も、少しく其性質に考慮を回らすときは、これ決して吾人日常の生活に疎遠の問題にあらざるのみか、吾人が實際に孜々營々、解釋に熱中しつゝあるものなるを觀

るべし。否な當に熱中しつゝあるのみならず現に吾人は不知不識、不充分ながらも相應に之が解釋をなして各自を此理法に適應せしめ、以て此世に生活しつゝあるを觀るべし。是に至つて最早此問題の要否は問ふに遑あらず。唯夫れ不明瞭のみ、無意識のみ、果して然らば、大は乃ち大難、難は乃ち難なりと雖も、未だ以て容喙すべからざる範圍として、俄かに絶望すべきにあらざるや明けしいてや吾人は此理由の下に此必要に促かされ、敢て聊か之が解釋に冒險を試ん乎。請ふ吾人をして心意發動の自然の順序に隨ひ、日常生活の最も卑近なる事實の觀察よりして、徐ろに歩を進めしめよ。

吾人と世界

明治三十三年度に於ける毛布及毛綿布の輸入價額約一千八百萬圓弱、其中英國よりの分約六百萬、他は仲國、西班牙、瑞西の諸國にかゝれり。佛蘭西產は殆んど唯スリンのみにして英國の產は羅紗、フラネル、其等の綿入、イタリアンクロース、セルヂス等なり。同年度に於ける皮類の輸入價額約三百萬圓、其中靴底皮は凡百萬圓、其入割は北米合衆國にして他は英領印度、濠洲等、熟皮類は約百十萬圓、其五割は英領印度にして他は北米合衆國、英國、佛の產にかゝれり。

素と之れ荒濱の一寒民、漂浪半生を衣食に徒消して、未だ些の世上に貢するものなし。然るに一度想を此微賤の身邊に注げば、端なく無量の影響に愕然たらずんばあらず。五尺の痩軀に纏ふ一襲の絨衣、是は之れ粗なりと雖も、蓋し南亞米利加若くは濠洲の產する所にして英人の勤勞と其國の鐵と石炭とによつて成る所。五寸の痩蹠に穿つ一足の短靴、是は又、陋と雖も、蓋し其底皮は北米合衆國の產する所にして、其他の革は英領印度の出す所。之を記して頭を搔くれば、耿々たる一穗の寒燈、又無言の裏に語る、高加索山端、裏海の畔に湧出し、一萬浬外に運搬せられて爰に至ると、燈光を調節して視力の缺を補ふ眼鏡の小玻璃片、又獨逸國民の精巧と熟練とを想起せしむ。細民の寒夜、一瞬の生活、多く思慮を用ひずして、猶ほ且心頭に浮ぶ所のもの既に此くの如し。今若し、此等の原料が牧畜せられ、採掘せられ、蒐集せられ、製造せられ、運搬せられ、賣買せられ、漸くにして吾人の身邊に達する其間の力と時とを想像するとき、又此等有形の物に警醒せられて、更に無形の影響に想及するとき、即ち平素に於て些の感覺だもなくして經過したる單調なる半生が、此廣大なる空間と時間との絶大の影響の燒點に於て遂げられたりしとこに想到するときは、驚倒せざらんとするも得べからざるなり。余が一見生れて母乳を缺く、乃ち牛酪を以て之に代ふ。ときに屢次邦製の粗品に懲り、醫師に請うて漸く瑞西牛酪を選定し得たり。是に於てか最早ユラ山麓の牧童に感謝を拂ふべきを知る。轉じて其

の老媼が賣る饅頭の皮は米國西部より來る麥粉を以て製せり、農民の使用する肥料中支那より來る豆の油粕あり、印度洋中のクリスマス島より來る鳥糞の燐鑛と化せしものあり、南半球の濠洲より來る骨粉あり、北米のシカゴより來る乾血あり、南米の智利より來る硝石あり、斯の如く世界の物

が一襲の綿衣を見る、忽ち黎黑なる印度人が炎天の下に流汗を拭きつゝ栽培せる綿花を想起せしむ、野人微賤の一子女、呱々一聲既に々々命世界に聯るにあらずや。

吾人が本論の端緒として、殊更に區々たる私人の細事を敢てする所以のものは、これ吾人の心意發動の實際の順序にして、現時に於ける最小の單位と見做すべき埋汲的生活に於て猶ほ且つ然るが故に、其れ以上の生活は以て容易に類推し得べければなり。

若し夫れ阿剌比亞の肥馬に跨り、里昂の輕裘を纏ひ、カシミルの毛織に暖を採り、ベーリング海邊の毛皮に寒を防ぎ、パナマの帽子に暑を凌ぎ、南洋諸島の香料に疲勞を慰し、トランスバールの黄金を積み、アマゾン河畔の寶石を飾るの躰に至りては、是れ實に顯著に三帶の氣候を以て其躰溫を補ひ、五州の土壤を以て其身軀を肥し、五色の人種を以て其寄血に供する者にあらずして何ぞや、斯の如くにして吾人は生命を世界に聯け、世界を我家となし、萬國を吾人の活動區域となしつゝあることを知る、而して之は實に二十世紀の開明に際會したる吾人の爲さゝらんとすとも殆んど

品は山陬水涯と雖も假借する所なく國入し來れり、此間の消息を解せば、地と人との關係を悟るならんか。

吾人と自國

得べからざる所にして、又た當に爲すべき所のものなるを知る、然るを何等の痴漢ぞ、敢て自から其限界を狹限し、徒らに古來の障壁に拘泥し、蝸牛角上の小國に忙殺せられつゝあるや、但し吾人は單に此理由を以て彼の所謂、汎愛盧妄の世界主義者に雷同するの弊に陷るべからず、之が爲には尚ほ緊切なる觀察の一方面あるを忘るべからず。

吾人が世界に負ふ所、斯くの如しと雖も吾人は更に層一層親密に常住に、而も鴻大なる恩澤を享受しつゝある國てふ狹き一區域あることを記せざるべからず。想うて茲に至れば、前に列擧したる世界の恩澤の顯著特段なる事實は、偶、以て國恩の濃且つ深の更に幾層倍なるかを感動せしむる所以の一階梯たるに過ぎずと觀るを得、何となれば國恩や餘りに親近に、且つ餘りに常住なるがゆゑに、平時に在りては、往々國民に邊視せられ、却つて奇異特段なる、而も之に比すれば、僅に一小部分に過ぎざる對外關係の事實によつて醒起せらるゝを常とすればなり、此事や往々夫の海外と特殊の關係を有する偏見者流をして、較もすれば外國崇拜の過誤に陷らしむ

るに足る所のものにして、國民の須らく警戒すべき所、吾人は顯著格段なるがゆゑに、一小部分に眩惑して隱微常住なるが故に、一大全部を忘却すべからざるなり。且つ夫れ近世の文明は、人類生存競爭の舞臺を擴張して、世界の全面に開展せしめたり。蒸氣と電氣との二大動力は、地球を距離に於て縮少し、時間に於て短減し、世界を打つて一丸となしたり。去れば往昔小規模に、各部落の間になされたる競爭は、今や大仕掛ケの國際的競爭となれり。是に於てか萬國比隣、國と國、人種と人種、虎視眈々、苟くも些の罅隙あらば、競ひて人の國を奪はんとし、之が爲めには横暴殘虐敢て憚る所にあらず、以て所謂帝國主義の理想に適へりとなす。而して此間に於ける法律と道德との制裁如何と顧みれば、人の物を盜むものは盜として罪せらるゝも、人の國を奪ふものは却つて强として畏敬せらるゝ時世におらずや。此間に立ち、外は以て列國の爪牙に防衛し、内は以て個人の自由を認め、生命財産を保護し、吾人をして高枕安眠の生活を遂げしむるものは、夫れ唯自國あるのみ。吾人が狹隘なる國家主義の一極端に偏すべからざると

吾人と鄕土

共に汎愛虛妄なる世界主義の他の極端に陷るべからざるは以て觀るべからずや。

斯の如くに吾人は自己の立脚地點を定むべしと雖ども、吾人は又、夫の徒らに其聲を大にし、國家問題の標榜の下に衣食せんとする、浮薄なる慷慨家の愛に倣ふを警めざるべからず。而して之が爲めには尙ほ又一の緊切にして親密なる、而も根本的なる一段の觀察方面あるを忘るべからず。他なし、各自の鄕里是なり。吾人は三千三百萬方里の世界に於て棲息するに先つて、二萬七千方里の自國に於て棲息するものなるを覺ると等しく、二萬七千方里の國に於て衣食するの前に、數方里乃至數十方里の鄕里に於て衣食しつゝあることを覺らざるべからず。斯くの如くなして、初めて吾人は數百乃至數千の一鄕民たるが上に、五千萬の一國民たり、而して尙ほ十五億萬の一世界民たることを自覺するを得べし。即ち吾人は鄕土を產褥として產れ、且つ育ち、日本帝國を我家として住し、世界萬國を隣家として交はり、協同し競爭し、和合し衝突し、以て此世を過しつゝあるものなる

世界觀と吾人生活

地理學と吾人

ことを自覺するを得べし。吾人は茲に至つて初めて自己の正當にして着實なる立脚地點の自覺に達するを得べく、從つて又自己の正に務むべき職分を確定するを得べし。果して然らば此順序此階段及其起發點として、の鄉土觀察が公平に世界を達觀する上に於て將た正當に各自生活の立脚地點を自覺する上に於て缺くべからざるは最早別言を要せざるべし。若し夫れ公平なる世界觀と、正當なる立脚地點の自覺とが、吾人の生活に缺くべからざるに至つても、亦特に多言を要せざる所。想ふに個人として も、國民としても、最も此點に明瞭なる見識を有する者にして、初めて正當着實なる行動に出づるを得べく、從つて世界の角逐場裏に於て、必勝を期するを得べく、又世界の共同生活舞臺を指導するを得べし。果して然らば、此の强壓の中に於て生活しつゝある個人に對しても、國民に對しても、之れ程必要なるものはあらざるべく、從つて又此の見識を與ふるに最重なる學科ほど、人生に重要なるものはあらざるべし。地理學は此の嘱望を負うて生れたるものにはあらざるか。然り地理學が此點に於て多大の嘱望

土井利勝の地人觀

を今尙ほ荷ひつゝあるは疑ふべからざる事實なり。唯夫れ從來の地理學に在りては今尙ほ一大疑問に屬するが如し。否、或點に於ては既に疑問の境を經過して失望の域に達せりとして社會に待遇せらるゝにはあらざるか。是豈地理學本然の面目ならんや。されば、吾人は以上の觀察によりて、世界の公平なる達觀と、各自の正當なる立脚點の自覺とに缺くべからざる順序を知り、又鄉土觀察が此順序に於ける最始起點たるを知れり。茲に至つて吾人の問題は、最早鄉土觀察の實行如何に到來せりと謂ふべき歟

ある時、土井大炊頭の居間に、一尺ばかりなる唐絲の切れたるがありしを拾ひ、「次ぎに誰れかある」と呼ばれ候へば、大野仁兵衛と申す近習の士まかりあり候得ば「これをその方に預けおく」と申さる。彼の者、かしこまり候と、その絲をうけとりまかりたつを、次ぎの間に居りし若き者ども「あの絲屑何の用にか立つべきぞ、大名に似合はぬなどゝひそ〳〵笑ふものもありしとなり。その後二三年も過ぎて、大炊頭かの仁兵衛を呼び「先年その方にあづけ置きたる絲切れは」と尋られければ「これに候」とて巾着より取出だし候へば、取られ候て、脇指の下げ緒のとけたるを結びて、家老を呼びて「これを見よ。三年前に、仁兵衛に唐絲の切れなひろひ預けおきたり。外の者ども、我等を咎きものといひ、あの絲切れが何

一尺の絲屑三百石

地理教授の好模範

天道のとがめ

此覇彼をして明相たらしむ

の用に立つべきやと、笑ひしものも多かる中に、主の目ひ付けたることを大切に相守ること奇特なり。仁兵衛に三百石をとらすべし」と申渡さる。さて「此の絲屑の大切なるわけを語り聞かすべし。此の絲は元來唐土の土民の手にて桑を取り蠶を飼ひ蚕ひ、絲となし、唐土の商人の手にわたり、はるかの海上を經て吾邦へ渡り來り、長崎表の町人の手にかゝり、さては京大阪のものども買取り、つひに江戸まで下り候ものなれば、その人力いかばかりかとおもふぞ。さやうの辛勞にて出來しものなれば、少しなればとて、座芥となしてすつるといふは、天道のとがめおそるべきわざなり。今下緒の先をくゝりたれば、愛ゆるといふにはあらず。我れ一尺の屑絲を、今、三百石に買取りたるぞ」と申されしとなり（古老雜話）。

不可思議なる勢力

第二章　觀察の基點としての郷土

不可思議なる勢力――郷土の範圍――郷土觀察の重要――郷土の要素

旅枕宿りは夜々にかはれども結ぶは同じ故郷の夢　（林　友直）

げにや、他郷客遊の士には、故郷程懐かしきものはあらじ。唯夫の生れて郷土に衣食し、郷土を出でざる者にありては、其關係の餘りに親密に、而も常住なるが故に、恰も海外特殊の影響に警醒せらるゝ迄、國恩の濃且大を看過するが如く、平時に於て何等の感覺もなく經過するを常とすれども、一たび決意郷關を出づるに於て、忽ち懐郷の念の湧然として胸中に迸出するは之れ人情の免るゝ能はざる所、されば

青海原ふりさけ見ればかすかなる　三笠の山に出でし月かも　（阿部仲麿）

と、唐朝三代の寵遇を受け、顯要の地位に居り、得意なりし人に於て、猶ほ爾り。況んや其他をや。

花は根に鳥は古巣にかへるなり春のとまりをしる人ぞなき（千載集）

少無通俗韻。性本愛丘山。誤落塵網中。　陶淵明

一去三十年。羈鳥戀舊林。池魚思故淵。

二

曾に郷土に於て好遇せられ、豪奢を極めたる富裕顯貴の輩のみならず、郷土に於て最も薄遇せられ逆待せらるると見ゆる未開の人種に於ても猶ほ然るものあり。

曾ゝ島や南洋諸島の間なる一頃の噴火島、爆然轟裂火光烈々天日を焼き、石を降らし灰を散し、島中の人畜殆んど斃れ盡く、僅に十數人の船を艤して、災を八丈島に逃れたるあるのみ。而も此十數人、覓に其の噴火島たる古郷を遺却せず、火の熄むを待つこと十三年。乃ち八丈を出て欣々乎として、其の多災なる古郷に歸りき。占守や窮北不毛の絶島（千島の内）層氷極雪の處のみ、後開拓使有司の其土人を南方色丹島に遷徙せしむるや、色丹の地、椶櫚青蒼、落葉松淡かに、黒狐三毛狐其麓に躍り躍り、流水涓々として處々に駛り、玉蜀黍穫べく、馬鈴薯植うべく、田園を開拓する者は賞與の典あり、而も遷徙の土人、新樂土を喜ばずして、歸心督促三々五々、時に其窮北不毛の故島に返り去る云々（日本風景論）

吾人は例を遠きに需むるに及ばず、東京若くは北海道等の全國人集合の地に於て、年々何縣懇親會と云ひ、或は舊某藩親睦會と稱して、故郷を同う

故郷は遠まて人をさしにけり（一茶）

するものが、相集會し、一夕の快談に、其羈旅の情を慰するが如きは、現に吾人の屢々遭遇する所にあらずや。試に是等の人に對するに、何故に爾く郷里を戀愛するかの疑問を以てせんが、恐らくは何人も即答に苦しむ所なるべし。或は曰はん、父母親戚及び舊友の在るありと。之れ大なる理由ならん。然れども以て盡せりとすべからず。一郷擧つて移住したる青ヶ島の居民若くは占守島の土人の心情を説明し能はざればなり。或は曰はん、江山洵美是吾郷（大槻磐溪）と猶ほ以て全豹を説明するに足らず。却つて氣候和順風物新鮮の新樂土を喜ばずして、窮北不毛の故土を慕ふものあればなり。然らば則ち郷土なるものは吾人人間に對して一種不可思議の勢力を有するものと謂ふべし。

嗚呼此不可思議の勢力や、曾に人間の懐郷心を刺戟する吸引力たるのみならず、同時に「男兒立志出郷關、學業不成死不還」といふが如き丈夫をして憤然起たしむる反撥力たるなり。加之渠は暗々裏に絶えず笈を他郷に負ふの遊士を刺戟し警戒し、彼をして成効せしめずんば止まず。曰く「錦衣歸

郷土人は是によりて憤勵し立身し、榮譽と幸福とを荷うて、歸らんと孜々たり乃ち知る郷土の不可思議なる勢力は吾人をして他日國家的世界的の活動をなさしむる源力たることを吾人が郷土に負ふ所重且大なりと謂ふべし。不知吾人は如何にして此鴻恩に酬ゆべきか先づ不可思議の勢力を研むるは、之れが報恩を講ずるの第一着歩たるなり。

郷土とは何ぞや、其範圍は觀る人の立脚地によりて異る、若し夫れ父母の膝下を離れざる幼兒に對しては、彼れが朝夕相接する家族と近隣少數の子女の外は、皆彼を恐畏せしむる外敵たり、此時期に於ける彼の郷土は即ち其居室、其房厨、其庭園に外ならざるなり、郡中に高等小學校あり、其生徒各村より集る、偶々甲村の少年が乙村の少年を侮辱せんか、茲に兩村の少年、相團結して所謂小郷黨の爭鬪を演出すること珍しからず、此時に於ける彼等の郷土觀は、其屬する一小部落たるなり、北海道に東京に年々開催せらるゝ何縣人、何國人の懇親會は前述の如し、然るに其集まる所の多數は雷に郷里に於て一見の識なきのみならず、其苗字さへも耳にせざる所のもの、此間に在りて、彼等の情誼を融和するものは、僅に各自の記憶に存する故郷訛語あればのみ、此時期に於ける郷土觀は、實に一府縣一地方、一舊藩なりとす、倫敦街頭に歩す、銅色人種あり、黑色人種あり、將た禽色人種あり、而して滿都の人々概ね紅髯碧眼の白晳人種ならざるなく、其言語、風俗、宗教、習慣感情等、一として怪ならざるなし、四面楚歌の此境にありて、衷心誰か多少の恐怖なからむ、此時に當り萬綠叢中紅一點、國音を談じ、郷國を語るの邦人に邂逅すれば、無量の歡喜を以て之を迎ふるは、之れ洋行客士の眞情なりと、焉んぞ知らん其人々は未だ曾て其姓名だに知らざる恰も越人の楚人に於けるが如かりしならんとは、仍て知る、此時の郷土觀は、正しく一國に在るを若し夫れ現世を假托の寓居となし、來世こそ永遠安樂の故郷と觀ずる宗教家の郷土觀に至つては、又別に特殊の者となす、郷土なる各人の觀念が、其人の位置の異るにより、霄壤の相違あること、斯の如し、此中に於て、吾人が茲に日本及び世界の地理を了解するの第一歩としてそれ等に應用せらるべき、原理を得んがための、即ち日本帝國を我家と

本論に於ける鄉土の範圍

せる吾人が產褥としての鄉土は其範圍自ら定まれり。即ち心身生活の直接影響區域詳言すれば吾人の定住する處吾人の跋涉する處吾人の目睹する處吾人の耳聞する處吾人の感動する處吾人の働作する處之れなり。猶ほ未だ各人の生活範圍に應じて其間に自から意義の差違は免るべからざらんも兎に角直接觀察の及ぼし得べき範圍と略定して不可なから、ん。惟ふに是れ邦人の最も普通なる鄉土の概念なるが如し。但し斯く畧定するも眞正に一般原理を締納せんには少くも世界の現象を通覽し、汎く資料を蒐集したる上に於てせざるへからざるが故に、隨時例證を世界に需むべきは辯を俟たざる所。要は虛妄の概念に陷らざらんが爲めに總ての議論の基礎を鄉土の直接觀察に置かんとするにある也。

鄉土觀察の重要

吾人は本書に於て論せんとする舞臺を、此の如く制限したりと雖ども、少しく秩序ある注意を以て視るときは無限の材料が其間に森羅するを發見すべし。廣大なる天地の狀態は實に此猫額大の一小地に於て其大要を顯はせりされば萬國地理に現はるゝ複雜なる大現象の概畧は、粗ぼ之を

鄉土觀察の深意

僻陬の一町村に於て說明すること、難からず。既に一町村の現象によりて鄉土の地理を明にせんか、依て以て萬國の地理を了解すること容易なり。是れ吾人が地理學研究の順序として先づ鄉土の精細なる觀察をなし、一般の地理的現象に適用せらるべき原理を締納し、確定せんとする所以なり。之を以て卑近淺薄なる地理學初步の課業と輕蔑し去る勿れ。吾等多數の凡人が此深趣ある基礎的觀察を怠りて、たゞ書籍にのみ維れ拘はり、徒らに記憶力のみを勞し、從て讀み、從て忘れ、厭又倦、而して其罪を悉く地理學其者の性質に歸して、自己が沙上に樓廓を築きつゝあるに氣付かざる間に少數の偉人は、徐かに其間に於て研究し、修養し、成就し、奏効し、以て大業を遂げつゝありしなり。近世に於ける理學の大家アガッシーは其鄉里瑞西ニューシャテル湖に於ける幼時の釣遊によりて、動物學上の大發見をなしゝにあらずや。中世詩人の鼻祖たるダンテは一步も鄉土を陷み出でずして大詩人たりしにあらずや。カーライルがダンテを論せし中に曰く、

「彼れ精細に周圍の事物を知る。然ども當時未だ印刷の書なく、又交通の自

由なきを以て、遠地の事物を知る能はず、近きに對して赫々たる一小光も遠きに存ずる物を射ては憐れ朦朧の觀を呈せり。是則ち彼れが學校内の識得也、と雷に此種の偉人のみならず、學問嫌ひを以て兩親を困らせたる彼、土得大帝は其狹隘なる鄉里の湖上及び山野の遊戲に於て、豪傑たるの資を得たりとかや、是唯だ一例のみ。されど吾人は之を以て僅少稀有の天才の得て爲す所、凡人の企て及ばざる所と速斷すべからず、賢と云ひ愚と云ふ、結果に於てこそ非常なる差異はあれ、其源に溯上すれば其距離極めて近し。而して其差異の依つて生ずる所を詮じ詰むれば、一が「靈慧なる觀力を以て外界を觀察し、能く物の要點を把捉して、其枝葉を棄て、能く事物の皮相を棄て、眞相を達觀し、以て天地萬物に伏在せる内部の調和を觀、粗俗の外形に包含せらるゝ自然の妙想と其意義を察し、誠意正心、造化に直觸して其神髓を闡發せんとする」に、他が「鈍眼以て外界を邊視し、事物の皮相と眞相とを辨別する能はず、要點と枝葉とを取捨するの能なく、一樣平等に逼迫し來る外界に應接せんとするが故に、遂に外界に忙殺せらるゝを以てなり。斯の如くにして彼等は獨立に自然との交渉を絶望するに至り、止むを得ずして書籍に手據り、間接に自然に接觸せんとするに至る。而も終に書籍堆裏の蠹族となり、所謂萬卷を破りて後茫然として殆んど讀まざるの初めに等しからざる者尠し。而して斯の如き者の滔々世間に滿つるは掩ふ可からざる事實にあらずや。

顧れば造化が此一小黑子の地に天地間の大現象を顯はし、あらゆる方面より人間に交渉を求むるが如きは驚歎するに餘ある所、四周の自然現象が至る所多樣の形狀を以て吾人を啓發し、吾人の智力を養成し、其家族、其朋友、其鄉人、其學校、其團躰等が、又夫々吾人の趣味を喚起し、吾人の心情を涵養して止まざるが如きは以て證するに足らずや。宜なる哉、慈愛、好意、友誼、親切、眞摯、質朴等の高尚なる心情の涵養は鄉里を外にして容易に得べからざるとや。偉人と、小人の相分るゝ重要原因が、右の如しとすれば、其責を鄉土の狹隘と僻陬とに歸すべからざるや。明けし着眼、其要を得觀察、其法を得れば偏狹なる一鄉里も吾人に影響すると夫れ此の如し。況んや一

度他郷を遍歴して、更に廣く材料を需むるをや。吉田松陰は其半生を道途に費やし、足跡を殆んど全國に印し、之れに依つて空漠たる政論の横行する當時に於て着實なる見識を養成したりしなり。聞く獨逸聯邦の建設の計畫は老將軍(兼地理學家)モルトケ伯が、壯年の頃歐洲全土を遊歷し、ドナウ河邊に客たりしときに胸中に案出したるものなりと。皆實際の觀察によりて活地理學を攻究して得たるもの、誰か云ふ郷土の觀察を卑近にして淺薄なりと。故に吾人は重ねて言ふ、人間が他日大社會に出て、開かるべき智德の大要は實に此小世界に網羅し盡せり。若し能く精細に周圍の事物を觀察せんか、他日世界を了解すべき原理は茲に確定せらるべしと。既に郷土の概觀をなし、又郷土觀察の必要を論せり。以て郷土が人間に及ぼす不可思議なる勢力の概要を知るを得べきか。然れども尚ほ未だ一斑のみ。吾人は進んで郷土は如何なる要素より成りて、不可思議なる勢力を人間に及ぼすかを探究せざるべからず。郷土を出てずして大詩人となりしダンテは前例に擧げたり。カーライルは彼が如何にして斯かる發達を

郷土の要素

なしゝかを説明して左の如く斷せり。素と寛大の度量に非ず寧ろ狹隘且つ偏執にして而かも一派の游離に僻す。是れ一は時代に關し境遇に關して、又た吾人が心意の分析と一致する所、而して英雄ならずとも等しく其の影響を免るゝ能はざる所。其の中、自己の天性は、是れ人間發育の根本的條件なりと雖ども、又外界の要素に影響せられて發育するものなれば、吾人は不可思議なる勢力の外界要素を時代と境遇との二部門に大別するを得べし。然るに之は地理學上の區別たる自然現象と、人文現象との二大部門と粗ぼ一致するものゝ如し。何者、時代を社會的事情と解するは是れ一般の異論なかるべき所、之に對すれば境遇は自然的事情と解するを得べけれぼなり。更に其細目に至りては、以下各章に於て順次細觀せんとする所なれば、茲には單に概要を説明する一二の説を引用するを以て足れりとせん。即ちバックル氏が社會の建造進化の説明は之を自然力に索むべしとの説に、氣候土地、食料及び其天然觀は、智識進歩の首要的原因な

要素の二大部門

其細目

五、氣候土地、食料は富の蓄積と分配とに關するを以て天然觀は智識の開發及び分配に直接の影響を有す」といひたるが如き、或はスペンサー氏が社會進化の外界の要素(即ち其中に個人が生存する狀態)の重要なるを認め、外界の要素として氣候、即ち寒暑乾濕の恒同性變易性、地表の圓形異狀地味の肥瘠、五穀菜蔬の種類及び分量の盈缺、有利又は有害なる羽毛の多少等を數へしが如き是也。依て以て郷土要素の細目の一班を知り併せて以下攻究の順序の大躰を知るを得べけん。請ふ以下各個要素の細觀によりて、不可思議なる勢力を闡明し、依りて以て國家及世界を了解するの原理を確定せんか。

參考要書―志賀重昂氏「日本風景論」第一章▲(ルマンケルン氏「教育學」(山口小太郎氏譯)第六章▲トーマスカーライル氏「英雄崇拜論」(佳谷天來氏譯)第三篇及第五篇▲メーヨースミス氏「社會統計學」(吳文聰氏譯)第五章▲ゲーキー氏地理學教授法(渡邊修治氏譯)第一章▲ギッデンクス氏「社會學」(遠藤隆吉氏譯)第二編第一章第一節

第三章　如何に周圍を觀察すべきか

地人は如何に交渉するか

地人は如何に交渉するか―肉体的交渉―精神的交渉―知覺的交渉―利用的交渉―科學的交渉―審美的及道德的交渉―經驗と交際―同情的交渉―公共的交渉―宗教的交渉―諧般の交渉―其程度―社會と諧般の交渉―結論―吾人の着眼點―郷土要素取捨の標準―地理學の範圍

以上世界を總觀するの基礎として郷土觀察の缺くべからざる所以、并に郷土の範圍及其要素を概觀したり。今や郷土に於ける各要素の探究に入るに當りて、茲に尚ほ一の根本的問題の横はるあれば、暫く吾人の注意を之に分つは遊くべからざる順序となす。

周圍の各要素を如何にして觀察するかの問題是なり。吾人は之を「地」と「人」とに分つ。「地」とは如何に交渉するものなるかの事實を確むるによりて解決するを得べし。地人關係の概觀は既に劈頭に於てなしたる所。即ち人間は地上に生れ、地上に棲息し、地に育せられ、地に啓發せられ、地上に活動し、地を利用し、遂に地に死骸を遺して逝く。這般の事實を概括し、且つ吾人研究者の採るべき順序を示したる者を吉田松陰の一句となす。曰く「地を離れて人無く

人を離れて事無し、人事を論ぜんと欲せば先づ地理を審にせざるかべらず、と能く兩者の關係を言ひ表はして餘蘊なしといふべし、然れども吾人が以下各要素の觀察の基礎としては尙ほ少しく細觀する所なかるべからず、假令問題は心物、兩界に亘りて頗る幽玄容易に知るべからざるものあるにもせよ、吾人は出來得る丈けの忍耐を費やさゞるべからず。

以上の簡略なる說明によるも吾人の身心が外界に交涉することの如何に千態萬樣なるかを知るを得、此多樣にして且つ複雜なる交涉を彙類することは固より至難のとに屬するや論なし、然れども省慮一番、此等多端の關係を比較考察するときは其間に自ら異同の發見せらるゝあり、先づ次の二種に概括せらるべきを觀るべし、肉躰的交涉(一)及び精神的交涉(二)是れなり、或は之を物的及び心的、若くは生理的及び心理的の名稱に代ふるも妨げず、人間が地上に生れ、地上に棲息し、周圍の影響を受けて生長し、或は不知不識の間に外界に反動し、以て或る變化を周圍に與ふるが如きは、全く精神的交涉をなさずとはいふ能はざるも、其直接する所は身躰

肉躰的交涉

精神的交涉

自然界に對する精神的交涉

にして、平時に在りては殆んど精神の與り知らざるを常とすると、全く動植物の地に對すると異なる所なければ、之を他の一種に對して、姑らく肉躰的若くは生理的の交涉と見做すを得べく、之に反して人間の精神が、外界によつて警醒せられ、周圍によつて啓發せられ、或は故意に地上に活動をなし、外物を利用して自己の力に服從せしめ、外界に或る變動を與ふるが如きは、固より肉躰の媒介なくしては能はざる所と雖ども、其主として直接に影響する所は、身躰よりは寧ろ心意に在るが故に、前者に對して、精神的若くは心理的の交涉と名づくるを得べければなり。

一歩を進めて精神的交涉を考察するときは、又非常に多樣複雜なるを觀るべし、均しき野外の景色なり、然れども小兒は其快濶なるを喜びて狂ひ廻はり、常人は其風物の新鮮なるに日常の苦腦を忘れ(1)農夫は作物の發生の模樣によりて收穫の如何に其心を勞し、商人は又其成熟の如何によりて相場の變動に喜憂し、軍人は其地勢を相して攻守の用に利せんとし(2)地質學者は地層の模樣、化石の存否によつて其地の發育を尋求し、博物

人事界に對する精神交渉

學者は動植物を採集して其研究の資料に供し(3)詩人は其景色の齎らし來る詩興によつて詠唱し、畫師は其美景を把へ歸つて其の作の資料となし(4)將又多年他郷に客遊の歸省者は其山川丘谷を恰かも舊友の如く親しみ(6)而して此種の尙ほ發達したる人士にして、社會を自覺し社會に同情を有する憂世家は其が郷民の生活に大なる幇助を與へたるを感謝し(7)宗教家は其一草一木と雖ども造化の無盡の勢力の發顯したる者として敬虔の念を生じ(8)以て各〻其長ずる所に從つて、特殊の精神的交渉をなし滿足するなるべし。單り自然界の事物に於てのみならず、人事界の現象に於ても、亦た其れに對する人々によりて其交渉の方面を異にするを觀る。加之、人間及び其他の有情物に在りては、以上各方面の交渉の他、恰かも自然物が美醜の感を起さしむると同樣に、善惡の判斷を促し、之を褒貶せしむる一方面の交渉(5)の加はるを觀るべし。尙ほ又、有情物に對しては同情者憂世家、宗教家等の情的交渉は、彼等が自然界に於てなしたるよりは、更に顯著に且つ濃厚に遂げらるゝを觀るべし。

各個人の多方的交渉

吾人は、又、周圍と、人間との、交渉は、各、異、特殊の、對手、によつて、夫々、多方面、に、なさるゝのみならず、一個、同一の、人に、對して、も、時を、異にする、に、從ひ、或は、境遇を異にする、に、從ひ、或は、殆んど、全時に、以上の、數方面、若くは、全方面の、交渉を、なす、こと、ある、を、觀る。少しく多方面に發達し、數種の趣味を有する人士に在りては、殆んど全時に諸種の交渉を遂ぐるは決して珍しからざる所なればなり。

依て知る周圍は之を求むる對手の如何によりて限りなく種々多樣の交渉をなすものなることを。斯の如く觀じ來れば、外界と人間との精神的交渉も、殆んど際限なきが如く、從つて之が彙類は更に困難なりと雖も、而も吾人が右に於てなしたる概括の考察を適用するときは、左の數種に彙類するを得べし。

知覺的交渉

一 知覺的交渉　前例の野外に於ける子女及び常人の觀察の如きは、此種の交渉に屬せり。此等の人々の外界に對する觀察は、單に其の複雜多趣なるに奇異の念を起し、進んで其名稱を尋ぬる位に留まりて、甚だ淺薄輕浮なるが故に、他の

- 知覺的交渉……(1)
- 利用的交渉……(2)
- 科學的交渉……(3)
- 審美的交渉……(4)
- 道德的交渉……(5)
- 同情的交渉……(6)
- 公共的交渉……(7)
- 宗教的交渉……(8)

（(3)～(8)：経驗）（(7)(8)：交際）

多少深厚なる交渉に對比すれば、之を又別に通俗的若くは見聞的の交渉と名くるを得べし。さはいへ此種の交渉は決して輕視すべきものにあらず。蓋し之れ他の高尚なる心の作用の基礎をなすものにして、從つて更に濃厚なる他種交渉の端緒たるを以てなり。若し夫れ小閑を得るに乘じて日常營々たる單調無趣味の生活をなしつゝある都門の俗塵を脫し、暫らく一身を綠陰水邊の靜境に轉じて、意の懲ふ所に恣にせんか、吾人の心思は周邊より內迫し來る所の山水、風光、風俗、慣習等の新鮮奇異なるに恍惚として宛から仙境に在るが如くなるべし。即ち之れ、吾人の心界が從來のものと全く一變して、新鮮の多趣なる外界現象に驚駭したるものにして、心意は此等新奇の現象に挑發せられ、不知不識、此現象に注目し、之を觀察し、之を經驗し、依て以て心中に一段の新智識を加ふるなり。即ち從來昏睡の狀態にありし心意が夫等の爲めに醒起し傾注して、茲に智的交渉を遂げたるものなり。斯くて吾人の心意は之を以て停滯せず、更に他の心界に移ると全時に心界の缺乏を滿足せしめたる愉快を喚起し、尙ほ此愉快を繼續せんとするを常とす。所謂好奇心と稱するもの是なり。

二 利用的交渉

前例の農夫が收穫を求むるに心思を勞するが如き、商人が相場の上り下りに苦慮するが如きは、等しく各自の生存の爲めに、外界を利用せんとする點に於て一致し、全時に前後の他の交渉と區別せらるべきものなるを以て假りに利用的交渉と名づくるを得べし。尤も利用に相對したる反面の、人間の生存に毀害を與ふるものを排除し、忌避することも、全く全種類の心の作用と見るを得べきものなれば、此意味を含蓄せしめんが爲めには、利害的交渉と云ふを適當どせんか。ともあれ、此種の交渉は外界、殊に地と人類との關係の最も重要なるものなれば吾人は等閑に附すべからざる所のものなり。造化は人類を生存せしむるに當りて、其生存上に有利の事物のみを提出せず。中には有害の事物を混じて之を苦めつゝ如し。之が爲めに人間は造化の此警戒に啓發せられ自己の經驗と祖先傳來とにより得たる標準(法則)によりて之を判斷し、利者を好み、害者を恐れ利者を愛し、害者を惡み、遂に前者に就きて後者を遠け、前者を使用し後者を棄拋し、前者を增大せしめ、後者を滅亡せしむるの働作に及ぶ。吾人が依て生命を維持する實業上の働作は、即ち直接の利害的交渉なり。

科學的交渉

三科學的交渉　吾人の心意は嘗に現象の新奇に警醒せられ、之を見聞し、之を經驗するに留まらず、少しく發達したる者にありては、更に此等の多種複雜なる事物相互の間に、神秘幽玄の關係ある事に驚愕し、進んで其因果的關係の理を探究し考察せざるを得ざるに至る。是れ實に外界現象相互の間に存ずる幽妙不可思議なる關係が吾人の心意を驚起せしめ、吾人の心意は之によりて啓發せられ、之を推究し、之を考察し、異同を辨別し、差等を比較し、玆に於て此等全種類の全体を包括する概念を構成し、全般の事實に通する相關の理を發見し、依て以て推究的交渉を遂ぐ。此種の交渉は一切の科學成立の基礎にして、學者は常に各々得意とする方面の奇異に警醒せられ、先づ之を經驗し、觀察し、進んで其間に存する相互の理法を考究し、此等の理法を綜合し、統括し、以て一科の學を構成す。斯くて學者は此種の興味に刺戟せられ、誘導せられ、其專攻の學に熱注し、專心し、疲倉を忘れ、命を惜まず。現今の發達は其結果たる也、嘗に學者のみならず。所謂機敏なる實業家、英才なる處世家等も、亦じ來れば、悉く此種の交渉を時々刻々實際の局に當りつゝある間に、最も多く重れたる結果に外ならざるなり。

審美的及道德的交渉

四審美的交渉並に道德的交渉　外界が人間の心意に對する交渉は、嘗に上述の如き殺風景にして又沒趣味の實用的若くは科學的關係に留まらず、複雜にして多態なる外界現象が、多樣の變化ある内に於て、現象相互の間に全体と部分と部分等が夫々調和、均一、齊整を保ち、又能く全体の目的に適應するが如き等は、吾人の感官を刺戟し興奮し、以て吾人の貪欲を博せんとするものゝ如しと而して此の如く刺戟せられ、興奮せれらて、認識したる吾人は、性來の天眞爛漫たる性情に照し、善惡及美醜の標準によりて判斷し、以て之に感動す。是によりて吾人の心情は、純潔となり清淨となる。而して斯く感動せられたる吾人の心情は、時に眺し、歌に唱し、布帛に畫き、石片に刻み、將た道德的に歎賞し、之を愛玩し、之を尊敬し、以て美的及び道德的交渉をなす。吾人が人間界の善を讃美するは自然界に於ける天然の美、若しくは技術の美を歎賞すると同一の心の作用に屬せり。唯た道德的の美（即善）の場合に於ては、理想は美術に於けるが如く畫布若しくは石片によりて表はされず、行動云爲によりて表はさるゝを異る所とす。

以上各種の精神的交渉は、各々其方面を異にするによりて相互に區別せらるれども、一方より觀れば是等の總ては外界の事物を自己と對峙せしめて、單に經驗の材料となし、事物を自己と全く異れる客體となし、虛心冷靜之に接觸し、之を觀察し、之を推究し、之を判斷するの點に於て一致す。而して此一致點は嚮て他の一大方面の精神的交渉と區別せらるべきものなり。彼の經驗の一語はよく此種の交渉を言ひ表はすものゝ如し。吾人の

經驗と交際

精神は他の一方面に於て外界の事物を自己と等しく世界の一部と見做し、自己も等しく此等の事物と共に、世界の一部を爲して生存するものと觀じ、自己の生存に對しては親密の關係を有するものとして外界と交渉をなすを觀る。世間は此種の相關的交渉を交際と名けて經驗と對せしむ。此意味に於ける經驗は主として智的交渉を表はし、交際は重もに情的交渉を表はすに似たり。されば吾人は經驗によりて智識を擴め、交際により心情を涵養するなり。然らば即ち前記の同情的、公共的、宗教的の三種交渉は此の中に包括せらるゝものなるを見るべし。蓋し同情的交渉は自己の伴侶とせる各の個人に對し、公共的交渉は自己の恩惠者として自己の所屬の社會、國家に對し、宗教的交渉は自己の崇拜者としての神佛に對するものなれば、其對象に於ては異なりと雖とも交際といふ點に於て、即ち心情的交渉といふ點に於て一致すればなり。

五、同情的交渉　吾人が日常、父母、兄弟、朋友、及び他人と交はるに當り、此等諸人の顏色言動によりて喜はざるゝ、苦樂悲歡は直接に吾人の心情を動かし、吾人をして同感の心を惹起せしむる如きは此種の交渉の最も著しきものとす。斯の如き場合に於て發動せらるゝ心情は之れを仝情と名けらる。吾人若し少しく注意するときは此種の交渉は單り個々の人々に於てなさるゝのみならず、人類以外の禽獸に對しても、草木に對しても等しくなさるゝを觀るべし。或は吾人が平常接近する牛馬雞犬等の困難に頻するを見るとき、恰かも人間に於けると等しく憐憫の情を起すが如きは即ち此が例となすを得べし。尙ほ吾人注意を細觀するときは、此種の交渉が單り以上の有情物に對してのみに限られずして、往々金石器物等仝く無生の物に對しても爲さるゝを觀るべし。前例の久留の師者が郷土の山川原野に對しても恰かも茵蓐の友人に對するが如き愛情を注くが如きは此事實を說明するに足る。或は吾人の永く愛玩し親炙したる所のものに對しては終に一種の情的關係を生じ、恰かも有情の物に於けるが如く之を離し之を毀つに忍びず。或は有名なる歷史上の遺物若くは遺跡等の感紹を歡じ之を永く保存せんとするが如きは、之れ皆な無生の物に對し一種の交渉をなせるものなり。去れば同情的交渉は吾人の接觸せる個人若くは物体を吾人と一致せるものとして、若くは同類のものとして俱に苦樂を共にし、身を以て其物体の境遇に置き替ふる如くするにあり。

六、公共的交渉　吾人若し衆個人の集合体たる社會を認識するときは恰かも吾人と各個人との間に於けると同樣の交渉が其社會と吾人との間に於てなさ

宗教的交渉

同一個人に對する諸般の交渉

るゝを認むるを得べし。此交渉によりて吾人は其社會に融屬し、其恩惠に浴し、其社會が受くる運命を共に享受しつゝ生活するものなることを知り、從つて吾人の生活は吾自身のみにて爲し得るものにあらずして共に社會を形成する全体の員數が暗々の裏に至大の幇助をなしつゝあるを感ず。是に於て最初各個体にのみ發動せる同情は大に擴大せられて社會全体に向けらるゝに至る。所謂公共心なるものは其結果にして公益の精神、愛郷の念、愛國心、人道等の所謂公德の基礎を形成するものなり。

七、宗教的交渉　吾人は以上の經驗及交際に由りて自然界の事物及び其現象の多端複雜なるが間に、自ら全体に調和と均齊とを存し、總て正確なる法則の其間に存するを觀察し、又人類の歴史を探り其運命を究むるに於て、隠顯變化極まりなき狀態の間にありて、自ら整然たる秩序の存ずるあるを見、此等のことは到底人力の如何ともすべからざるを感得するに至りて、吾人は他の一切の萬物と共に或る高等なる勢力に羈絆せらるゝものなりとの感情を起し、此理合すべからざるもの、及び運命に對しては吾人の勢力は非常に微弱なりと感じ、不知不識、畏懼と敬虔とは胸中に溢れ集まるに至る。此等の交渉によりて吾人の宗教心は喚起せらるゝなり。

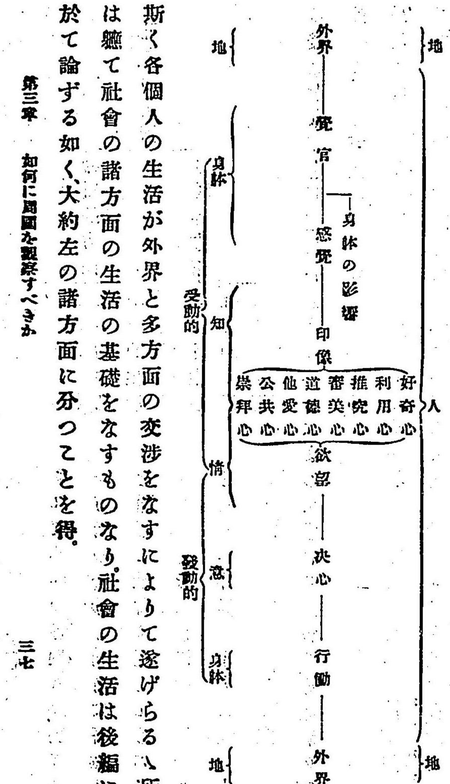
以上の觀察により外界は同一の部分に於ても同一の事物に於ても之に對する相手の異るに從つて諸般の交渉をなすものなるを知る。然るに實

際に於て多くの人々は同時に諸種の趣味を併有するを觀れば、此等各般の交渉たるや、曾に特殊の趣味を有する人々にのみ限らるゝものにはあらずして、或る程度までは同一の人に於ても幷び行はるゝものなるを信ずるを得べし。去れば一基の山、一流の川に對するも、多少發達したる人にありては單に外貌を眺め名稱を探る等の素人的通俗の交渉をなして、好奇心を滿足するに留まらず、尙ほ進んで或は其岩石、其樹木其水質其水力等に就ての利用的考察をなし、或は其高さ其長さ其形狀其起因、其影響等の考究をなし、或は詩歌繪畫の品題となし、或は之により幾多の修養の機會を得、或は之により廣大なる神佛の勢力を感發する等多樣の趣味を以て凡人の企て及ばざる多方面の交渉をなすを常とす。此事實は又各人の並行的諸般の交渉には自ら程度ありて其程度は各人の心力發達の程度に伴ふものなることを表はす。要するに人間と外界との交渉は一に人間の主觀的性質に歸するを得べし。人は斯の如く外界との諸般の交渉により て圓滿なる發達をなす者也。果して然らば外界殊に天然は眞に吾人の啓

發者たり指導者たり慰藉者たりと謂つべく、吾人の天然と藉般の交はりを絶ずることは此盛衰浮沈極りなき人生に處するに於て缺くべからざる要務にして人生の幸福は之が廣狹親疎の程度に比例するものと謂ふも大なる不可なかるべし。

尚ほ少しく外界の方面より之を觀んに、蓋し天然ほど寡量に且つ柔平なるはなし、彼は何人が何時如何なる方面より來つて交りを需むとも、全く其門戸を開放して拒むことなく、又彼の小膳者がなす如く決して貴賤貧富によりて待遇を異にせず、加之、天然は夫の人爲的卑俗の榮華に惑溺する富豪者に對するよりは、却つて失望落膽の境に沈淪せる貧賤者に多くの同情を寄せ、之に親近せんとしつゝあるものゝ如し。唯夫れ天然は夫の盥映者の如く、殊更に自ら知られんことを求むるものにあらず。故に若し來つて、至誠に熱心に交はりを求むるものなくば彼は何時までも其沈默を破らざるべし。されば吾人が天然と交はるの道は唯至誠と同情とを以て、怯ぢず臆せず、無邪虛に無邪氣に、肉迫して求むるにあり。果して然らば彼は嘗に好意を以て吾人を迎ふるのみならず、進み來つて握手し接吻し、寵愛し、奬勵し、終には露骨に彼の大神髓を吐出し、以て終生交情を絶たんとするも能はざるに至らしむべし。ニュトンが其大發見の爲めに食を忘れ、最愛の新婚妻さへも忘れたるが如き、チンダルが其大研究のために、アルプス山中の氷原に身の凍沈をも忘れたるが如き、乃至は大探險家、大美術家大宗教家等が、各々其の信ずる所に從つて身命を忘却するが如きを觀れば、此想像に疑を容るべからざるを知る也。

以上開陳したる所を概括し尚ほ少しく足らざる所を補へば、外界の大部分を占むる地と人生との關係は左の如く想像するを得べきか。



斯く各個人の生活が外界と多方面の交渉をなすによりて遂げらるゝ所は總て社會の諸方面の生活の基礎をなすものなり。社會の生活は後編に於て論ずる如く、大約左の諸方面に分つことを得。

社會と外界との多方面の交渉

社會の生活
- 物質的方面
  - 經濟的生活
  - 政事的生活
- 精神的方面
  - 學術的生活
  - 審美的生活
  - 道德的生活
  - 社交的生活
  - 宗教的生活

されば外界の各個人に對する多方面の交渉は同時に各個人を通じて社會に對してなさるるものと云ふを得べく從つて各個人が外界と多方に深厚なる交渉をなすによつて、圓滿なる發達をなすと同樣に、各個人の集合によつて成れる社會も、亦諸般の交渉によりて、開化の域に進むものなり。

吾人は右によりて、外界は何れの部分も、何れの事物も總ての人民に對して等しく諸般の交渉をなすべき者なることを承認すると共に、此場合に於ける並行的諸般の交渉は或る程度までに留まりて其程度以上の交渉は或る特段なる事物若くは部分のみに限らるゝものなるを記せざるべからず、即ち某地方若くは某事物は、特に美的風致に富み、又或る部分、或る現象は、特に實用的性質を有する等の爲めに、之に親炙する各地の人々に

特殊の影響を及ぼし、由つて以て或る地方には、美術心の發達を促がし、又他の地方には、特に宗教思想の進暢を來し、又或る地方には富强を生じ、或る地方に貧弱を來し、斯くて世界の全面に千態萬狀の人生現象を散布したるが如きは即ち是なり。吾人は此等の理由を說明するに當り、固より一部は之に交渉する各人の差異に歸すべきこと前陳の如しと雖ども、主として外界の特殊の部分若くは事物の形質的差異に歸せざるべからず、要するに此點より觀れば外界と人間との交渉は外界の客觀的性質に基くといふを得べし。此に至つて吾人は地と人類との交渉につき左の結論をなすを得、何となれば地及び地上の現象は外界現象の大部を占むるものなればなり。

一、何れの地も或る程度までは總ての人民に對して同樣に諸般の交渉をなすべきものなれども、其各方面の交渉の程度は、其地方の性質と、之に對する人民の性質とによりて異るもの也。尤も人民の性質といふも、其一は主として各人民の心性の發達の階級に基くものなれば、

二、同一種類の地は同一階級の人民に對して、同一方面の、同一程度の交渉をなし、以て夫れ等各地の人民をして同樣の生活をなさしむる者なり。

佛人デ、ヅモラン氏が其有名なる著書アングロサクソン、シューペリオルチに於て、社會主義の特發及び中心が特に獨逸にありといふ議論の前提として說述したる次の語は、相對的程度といふ意味に於て、疑もなく、總て、の場合に適用せらるべき眞理なりと信ず。曰く「諸般の植物に各個有の產地あるが如く、社會の現象も亦各其地理學上の地帶あり、社會の現象は、何れの國に於ても、其に等しく現出するものにあらず、又發達するものにあらず、特殊の地位特殊の境遇の爲めに左右せらるゝと、地理學の科學的根據は實に茲に存せざるべからず、吾人の着眼點亦此に至つて粗ぼ定まる也。

吾人の着眼點

鄕土要素取捨の標準

論じ來りて吾人は又た他の一難問に遭遇せり、鄕土に於ける無數の要素中に於ては論題の範圍外のもの尠からざる―を如何にして取捨撰擇するかの標準是れなり、茲に於てか勢ひ地理學の範圍及び定義に論及するは避くべからざる順序となる。吾人は狹隘なる眼界の及ぶ丈け本邦在來の所謂地理學を通覽し而して又之に對する一般社會の不滿と、夫を救はんが爲めに先輩の講じたる幾多の新要求と其趨勢とに鑑み、次の如く定義するの不當にあらざるを信ぜんとするに至れり。曰く「地理學とは地表に分布する自然現象と人類生活現象との關係を論ずるもの也」と、然れども之れ固より斯學に於ける最大至要の問題に屬すれば吾人が此狹隘なる觀察と此單簡なる表出とによりて輕々に確定せらるべきものにあらず。夫がためには先づ右の數語を解釋したる上にて果して在來の地理學の全般と、之に對する新要求とを網羅すべしや否やを具躰的に解決したる后に於てなされざるべからず。是に於てか吾人は說明の便宜上暫らく右の如き假定を以て通過し更に後章に於て攻究するの順序を採らんとす。

吾人の觀察部面

是に至りて吾人の鄕土に於ける觀察部面は自ら粗ぼ定まるを覩るべし。蓋し世界の各地に顯はるゝ複雜なる現象の大要は、粗ぼ之を鄕土に於て觀察するを得ることは既に前章に開陳したる所而して今又外界の各部

が人類に對しては諸般の交渉方面と諸種の程度とあることを知りたれば、鄉土の各要素につき、以上の普遍の考察をなし、斯くて其性質の確定せられたるものは、則ち世界の各地に通用せらるべき原則たるべきなり。

◎參考書目＝ヴント氏心理學概論（元良文學博士中島泰造兩氏譯）第八章乃至第十四章▲（ヘルマン、グルン氏普通教育學（澤柳文學士譯）第八章▲フエアバンクス氏社會學（十時文學士譯）第六章▲グモラン氏著優級師範學校教師大國民第三篇第二章其一

第一篇　人類の生活處としての地

今や鄉土要素の各個觀察をなさんとするに當つて四周を見渡せば無數の現象が一時に吾人の双眸に輻輳し各相競うて千姿萬狀の奇觀を湊らし吾人に交渉を迫り吾人をして殆んと應接に遑なからしむるものゝ如く觀え、是れが爲めに吾人は夫等の取捨撰擇に茫然自失せざる能はざる也。然れども幸に千百年の星霜を重れて先聖の確定したる數則の吾人を指導するものあれば吾人は之れに手據つて値かに先後の順序を定むるを得んか。曰く「近より遠に」。曰く「單より複に」。曰く「親より疎に」。曰く「全体より部分」。曰く「粗より細に」。曰く「原因より結果に若くは結果より原因に」。曰く「有形より無形に」。曰く「個体より總体に」。

第四章　日月及び星（地上現象の原因としての）

第一節　日光と人生

若し夫れ三千八百萬里といふ空間の距離よりすれば、最遠のものなりと雖も、太陽が吾人の生活に最も親近の關係を有することは、吾人が日常朝夕の挨拶の言詞によりても知るを得。況んや地上一切の事物の根本原因

日光の分量と人生

と見るべきものなるをや。吾人は最も遠しと觀ゆる太陽より觀察を初むるを以て當を得たりと信ず。太陽の人生に對して最親最要の關係を有するは、そが光線及溫熱の發源体たるにあり。此の二者は物理學上よりは、全一作用の異程度の現象とせられ、吾人に對する關係に於ても互に相隨伴すと雖も然れども其關係の異なる點あれば或る程度までは個別に論ずるを便宜とす。

光線が吾人日常の生活に實用せらるゝ程度の如何は、朝來の天氣が吾人一日の氣分の快鬱を決する重なる要件なるを以て之を知るを得べし。晉に露店の小商人、若くは戸外の勞働者のみに限らざる也。若し人類が每夜發光料の爲めに莫大なる資金を投じて惜む所なく、且つ之が改良に苦辛するの狀を顧みるに至つては、更に明瞭に意識に浮ぶと共に、日光其物に對して無限の感を呼び起さゞるを得じ。這般の感動は彼の失明の人によりて最も强く惹き起さる。天照皇大神が天の岩戸に御隱退ましましゝに當り八百萬の神が苦心慘憺ひたすら大神に哀訴歎願し奉れりと傳へらるゝが如きは更に適切に此事を說明するものゝ如し。不夜城とは人間の最も快樂なる處として想像する所。之に反して常闇の國とは人間の想像する最も恐ろしき者にあらずや。

光線の一定分量の吾人の生存に缺くべからざることは、夫の戸外の勞働者と室內蟄居者、若くは病者との容貌に於ても、最も卑近に顯はる。蓋し生物の酸化作用は其生命の大原因にして、光線は實に其作用に缺くべからざるものたり。此事は又た直接に於てよりも、生物の發育に影響するによりて、間接に人類に關係を有するとを思へば、更に肝要なるを見る。光線分量の人生に對する尙ほ一種の關係は、人類と一大生存競爭をなしつゝあるかの如き、多くの傳染病の根源をなすバクテリアに對して、人類に大なる幫助をなすにあり。實に此肉眼を以て視るべからざる微細の生物も其繁殖力の激甚なるによりて、人類及び高等生物に對する一大怖るべき强敵なるは、顯微鏡の發見と、醫學の發達とに基く近來の發見の一大事實なり。然るに此の强敵も多くは嘯々たる日光に晒らさるゝによりて容易に

光量の規則的變化と人生

滅亡を免れ能はざることは吾人の幸福たらずんばあらず。

若し夫れ旭暉の燦爛たる夕陽の煌煌たる等美的影響に於て從て又た修養上の影響に於ての浩大なるとは殊更に論を俟たざる所。斯の如く數へ來れば、光線の吾人に對する關係の至大なる知るべし。果して然らば日光分量の過不及が人類社會の發達に影響することの大なるも亦知るべき也。唯夫れ光線が特殊の地方に特殊の影響を及ぼすには、更に幾多の地的現象の加はるにあらざれば能はざる所なれば、茲には單に此基本的一般の觀察に留め、更に隨時後章に於て論ずる所あるべし。

日光の人生に關係ある第二の方面は其分量の變化の一定なるにあり。人類が晝夜の名稱を附して最も初代より時順計算の標準となして利用せる日、週、月、年等時順的名稱が悉く日光の規則的變化に基くを觀れば、其吾人に大なる關係あるは知るに餘あるべし。日光の規則的變化の利用の第二歩は、之を以て暑(ヒヨウイ)となすにあり。無疆に連續する時を、歳、月、週、日に刻んで人生の標準となすことが、既に社會の文化に至大の關係あるに、更に細刻して一日を小分することの文化に影響あるや亦た論を俟たず。文明の生活に欠くべからずとせらるゝ時辰儀の本源にして、且つ今猶ほ其標準たるは即ち此事を證するものにあらずや。若し又『光陰は矢の如し』と云ひ、『時は金なり』といふ確言の吾人の生活を刺激するを觀れば、此規則的變化の人心の修養上に關係ある知るべきなり。

光線の方向と人生

太陽光線の規律的變化に伴ふ日光來射の方向は、又た人生に特殊の關係を有するが如し。之は人類が地上に於ける一切の經營の基礎となす空間の方位を確定するとに於て觀るを得。太陽は毎日地平線中の一點より出て漸次に上つて最高の位置に達し、其れより又次第に下り、終に初めの出發點に略ぼ相對せる他の點に沒す。人類は此三點に朝・晝(正午)及び夕の名稱を附し、之に準じて三度の食事をなす。而して又た其の最高點に到達したる瞬間に地上に畫ける陰影の方向を北となす。此れ陰影の最短點なり。之を基點として他の三方位を確定し又た自餘の間位を定む。南北の兩點を連續する一線を子午線となす。

第二節　溫熱と人生

溫熱の分量と人生

太陽の溫熱は其分量其變動の序列及び其變動の速度の三點に於て人生に影響す。吾人及び吾人の生活の資料たる一切の生物が生存し繁殖するは、此三要件の適度を得るが故なり。されば溫度は人生に對して二重の効果を及ぼすと謂ふべし。熱の利用か益隆んなるに從つて此關係は愈確實に認めらるゝに至る。太陽の輻射線が之に出逢ふ物躰に熱のイヂルギーを與ふることは實に非常なるものにて其量は各平方メートルに對し約五百馬力に上ると、又ボヴィレット氏の計算によれば一年間に地球が太陽より受くる熱量は大約二十九メートルの厚サを以て地球の全表面に覆はるゝ氷層を悉く溶解せしむるに足るといふ。果して然らば吾人が日常何等の感覺もなく利用する總ての溫熱の本源は殆んと之を太陽に歸せざるべからざる也。

第三節　太陽と精神的人生

光線及び溫熱が直接に間接に、人生の各方面に關係あること右の如く、洵

生靈的本躰としての太陽

太陽と同說

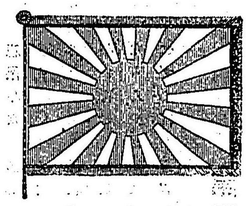
に地上百般の勢力を生ずる一大根本たり。されば此等の効德に對する感謝の情、及びそれに隨伴する敬虔の念が、夫等の本源たる太陽に向つて起さるべきは當然の事といふべし。是に於てか太陽は無限の勢力ある生靈的の本躰として崇拜せられ、斯ぐて吾人の太陽に對する對峙的關係は一變して相關的交際となる。是故に上古より太陽を造化の無限の勢力者、其物の實躰と觀じ崇敬的崇拜をなすこと何れの國民に於ても異ならざるが如し。而して當時の思想界に於て最も太陽と一種特別の關係ありと信ずる所を以て其國號及び國躰の標號とせしが如し。此點に就ては我邦は特別の一的例となすを得べし。然も近來は理學の發達と共に太陽に對する此生靈的不思議の觀念は漸次に消滅して、その代はりに發光躰たる一大火球となるに至れり。但し是れ太陽に對する科學的の一觀察たるに過きざれば自餘の觀察を以て誤認若くは偶像となして排斥すべからざるや論を俟たず。ラスキンの曰へりし如く科學は吾人に教ふるに雲は罩に濕りたる霧とのみなれど美術は是れを黃金の聖壇なりとすればなり。

志賀云　我邦の皇系を天日嗣と稱へ、神武天皇東征の際、東に向ひて大和に入らんとし給ふや、祖先たる日に向ふの故を以て、乃ち南紀州より迂回し給ひ、推古天皇は、隋に對して日出處ノ天皇致書ヲ日沒處天子ニと報書し給ひ、秀吉は其母、日輪懷に入ると夢み

第四節　日本人と太陽

國號を『日本』となし『日の丸』を國旗となし、國祖及び之と合一躰と信ずる皇祖を以て『天照皇大神』と崇め奉れる日本國民は太陽と一種獨特の交渉を表するものと謂ふべし。加之、日蓮が朝暾の陽光に照らされて一種微妙の感發をなしたりといひ、或は神道黑住教の教祖黑住宗忠が非常なる殘酷の悲歎に沈淪し殆んと死を覺悟したる最終の瞬間に於て永袂の太陽を拜して異狀の靈光に撲たれて開祖の大信念を喚發したりと傳へらるゝが如き、其他此の如き例を求むれば多々あらん。是等は太陽に對して祖先傳來の一種の信念を有するの結果なるかは計り難しと雖ども、要するに太陽との一種特別の交渉を表はすものなるや明けし。斯の如く日本人が一種特別の思想を以て太陽と交渉するに至れるは此國の位置が與つて關係多きに似たり。想ふに東方一帶に森漫渺茫たる太平洋を控へ、對岸の新大陸は僅に四百餘年前の發見にかゝり、而して舊大陸は我邦を地頭として、西へ西へと連續すれば、此地頭點を占めて、而かも金甌無缺の國躰を

生じたる國民が、其自國を號して『日本』となし『日の丸』を以て立國の理想を表はし、外國民も亦之を呼ぶに『絶東』を以てして、裏面より同意味を言ひ表はすは、固より當然の事といはざるべからず。日向といひ、伊勢といひ、我邦の靈地が旭光直射の東向地に卜せられしが如きも亦同一の理由にあらざるか。



然るに近來一派の思想家中には日本人の日に對する此思想――多少國自慢の傾向を表はす――を以て未開思想の遺物として之を欣はざるものあるが如し。吾人は之を以て自分獨り日の寵愛者の如く他國に誇るの大人氣なきを認めざるべからずと雖ども、此の觀念を以て悉く未開の陋習となすの謂れなきを認めざるべからず。單に之を對峙的外物として、科學の一方面より觀れば全く一塊の火球たるに過ぎずと雖ども、之れのみを以て他の諸方面よりの觀察を拒否するの謂れなきを以てなり。即ち太陽は地球及び地上萬殼の勢力の最根本的のものにして造化の大勢力を最もよく顯はすものなれば眞正の宗教的、若くは哲學的の絶大なる實躰に最も近きものとなさるべからず。果して然らば山川草木禽獸を以て神躰視する上古の思想中に於て其最根本躰に歸依するは

て生れたりと朝鮮王に告書し、終に旭日を以て國旗章となせる迄、日本の歷史は太陽と關係するもの尠からず。太陽は光線、熱、生氣、活力の本源にして、且つ威嚴、同仁、新鮮、清淨の分子を悉く包含するものなれば、古代より日本人の之を崇拜せしは偶然にあらず。

第一圖（帝國軍隊旗）

尤も過渡したる思想と謂はざるべからず。此の意味に於て吾人は我邦の太陽觀を以て世界に誇るの價値ありとなすの至當なるを信ぜずんばあらず。況んや日章旗の如きは現在に於て國民的理想を表するの最も完全なるものなるのみならず、將來に於ても恐らくは變らざるべきをや。之を夫の勇猛なる禽獸に其理想を寓するが如き、若くは黃龍の日輪を食せんとする非常なる架空の想像をなすが如きに比すれば其差果して幾何ぞや。カーライルの言に『蛇牛を拜するものは蛇牛に似、狐狸を拜するものは狐狸に類す。一國民の道德智識は其崇拜する理想的表示の外に出づるを得ず』と、大和民族が此世界無比の國体を發育せしめ依つて以て四隣の列國に其光彩を放つに至れるもの豈に偶然ならんや。思ふて之に至れは日本帝國の將來に於ける天職の愈壯且つ重を感せずんばあらざる也。

第五節　太陰並に星と人生

夜の支配者として將た燦爛たる美光の發源躰として、月及び諸星の人生に影響する所亦頗る多方面に渉る。就中月に至りては或は武將に對して『霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更』と謳はれ、或は『月明星稀烏鵲南飛』と詠せられ、或は貶謫者の慰藉となりて『清きこゝろは月ぞてらさむ』（菅公）と歌はしめ、或は失意者の伴侶となりて『月見れば千々に物こそ悲しけれ』と嘆かしめ、或は遊觀者の酒興を助け、或は漣に碎けて須磨浦の勝を添へ、又た其盈缺循環の規律的なるは榮枯盛衰極まりなきの人生觀の顯示となり、時順區劃の標準となり、其他物質的に精神的に吾人の生活に關係する所極めて多般なるものあり。去れば其出顯の狀態の異なるによつて特殊の地方に特殊の影響を及ぼすは免れざる所とす。然りと雖ども月及び諸星の地人相關の原因たり媒介たる著しき點は尠少なれば、茲には唯だ少しく觀察するを以て足れりとせん。月光の各地に於ける出現の狀態は其地方の氣界現象の如何によりて異り、月に對する各人感興の狀態は其地方の社會的事情の如何によつて異れば、是れ亦後章に於て隨時觀察することあるべし。而して月球が水面に影響して汐の起因となり、特殊の影響を特

第二圖
（チ）北極星、他は北斗七星。

殊の地方に及ぼすや頗る顕要なりと雖とも、亦海洋の部に於て記述するを便とせん。

諸星の中最も吾人の生活に顕著なる影響者を北極星とす。渠は其位置の不變なると之を中心として周回する北斗七星の奇異の配列をなすとにより、無數の星宿中より拔擢せられて、地位確定の標準となり、航海者の目標となり、又聖人の知遇を受けては『爲政以德譬如北辰居其所而衆星共之』といふて修養上の理想の代表者となれり。

第五章　地球

細爾たる僻隅の一小生活、數坪の茅屋は以て雨露を凌ぐに足り、數頃の田畠は以て饑を慰するに足るが如し。然ども一度其影響せらるゝ所を顧れば、終に地球の全躰に想到せざる能はざるは本書の劈頭に述べたる所、此思想を以て四方を觀望するときは、吾人の目睹する所は僅かに直徑數里の一圓平面に過きざるも、忽ち地球全躰の心頭に躍如たるを禁ずる能はざるべし。斯くて地球の吾人に對する關係を考察するに、自ら數方面に分解せらるゝを觀る。其形狀其大小、其運動及び其部分是なり。

第一節　地球の形狀と人生

地球の形狀

吾人が平野の四望によつて得る所の眼界の一面は、一見悉く平坦にして毫も彎曲の傾向なきが如し。されば人智未開の時代に當りては、大地を以て平板不動の者となし、日月星辰の日々其一端を上りて、他端に沒するものと信じ、今尚ほ往々其考を脫却せざるものあるは無理もなきことなり。然れども爭ふべからざる幾多の證據あるによりて、二千餘年の昔に於て既に既に地球の圓躰なるを主張して惑はざる先覺者ありき。或は哲學的の所見より『大地は最も完全なる形狀をなすべきものなるが故に圓球なるべし』(ピタゴラス)といひ、或は月蝕の時月面に投映する影によつて、大地の球形を證せしものあり、(アリストテレス)或は出入船の帆檣の漸隱漸顯の事實により、或は同一の現象が、登山の時に現はるゝにより、或は南進、北退の際に於ける星辰の出沒により、或は日月の出沒時刻の東西に遲速あるの事實により(以上トレミー)、各、諸種の方面より、大地の圓球を立證せり

と雖も、既に先入主となりし迷信は牢として拔くべからず、斯くてコロンブスが新大陸發見の當時に至るも、猶ほ渠が西班牙朝廷になしたる圓球說を嘲笑するの狀態なりしなり。されば眞正に社會が其迷信を拋棄せざるを得ざるに至りしは實にマガリアエンス氏の率ゐたる遠征隊が世界を一周せる(西曆一五二三年以後にあり。而じて今や此說は尙ほ一歩を進めリシュール氏を長とせる佛國學士會員の遠征隊が南米カイエンヌ(北緯四度四十九分)に於ける振子振動の實側によりて、地球は南北の兩極に偏平にして中央部に膨大せる圓躰なりと確定せられたり。

さて地球の圓躰が人生に如何なる影響を及ぼすかを觀るに、其最も重要なるものは地球の表面を南北に進退するに從つて相異れる受溫帶を生ずるにあり。蓋し地球の圓面は太陽より一樣に發する光線の來射の方向に差異を生ぜしむるに、日光の溫力は主として其來射の方向に由るを以てなり。即ち斜に來る光線は直射の光線に比すれば其通過すべき氣層の途遠さにより、空氣に吸收せらるゝ多きが上に、一層大なる地面に散布せらるればなり。但し受溫帶のことは地球の運動と關聯すれば、後節に於て說明するを便となし、茲には唯だ人類が圓球躰に於ける種々の觀測、及び位置を確定するの必要より縱橫線を假定して地球面を分類せるを注意すべし。

地球の直徑にして南北を貫く一線を地軸と名づけ、其兩端を北極及び南極と稱す。地球上南北兩極より同距離の點(各九十度)を連續して、東西に畫かれたる圓周線を赤道と名づけ、之によつて地球を南北なる同大の半球に分つ。又赤道と兩極との間に弧上に赤道に並行して、殆んど相等しき距離の圓線を劃し、此圓線を緯度圈と稱し、之にて赤道迄の距離を計りたるを其點の緯度と稱す。又赤道及び緯度線に直角に兩極を連結する大圓を畫き、之を經度圈と稱す。圓は三百六十度に等分せらるゝか故に、赤道及び經度圈も亦三百六十度に等分せられ、其一度は更に六十分に、其一分は更に六十秒に等分せらる。此區別は緯度圈に於ても亦仝じ

地軸　兩極
赤道
緯度圈
經度圈

第二節　地球の大サと人生

地球の大さは多年間の精細なる實測によりて左の如く確定せられたり。

赤道の周圍　四萬七千粁(一萬二百里餘)

赤道の直徑　一萬二千七百五十五粁（三千二百四十七里餘）
地球の面積　約五億一千萬方粁（凡三千三百萬方里）

面積と人口

此五億萬方粁（三千三百萬方里）の渾圓球表は無慮十五億萬の人類が無數の生物と共に棲息し活動し起伏し興亡する所の角逐舞臺にして我日本帝國は僅かに約其千三百分の一に割據するに過きず然らば即一方粁九

一人の配當面積

町四方の面積に平均三人づゝ生存する割合にて一人の配當せらるゝ所三分の一方粁の割合なり而して人類の生活舞臺の面積は一定不變（精密に云へば漸次縮少するも）なるに生物の繁殖には非常なる速度を有す『動

動物の蕃殖

物中の蕃殖すること最も遲緩なる者とせらるゝ象すらも其自然的增加の最小極限に於て七百四十年乃至七百五十年の後に至れば最初の一配偶より出てたるものが各其壽命の正格を保つに於ては其生存するものの殆んど千九萬匹に至るべし』と人類の增加は他の如何なる動物よりも遲

人類の繁殖

緩なりといふと雖も尙ほ二十五年を經れば二倍に達す而して此の度合を以て進めば千年を出てずして其子孫は非常なる大數とならざるべか

らずされば一切の生物は其增加する度合甚だ大にして若し之を殺滅するなくんば地球は一配偶の產出によりて直ちに蔽ひ盡さるゝに至るべしとは實に一般の規則にして殆んど例外を見ざる所なり』是に於てかマルサスの人口論の起るは自然の勢と云はざるべからず曰く『動物並に植

マルサスの人口論

物は自ら生殖して非常なる速度を以て蕃殖す然れども穀物成育に適するの地には制限ありて食糧を得る動物の數にも制限あり從つて人間が利用するを得る食物の供給は年々制限せられたる量を以て增加するのみ然るに人間並びに其他の動物は食物供給の增加するよりも速かなる速度を以て蕃殖す故に此蕃殖を阻礙すべき方法あるに非ずんば竟に災殃饑饉によつて最も恐るべき阻礙を受くるに至らん』と幸ひに事實は之に反し『人口の眞の增加は全く精密に生活を支持する手段の增加に從ふ』

人口の眞の增加

ものの如くしてマルサスの議論の一部は破壞せられたりと雖も而かも生物と共に人口の增加は或る程度迄は依然として底止する所なし生存競爭の行はるゝ止むを得ざる勢といはざるべからず殖民問題之が爲め

に起り、移住政策之が爲めに生じ、苟くも機の乘すべきあらば他國に侵略せんとする近來列强國の實狀は、洵に止むを得ざる勢といふべし、斯の如くにして探檢は企圖せられ、遠征隊は派遣せられ、今や三千二百萬方里の世界は偶みより偶まで殆んど足跡の至らざる所なく、悉く吾人の棲息區域ならざるなきに至れり。

吾人の棲息區域

次きに一萬里程の圓周、之れ又現今の人類は之を一周するに六十六日を以てするに至れり。

世界一周日數

紐育(北米合衆)よりサザンプトン(英國)まで　六日
サザンプトンよりブリンヂシ(伊太利)まで　三日半
ブリンヂシよりスエズを經て橫濱まで　四十二日
橫濱より桑港に至る　十日
桑港より紐育まで　四日半
合計　六十六日

志賀云　ジュール・ヴェルンの『八十日間世界一周旅行』が稀世の小說として世人に珍重せられしは、二十年前の事のみ、當時八十日間に世界一周の如きは、眞の小說として認められき、而も今日疾く既に六十日間を以て世界を一周し得るに至る、世運の劇進、誠に驚歎するに足れり。

之をマガリアエンスの遠征隊が三年有餘の歲月を以て初めて一周せし當時に比すれば豈に非常なる變遷にあらずや。曾に之に留らず、近き將來に於ては更に驚くべきものあり。露國遞信大臣ビルコッフナ氏の演說によれば將來世界を一周するには僅に三十三日に至るべし。即ち現今に比すれば正に半減なりと、其旅程は

ブレーメン(獨逸)より聖彼得堡に至る　一日半
聖彼得堡より沛羅斯德に至る　十日
沛羅斯德より桑港に至る　十日
桑港より紐育に至る　四日半
紐育よりブレーメンに至る　七日
合計　三十三日

右は西比利亞鐵道の速力を少くも一時間三十哩との概算に依り算出したるものにして東洋地方の運輸業益〻發達するに至れば尙ほ減じて三十日と爲すに至るを得べしと。

都をば霞とともに出でしかど
秋風ぞふく白河の關　能因法師

の古へに遜らざるも、江戸より陸奧に達するに猶ほ且つ二旬の日數を費

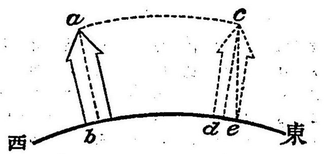
したりといふ、維新以前に比すれば世界の大を變じて日本の小になしたるに等しと云はざるべからず。而かも尚ほ更に驚くべきものあり。吾人は毎日四千五百里外に發したる倫敦電報を翌日新聞紙上に於て觀つゝあるにあらずや。要するに人類は地球の全躰を實質に於て減少するの力なきも、距離に於て非常なる縮少をなしたり。去れば天外比隣、一瞬千里、世界人類の中心點たる歐洲の中原を距るゝこと一萬千哩の絶東に孤立したる日本帝國も今や內國の或る部分よりも接近したるに等しといふことは吾人の忘るべからざる所なり。

第三節　地球の運動と人生

大地が平板狀をなすといふと同樣に、地球を以て宇宙の中心となし、凡ての天躰が規則正しく、二十四時間を以て、地球を一週するものなりとは、古人の固守せる思想なりしが、學術の進歩は終に其大なる誤謬を打破して、地球自身が其軸を廻つて二十四時間に西より東に一回轉するが上に、他の游星と共に太陽を中心として公轉するものなりとせらるゝに至れり。

コペルニクス (1473–1543 A.D.)
ケプレル (1571–1630)
自轉の證

第三圖



此說の初唱者をコペルニクスとなし、其後ケプレル出て、遂に游星の運動と其軌道の形狀とに關する法則の發見せらるゝに及んで、全く舊說に代つて爭ふべからざる眞理となれり。其自轉の證は左の數個條なりとす。

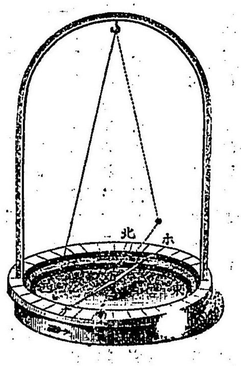
一、地球の赤道に於て膨大し兩極に於て壓平せるは自轉の一證とせらる。軟質の物體が、其自軸を廻りて、迅速に旋轉するときは、自ら右の形躰をなすことは、簡單なる物理學の實驗によりて既明し得る所なればなり。

二、高塔の頂上より物躰を墜下するとき地球若し不動なりせば、當然物躰は其直下の塔脚に落つべきに、實驗の結果は然らずして、稍〻東に偏するは、又其一證となすを得。是れ地球の自轉によらざれば說明し能はざる所なればなり。即ち高塔の頂點Aより墜落するときは、之か地上に達する迄には地表にてはBよりdに轉ずるに頂上に於てはAよりCに轉するわけなるが故に、物躰は頂上の速力を維持して來るを以て、稍〻東偏しd點に落ちずして。點に來るなり。(第三圖)

三、フーコー氏の實驗にかゝる振子振動の振動面の方向の變化は又確實なる一證なり。たび振動を附與せられたる振子は、惰性の法則により、他に事情な

第四圖
圖の如く振子を南北の方面に振動せしめ而して徐ろに羅盤を矢の方向に廻はすときは振動面の方向は變ずることなきが故に羅盤に對しては「ナホ」の方向となり尚ほ羅盤を動かして一回轉するときは振動面の羅盤に對する方向も夫れに應じて一周し又た最初の方向に復するを觀るべし、地球の北極に於ては正に此の如き理なり。

くば其原振動面の方向は決して變化することなかるべき筈なるに、北半球に於てなしたる數回の實驗によれば、最初南北の方向に動かしたる振動が、漸次に東北、西南の方向となり、東西の方向に移り、遂に一晝夜の後には一回轉をなすの傾向あるを確め、尚ほ此傾向は北極に近づくに從つて著大となるを確め得たるが是れ又た地球の自轉を措いては說明し能はざる所なり。第四圖の實驗は簡單に此理を說明するものなり。

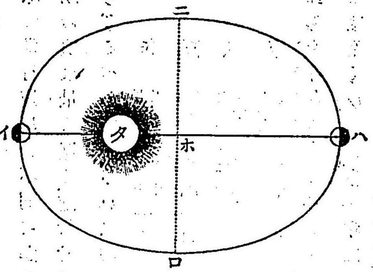


四貿易風と稱し、北半球南部の洋面に常に東北より西南の方向に吹いて變ずることなき定風あり。而して其上層には其と反對の方向を採る反對貿易風と稱せらるゝものあるは、又た其一證となす。此後者は右の第二證の理由を轉用するにより、從つて前者は、其を反對に考ふるによりて說明せらるべきものなり。

地球の自轉は、一晝夜を交代せしむるによりて人生に直接の影響を與ふ。人類及び生物は此の規則正しき天意に遵つて、晝覺し、睡眠し、勞働し、休息

第五圖
地球の軌道を表はす。

び以て其勢力を持續し生命を全ふす。而して此恒常なる天則に驚異して無軀の勢力の造化に親交するなり。



地球が太陽を中心として公轉すといふケプレル氏の法則は、他の游星の軌道と共に、地球の軌道は橢圓形をなし、太陽は其燒點の一を占むるものなりといふにあり。即ち第五圖の如き軌道を以て太陽の周圍を一周するとせば、太陽は其中心たるホにあらずして(タ)なる燒點の一に居るものなりと。地球は此軌道の上に一個年を以て、太陽を一週するものなり。斯の如く地球の軌道の橢圓なる結果は地球と太陽との間の距離の不同を來し、從つて地球の進行速度の不同となり、從つて又各季節に日數の不同を生ず。上圖の(イ)點(所謂近日點)にあるときは太陽との距離最小にして此時は一月一日

に當り(ハ)點所謂遠日點に居るときは、其距離最大にして、此時は七月二日に當れり。斯く其間の距離の不同なるがゆゑに、引力の強弱は、兩體の質量に關するのみならず、又其間の距離に關するとの物理學上の法則に從ひ、地球の進行速度に不同なかるべからず。即ち近日點の頃は、最も迅速に、遠日點の頃は最も遲く進行せざるべからず。隨て、各季節の長サは自ら不同ならざるべからず。されば現今北半球に於ては

春　自三月二十一日　至六月二十一日　九十二日二十二時
夏　自六月二十一日　至九月二十三日　九十三日十四時　計百八十六日十二時(夏半年)
秋　自九月二十三日　至十二月二十二日　八十九日十七時
冬　自十二月二十二日　至三月二十一日　八十九日一時　計百七十八日十八時(冬半年)

即ち夏半年は、冬半年より長きこと七日と十八時間なり。勿論南半球に於ては全く反對に冬半年は夏半年より長きものと知るべし。人類の最も多く棲息する北半球に於て兩半年の日數の右の差あるは、吾人の生活上注意すべき所とす。

夏の半年と冬の半年

地軸の傾斜

地球が自轉しつゝ公轉するに當り、其地軸が地球の軌道面に垂直の位置を保たずして、六十六度半の傾斜をなすことは、又た吾人の生活に著大の影響を與ふるものにて、四季を生すると及び季節によりて晝夜の長短を生ずることは、全く之に基づく也。

照界線

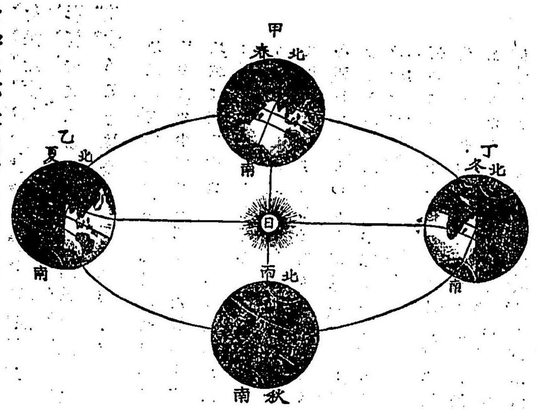
地球の圓体の結果は、太陽の光線を受くる半面と、受けざる他の半面とを生じ、地表に相半ばせる明暗の兩界を生ず。此兩面の境界に照界線の名あり。然るに地球は斷えず自轉するかゆゑに、此照界線も亦た之に伴うて位置を變せざるべからず。若しも地球をして公轉の軌道に對して、直立の地軸を以て自轉するものならしめば、其照界線は常に子午線圈と一致し、其光線は赤道を中心として兩極に達すべしと雖も、前陳の如く地球は斜立の地軸を以て、一平面の軌道を運行するものなるが故に、季節によつては、或は其明照界は北半球を多く含むことあり、或は南半球を多く含む所以なり。

四季及び晝夜

層の三月二十一日には地球は第六圖の「甲」の如き位置に在るが故に、中央線は常に赤道に、照界線は正しく兩極に達して、子午線と一致し、晝夜の長サは地球上到る處同一なりとす。春分の名ある所以なり。九月廿三日「丙」の位置に到る時も、凡て亦然同じければ、秋分といふ。六月二十一日に地球が「乙」の位置に移れば、

第六圖　四季の循環を示す

北回歸圏
北極圏
南回歸圏
南極圏
受温帯



中央線は北緯二十三度半の處を射照界線は遙に北極を超えて二十三度半の處に達するが故に、北緯六十六度半以北は終日日光を受くるに至り北半球に長晝を生じ南半球は之に反對するが故に長夜を生ず。北回歸圏及び北極圏の稱之によつて生ず。十二月二十一日には地球が其軌道の「丁」なる位置に移りて、南半球は恰かも北半球の六月二十一日に於けると全樣の狀態を呈し、從つて北半球にては照界線は北緯六十六度半以北に達せず、故に北半球は長夜にして南半球は長晝となる。南回歸圏及び南極圏は之によりて名づけらる。

受光帯の變更は直接に温度の變更を伴ふが故に右の區別線は直ちに之を受温帯の區別に用ふるを得。地球

熱帯
寒帯
温帯

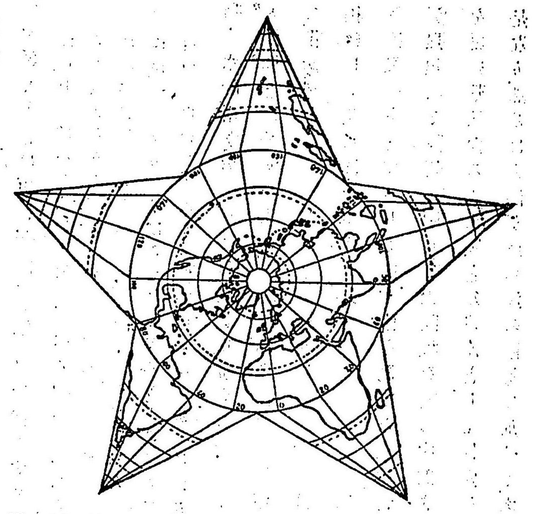
面は之によりて三大帯に區別せらる。南北兩回歸線の間にある四十七度に亘る部分は、日光の直射を受くること、年に二回あり、且つ太陽頭上を距ること遠からざれば、受温の量最も多く、從つて四季の區別もなく、僅かに乾濕二期の區別をなすを得るに過ぎざれば、之は熱帯とせらる。寒帯は兩極を中心として各二十三度半以内の地にして、數月間、全く日光を見ざる部分なり。南北の二帯に區別せらる。温帯は熱帯と寒帯との中間に位する部分をいふ。又た南北の二帯あり、各帯の幅四十三度に及べり。熱帯の如く日光の直射を受くることなきも、寒帯の如く數日乃至數月、日光を見ざることなく、受温の量により、春夏秋冬の四期に區別するを得べくして、人類の生活に適する所なれば最も進化したる人類の占領する區域たり。

第四節　地球の部分と人生

地球は其表面に於ける種々なる部分によつて、特殊の影響を人類に及ぼす。今や夫等各種の觀察に進むに當り、先づ地表を組織する水、陸の二大界に注意するを以て順序とす。陸界と水界とは各、其固有の性質によりて、人

類の生活に特殊の影響を與ふ固形體たる陸は人をして其住所を固定せしめ、其財産を不動ならしめ、以て人類の生活に鞏固不變の基盤を與へ、從つて各地の文化をして特殊の發達をなさしむ、之に反して流動體たる水界は自然的に人間の交通機關たり、されば吾人少しく陸上に於て其居を移さんか、忽ち彼れの固定性に衝突するがゆゑに、多少の勞力を費さざるべからず、然るに一度扁舟に棹して水面に浮ばんか、其固有の性質は遠慮なく吾人を轉移せしめて止まざれば、若し少しく力を用ゐて之を利用せんか、僅の勞力を以て、殆んど適意の方向に進せられざることなし、要之陸は頑强にして禦し難く、水は柔順にして與し易く、陸が人類の定着者たれば、水は人類の移動者たり、彼れが人間の分立者たれば、之は人間の合一者たり、彼れが人類の割據者なれば、之れは人間の結合者なり、斯くて兩々相對立して各、反對の固有性を以て反對の作用を人生に及ぼすと共に、兩界相互も亦た地球表面至る所に於て其勢力を角逐しつゝあるものゝ如し、實に此二大勢力の互に相接近し、相角逐し、一起し、一伏する所、是れ人類の

第七圖
陸塊の射出を示す



棲息し、繁殖する所にして、又文化の發起點たるなり、河海の沿岸は即ち兩勢力の接觸點たり、殖産興業が海岸及び河溪に沿ふと云ふも、畢竟此事實を表出したるものに外ならず、斯かる方面より地球全體を大觀するときは、此世界は又た實に此二大勢力の相桔抗し、制壓する角逐場たるが如し、地角半島となりて長く水界に突出するものは、陸界の侵略的方面を表はし、港灣、内海等の深く陸地に突入するは、自ら

水陸兩界の配置

水陸三大塊

水界の侵略的方面を現はすと見做すを得む。此の如き考察を以て世界全圖を繙くときは更に彰かに此事實を感得するを得べし。

陸は北半球を其根據となし、北極を中心として三方に向つて放射し、各楔形をなし、其尖端を以て深く水界に侵入するの狀あり。水は正に之れに對して南半球を其根據となし、南極を其中心として、又三大洋塊をなして陸半球たる北極に向つて三方より浸入するの勢あり。其北するに從つて益〻狹少となるは正に南極に向つて尖出する陸勢の向ふを張るに似たり。

斯く水陸兩勢力の互に對立し攻爭するの結果は兩者共に三大陸塊と三大洋塊とに分割せらる。一方に印度洋の亞細亞大陸によりて横逆せられて、稍〻弱勢を表はすが如きあれば、他の二大洋は北極圏内に進入して再び相會して北氷洋を形成し、以て一大陸塊を分離せしめたるの觀あるが如きは又一奇とすべし。柔能く強を制すと。更に奇とすべきは柔軟なる水力が强頑なる陸岩を壓し、各大陸塊を其の中間より兩斷して、遂に三大陸塊を更に整然たる六大陸と爲さんとして僅かに其一を餘すのみなることは是なり。然るに人間が此角逐の兩勢に加はり、大になすあらんとするの狀

水の半球と陸の半球

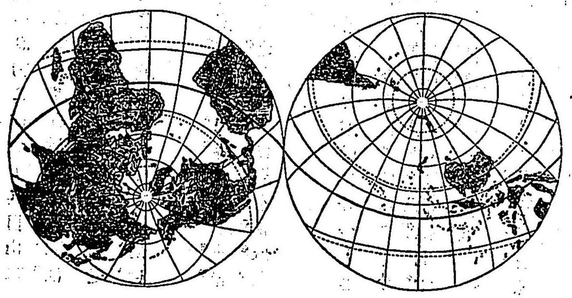
も亦更に奇とすべし。蓋し柔弱なる水界が人間の意力に從つて其自由に使役せらるゝは、決して彼の强剛なる陸界の比にあらざるが故に、人類は其自己の意志に服從し、易き水勢に援助を與へて、細濠二陸が既に分離せられたるが如くに、歐弗を分割し、殘す所の兩米をも遠からずして分割せんとす。

人類が兩界に對する此對度を觀れば、五千三百萬方哩の陸界に對し一億四千四百萬方哩の水界を以てし、即ち三と一との比を以て世界を構成したる造化の妙意又看過すべからざるに似たり。

ロンドンとニュージーランドとを兩極となして、地球を二大半球に分つときは、確然たる陸水の兩界を得。而して陸地は南半球に少くして、僅かに七分の一に過ぎざるに反し、北半球に甚だ多く、殊に北緯四十五度と北緯七十二度との間に最も多きが如きは、又人類の生活上注意すべき事實なり。

此三大陸塊は亞弗利加四岸の一島を經過する子午線によりて分つときは東四の二大半球となる。之を細分して六大洲となす。

		面積	其比例	位置
六大洲の面積	亞細亞	二百九十萬方里	一〇〇、〇四五	北溫帶
	亞弗利加	百九十萬方里	六六、六三〇	熱帶
	北亞米利加	百五十萬方里	五〇、九二五	北溫帶
	南亞米利加	百三十萬方里	四三、八二〇	熱溫兩帶
	歐羅巴	六十萬方里	二一、八一〇	北溫帶
	濠斯太剌利亞	六十萬方里	一九、八一〇	熱溫兩帶



第八圖　陸の半球と水の半球とを示す

地表の乾面たる陸地は、個人生活の基盤たると共に、人類の結合して形成せる國家社會の基礎たりざれば個人にして生活の基礎として陸面の一部を占有せざらんか、是れ實に浮浪人の域を脱する能はざるが如く、民族にして猶太人の如く一定の土地を有せざらんか、浮浪の民族として至る所に逆待せられ、放逐せらるゝ非運を忍ばざるべからず。是故に小

作人が地主たるを希ひ、地主が大地主たらんと欲するが如く、小國民は、以て大國民たらんとし、大國民は更に大々國民たらんとす。如斯にして小は些爾たる一細民より、大は堂々たる開明の一國に至るまで、現在に於て其慾望の重なるものを、詮し詰れば陸面の占領に外ならざるが如し。陸國の境界線が常に各國騷亂の基となるは止むを得ざる所なり。

第五節　水界及び陸界

水陸兩界と人生との關係は以上の概觀に留らず、少しく細觀すれば、種々の形狀により、特殊の關係を人間に及ぼすものあるに驚かざるを得ず。郊外に立ちて地表を一瞥せんか、忽ち無數の容貌をなして、變幻に入るを感すべし。平坦なるあり伏するあり凸出するあり、凹入するあり、崎嶇たるあり、羊腸たるあり、千態萬狀殆んど名狀に遑あらず。然ども、人智の靈妙は特殊の言語を以て之を數種に簡約せり。地面上より著しく屹立する所を山岳と云ひ、平坦なる部分を之を平原となし、平原中に於ても、海面よりの高度により高原と低原とを區別し、山の倒立とも見るべき、近傍の地面よ

り著しく低卑せる所を谷と名づけ、以て無數の地貌を其中に包括せしむ。少しく轉じて水陸の接觸點と通じたる一線に着眼せんか、又種々の形狀を成せるを觀るべし。其水によりて三方を圍まれ、一方に於て陸地と連續せるもの之を半島と稱し、海中に突出せる極點の部分を岬と云ひ、兩面水に肉迫せられ斷截せられんとして、僅かに之に抗し、以て陸の二大部分を連絡する狹少なる部分を地峽と云ふなり。更に大觀して陸地の幅員によりてせんか、大陸と島嶼との二部に區別すべきものあり。島嶼とは四面海洋を以て圍繞せられ、大陸に比すれば小なる陸地の名稱なりと云はゞ一見頗る瞭然たるが如しと雖ども、而かも少しく思慮を深くせんか、盡だ確然たらざるあり。蓋し地球を全體より見れば、大陸も亦海洋に圍繞せられ、面積の廣狹と云ふも比較的の言辭なれば、如何程までを以て島となし、大陸とすべきかの問題に對して、漠然たるを免れざればなり。是に於てか人間の悟性は、之を以て滿足せず、地理學者は更に別方面より之が區別を企てたり。即ちワグネル氏は「海洋の影響氣候其他が、其地の內部に及ぼすも

のを島と云ふ。故に濠洲の如きは島にあらず」と曰ひ、又ラッツェル氏は「數多の人類の文明開發に要する物件は悉く已に足りて外に待つことなきの陸地を以て大陸と稱す」と云へり。要するに其區別左の如し

一 水陸の關係に基く海洋の影響によりて、大陸（六大洲）・島

二 水陸の關係により成れる形狀によりて、半島・地峽・海岸・岬・海岸

三 地貌に據り、次に高度によりて、平原・高原・低原・山地・山嶽・谿谷

「地球を主宰するものは水なり、而して乾陸は之に與からず」と、地學者ミセレー氏の表出にかゝる原則は、前節の觀察によれば、或る意味に於て疑ふべからざる眞理なり。水界が其固有の性質に基き、人生に至大の關係を有

すると此の如し。然り而して此事は一樣平坦なる水面にありては、何れの部分に於ても平等均一なるが如しと雖も、實は然らず、恰かも陸界に於けると等しく、或は其位置により、或は其形狀に由りて親疎輕重の別あるを見る。是れに基く必要上よりして、何處の人類も此の渺茫たる水面の各局部に特別の名稱を附し、以て相互間の區別をなせり。先づ島の水面に圍まれたるが如く、陸地によりて取り圍まれたる者と、相連續して陸塊を取り圍める狀あるものを大別して陸水・海水の二種となし、更に陸水の流動せるものを河といひ、靜止せるものを湖といひ、海水の最も廣濶なるものを大洋と稱し、之を更に前陳の三大洋に分ち、此等の各大洋が其周緣に於て分岐し、陸地の屈曲せる所に彎入して陸に大部分を圍繞せらるゝ者に海・內海・灣・港等の稱を附し、兩海を連續する狹き部分を海峽或は海頸と名づけ、又た海水の陸地に近づく所に沿岸海・邊等の稱あり。

さて此の如く說き去れば一見瞭然たるが如きも、少く潛思するときは其分類は頗る錯雜にして各種の分界の甚だ曖昧なるものあるを見るべし。

是に於てか學者は水面全躰の動靜を標準として二大部類に別ち、海水をば波濤海流等の動搖あるも、其動搖たるや一局部に留まればとて、湖と共に不動の水に屬せしめ、以て流動の河と區別したり。依りて以て一部の區別は確定し得たるも、尙ほ多くの部分に於て錯亂せるものあり、されば又た海洋に左の區分をなせるものあり。

一、大洋　獨立の海面にして固有なる海流系統を有するもの、
　(一)大西洋　(二)印度洋　(三)太平洋
二、副洋　獨立の海流を有せず、大洋なければ其區域を保有する能はざるもの、
　(1)中洋　大陸の間に介在し、又は大陸內に入り込むもの、
　(甲)間洋　大陸の間に介在するもの、
　一、地中海　(歐羅巴、亞細亞、亞弗利加間)　三、東印度の中洋(濠洲及亞細亞間)
　二、亞米利加中洋(南北亞米利加間)　四、北氷洋　(亞細亞、亞米利加、歐羅巴間)
　(乙)內洋　大陸の內に入り込めるもの
　一、バルチック海　二、紅海　三、ペルシア灣　四、ホドソン灣
　(2)緣洋　大陸に沿うて區域をなすもの、
　(甲)大西洋類　一、北海　二、英國の緣洋　三、セント、ローレンス

(乙)四大平洋類　一、支那東海　二、日本海　三、チコツク海　四、ベーリング海
(丙)孤立して群類をなさゞるもの、一、カリフオルニア灣、二、タスマニア緣洋
三、アンダマン緣洋

吾人は之に因りて稍〻判明せる分類を得たりと雖も之を一般社會の襲用名稱に照し、且つ本書の目的よりすれば、なほ實際に近き分類を要求せざる能はず。按ふに左の三標準に據りて分類することは是れが爲めには至當とすべきが如し。

第一　水面の動靜に基く區別

一動水　水面全躰の斷えず一定の方向に著しく流動する部分＝河

二不動水　局部に於て移動あるも全躰に靜止せる部分＝海及び湖

第二　水陸關係の形狀に基づく區別

一陸水　陸中に孤立し若くは殆んど孤立せる部分＝湖及び河

二海水　大陸塊を包擁せる部分＝海洋

海洋は獨立の海流系統を有するとによりて三大洋に別かれ、各大洋中の局部には又た左の區分あり。

(1)大陸若くは島嶼によりて大部分を圍繞せられ、二方以上他の海面と連絡あるもの＝海若くは內海（日本海、支那東海、瀨戸內海、紅海、地中海、バルチック海、北氷洋等）

(2)陸內に深く入り込み一方のみ海洋に連絡せる部分＝灣

灣の規模小にして船舶の碇泊に適する所を特に港と云ふ。但し港の稱は單に海面のみにあらず。河及び湖にも用ひらる。

內海或は海と灣とは實際に於ては混雜して使用せらる、然れども世界の地圖を熟視するときは、大概は右の區別と一致せるが如し。例へばバルチック海の如きアドリヤチック海の若きは、之を一方のベンガル灣或はビスケー灣等に比すれば形ちの上より當然灣と云ふを適當とすべきが如きも、何れも其奥は更に小灣に別れ、從つて二方以上他の海面に連絡せり。尤もガーマン灣とアデン灣のみは例外なり。

(3)陸によりて大部分を圍繞せられざるも、附近の陸との關係上より一般海洋と多少の區別せらるゝ者あるときは緣海と名づく、本邦に於ける瀨の稱は此部類に屬するものゝ如し。

(4)兩海面を連絡する細く狹き部分＝海峽若くは海頸

洋（瀨）（深渤）、海上無二可レ寄津渡一也。深渤、海上深渤也、凡海上深遠之處曰レ渤、俗呼二沖字一、又淺近之處曰二伊倉一、俗用二磯字一（三才圖繪）

第三　陸上より海洋の距離に基づく區別

陸上より見たる距離の遠近によりて、遠洋と近海との別あり。

近海中の最も陸地に接近せる部分には別に沿岸の稱あり、又た近海中の一區劃、砲丸の陸に達し得べき距離以内を國際上より領海と名づく。沿岸の稱は河湖にも適用せらる。

參考要書――小藤理學博士「地理學講義」第二章（地學雜誌第十五卷）槇山理學博士「地文學教科書」第三章▲山上芦二郎氏「大地文學」第一篇第一章及び第三篇第一章▲「世界將來の通路」地學雜誌第百廿五卷▲志賀重昂氏「地理學講義」

海中在ル山可レ依ト曰レ島、海中洲曰レ嶼、又似レ嶼而小有二草木一曰レ苫、又如レ苫ト嶼一而其質純石曰レ礁（三才）

第六章　島嶼

所謂「島人根性」なる一語は、著かに島嶼と人生の關係を表はすもの、吾等島國人には、此等の語によつて、幾多の島嶼的影響の聯想を禁ずる能はざるなり。

第一節　島國の特質

島嶼が人生に及ぼす特殊の關係の最も根本的の原因は、そが特殊の氣候を現出するにあり。地表上に碁布散在せる無數の島嶼中には大陸より遠きものあり近きものありと雖も、均く海上に孤立し海水によりて圍繞せらるゝが故に、氣候上より言へば海洋の影響が其の内部にまで及び、從つて島嶼は吾人が日常經驗するが如く、之を大陸に於ける同じ面積の部分に比較すれば、變化多き、而かも極端なる激變なき、即ち小變多種寒暑中和の氣候を現はすものなるに、一般に其の内部の地勢も頗る錯雜し居れば、夫れに伴ふ生物の種類も大陸の同面積に比して遙に多種複雜なり。是れ實に島嶼の特別なる天惠と云ふべきものにして、島國は則ち此天惠に浴して特殊の發達をなすなり。今其最も著しき特色を數へんか、按ふに島國を形成するに足る程の世界の大島は、概して其附近の大陸に比すれば、住民の生存に適し、且つ其生活に便宜なるが如し。是亦、吾人の生活に顧み、之を近隣の大陸國民の生活狀態に比較するによりて容易に首肯し得べき所、蓋し氣候の和順にして過大ならざる多樣の變化は、直接に住民身躰の健康に適するのみならず、生物の多樣なるは間接に住民の生活に多くの便宜を與へ、彼等をして其生活資料を廣く海外に需めざるも、能く安穩に快樂なる生活を遂げしめ、以て特殊の發達をなさしむべければなり。本邦

志賀云、島は孤懸海中に孤懸するを以て、島民は外部の刺戟に逢ひて、相互に自ら衛り、自ら禦せざるべからず、是れ外難の致す所一島人の團結する所以。

志賀云、島の主長は、大陸の變遷に何等の關係なく、外部より侵害せらるゝことも少く、從て土地を奪はるゝこともなく、

幷に英國の人口の稠密及び其の今日に於ける發達は、此事實によりて說明せらるべきものなり。此事實は又た吾人をして島が住民心情の暢發に適するとを推考せしむ。是れ前陳の事實と共に吾人の輕視すべからざる所蓋し人類の物質的生活に適する所は自ら心神の暢發に適する所、加之、島嶼の氣候の多樣、風物の多趣は、自ら島民を刺戟して多少圓滿なる發達を遂げしむるものなればなり。英人が最も後れて大陸の文化を受けたるに拘はらず、其の源を超出して、世界に光輝を發揚する所以のものは此事實によりて說出せらるべきものならん。而して同一の理由は夫の頑迷なる大陸國民と伍し、其威化を受けて發育して、猶ほ且つ大陸國民の容易に享受し得べからざる最近泰西の文明を受容し、之を溶鑄しつゝある日東帝國の近時を說明し得べき所ならん。然らざれば、世に斯の如き不可思議の現象あらざるべし。恐らくは此現象は久しく內外人をして奇異の感をなさしめ、今尙ほ幾多の疑團を氷解する能はざらしむる所以のものにはあらざるか。何となれば數千年間互ひに相伍し、相通じ、以て我邦に文化を傳達したる諸國の歷史を、如何程繰返すも、現在に發達したる我邦の文化の組ての要素と、其理由とを發見し說明し能はざるべければなり。

志賀云、島は孤懸海中に孤懸するを以て、一般社會より隔離し、斷絕大陸より離れ、自ら衛る島人は自ら立ち、自ら發る念を大に生ず、是れ島國人の愛國心

島民は堅固なる愛國心將た愛鄕心に富み、一朝外患の迫るに當つては、一致團結其身を君國に捧ぐるの概あり。是れ實に吾人島國民が其の獨特の氣象として大陸國民に誇る所にして、大陸民の頗る畏敬する所、帝國二千五百餘年の歷史に於ける外交上の事蹟は、悉く此の高尙なる忠君愛國心の發揮にあらざるはなし。蓋し島の卓然大陸の騷亂以外に超立する所、隨つて、島內の融和統一に便宜なる所、隨つて又た島民各自が協力以て外敵を掃攘するにあらざるよりは、他に逃避若くは依賴の手段なき孤立無援の窮境に陷る所等は、自ら此の特質を生ずるものならん。

以上は島國に特有の長所なるが、此の長所はやがて島國人に免かるべからざる短所となれり。所謂「島國根性」なるもの是れなり。何をか云ふ、度量の狹隘なるにあり、自負心に富むにあり、小成に安んずるにあり、偏僻的將た孤動的なるにあり、反面より云へば寬容ならざるなり、雅量ならざるなり、

盛なる所以、自負心盛なる所以。

志賀云 所謂「島國根性」とは、英人も亦自ら Insularism といふ、英人の何となく大陸人を好まず、特に露西亞人を嫉視するものは、所謂 Insularism の結果なりとて、同國の識者も亦是れを誡めり。

志賀云 島は洋海中に孤懸し、一般社會より隔離し、斷絶する大陸より上に、其面積も狹小

されば時に應じて表はるゝ愛國心と雖も全く外部の强壓に反動して起るものにして、退嬰的のものなり。故に外敵の壓力去れば、依然として孤動的性質を表はし、却て團結心に乏しく、徒らに蝸牛角上の小爭をなして、遠大の目的のために寛容に堅忍に相結合すること少し。是等の事實は、吾人島國民の事業と行動とを少しく反省するに於て容易に發見するを得べき所にして、又た對馬壱岐、佐渡、北海道等の邊島人士を觀察するによりて、更に著しく注意せらるべき所なり。

島が從來兎角大陸の開化に後れし事も亦た其短所の一に數ふべきもの、蓋し未開人民に對しては海洋は一の交通遮斷物なり。島は即ち遮斷物を以て大陸と隔離するが故に、一方に大陸擾亂以外に卓立するを得るの益ありと共に、又大陸の文明に後るゝは自然の勢なり。大陸文明に後るゝ事は、島民の思想界の狹隘と其低度とを意味す。以上列擧したる島人の幾多の短所は、直接に將た間接に見聞の狹隘に基するなり。然れども島が身心の暢發に適することは、既に述べたる如くなれば、初めに於ては頑迷にして、

に、且つ山河、動物、植物の規模も小なり、島國の限界は、斯くて狹小となり、胸裏も狹小となり、見識低平、局量狹隘となるも、自ら其故あり。

容易に外界の刺戟のために醒起せられずとは謂へ、一たび其困難の域を越えて警醒せらるゝに於ては、却つて著大の進歩をなすことは、英國及び日本の實例に徵して明かなり。されば從來の島を觀察するによりて得たる以上の特色、殊に其の短所は是を永久のものとなすべからず。畢竟洋海中に孤立して、國際間の關係を避くるの位置にありしが爲に、自ら思想界の範圍の狹隘となれるより來れる者なれば、其の大部分は思想界の擴張と共に、一掃せらるべきものに屬す。島國は幸ひに文明國民の唯一の交通機關となす所の洋海に四圍せらる。故に進んで此の交通機關を利用し、得る程度に達したる後には、自ら其思想の範圍は擴張せられ、退嬰的愛國心は、茲に進取的愛國心と化し、以て世界に雄飛するに足ることは、又た英國の實例に徵して明かなる所。英國が他の先進列强國を凌駕して、世界に其の版圖を擴張するに至りたる所以のものは、實に島の賜に外ならざるなり。

第二節　島の種類と人生

成立に基く區別

陸島

洋島

這洋、近海に星羅する無數の島嶼が人生に影響する所を考察するに、以上の概觀の外、尙ほ少しく各種に類して觀察するを要するものあり。

島嶼は其の成立の原因によりて數種に分類せられたり。陸島及び洋島は其二大部類にして、其各部類は更に數種に小別せらる。

陸島は元と大陸の一部を成せしものが、海水の浸蝕を被むるか、若くは土地の昇降、陷沒するかによりて、終に分離せるものなり。日本并に東アジア諸島の大部分及び英國諸島は其的例にして、共に所屬の大陸より分離して成りたるものなり。されば陸島は大陸とは淺海を以て隔離し、外洋には大なる傾斜を以て深水に包むを見る。洋島は大陸と成立上に何等の關係も有せず、絶海中に孤立するものにして、火山の洋底より噴出したるによりて成るものあり(一)茲大陸の殘遺物たるものあり(二)或は珊瑚の遺骸より成れるものあり(三)大和民族の將來の好舞臺たるべき南洋諸島には、多くの例を見る。ボルネオ、セレベス、ニューギニアの諸島は、其の外見陸島の如しと雖も、山脈の構造、沿海の形狀等より見れば、其實大陸の殘址なるべしとて學者は洋島中に入れたり。此頃北米合衆國と我邦との間の國際問題となりしを以て著しかりし南鳥島は即ち珊瑚島の好例にして、此種の島嶼は海面を拔くこと僅少、其形狀亦他の種と一種特別なり。太平洋の中央部には特に多く、其數六百七十餘に至るといふ。火山迸發によりて生したる島嶼は伊豆七島、小笠原群島、千島列島等は其好例にて。多少弓狀をなせる一線上に羅列するを普通となす。

第九圖　南鳥島(珊瑚島)

第六章　島嶼

さて其の成因の異るに依りて區別せられたる以上の各種が人生に如何なる特殊の關係を及ぼすかを觀るに、陸島は往古大陸と連續したる時代の生物の分離後に於て大陸に於けるものが彼等の生存競爭に依つて既に滅絶に歸したるを、此處に其儘保存し、或は夫れ等の生物が分離後に於て大陸の者とは特立の變化をなし、以て分離の年代を想像せしむる等の事情あるによりて生物學者、地質學者等に大なる趣味を以て迎へられ、又た珊瑚島の一種の環狀周陸を形成せるものは茫渺たる洋中を漂蕩する難船の救濟處となる等にあるが

位置に基く區別

如し、其他に尙ほ幾多の關係あるやも知れずと雖も、要するに其關係たるや、偶然の小事實に留れば、地人の關係を論ずる本書の目的に對しては、寧ろ他の標準によりて分類するを必要とす。

人生との關係に基く島嶼の種類は、大陸に對する距離の遠近によりて爲されたるものを以て最も適切となす。吾人は此の點よりして島嶼を近海島と遠洋島との二種に大別せんとす。區別の要點は各種の島嶼に對する大陸の影響の有無若くは多少にありて、ダーウィン氏が其の有名なる『生物進化論』に於て該博なる研究に基き『凡そ大陸を離るゝ三百哩以上に在る島嶼には地上を歩行する哺乳動物を生ずることなし。夫のフォークランド島に猿に似たる狐類のあるは、二百八十哩にして、且つ古代氷山の流れ來るによる』といひて、大陸の島嶼に及ぼす影響極限を凡そ三百哩となしたるは、正に吾人の此の區別に轉用するを適當なりと信ず。此の意味に於ける遠洋島は氣候上に於て大陸と何等の必然なる關係を有せざるが故に、從つて其生物に於ても頗る大なる差異あるのみならず、西曆十五世紀の末に於ける遠洋航海術の發見までは、政治上及び文化の上に於ても殆んど無關係の狀態にありたり。革命前の布哇王國の如き、及び南洋諸島の土人の如きは、即ち其好例となすべきものなり。然れども、航海術の長足の進歩をなしたる近來に於ては、僅かに往昔の面影を殘留するに留まりて、次第に其特質は減じ、遂には地人の關係上に基く此區別は、全く要なきに至らん。但し氣候上に於ける此區別は依然として消滅することなかるべし。

洋航機關の發達に伴ひ遠洋島の貿易上に於ける價値は倍々重要となれり。蓋し往時に於て單に偶然の漂流に因つて來れる蠻民の棲息所となりし、彼の森漫渺茫の大洋中に散點する洋島も、近來の遠洋航海術に對しては、造化が特に彼等の爲に設けたる避難所、休息所、貯炭所、貯水所たるを以てなり。此理由によりて、將來の吾邦人に對しては特別の關係を有する南洋無數の群島は、今や殆んど歐米各國の分割占領に歸したり。此等の洋島の價値は、殊にニカラグア運河若くはパナマ運河開通の曉に於ては益々重要となるべし。是れ我國民の特に注意すべき所なりとす。（第八章參照）

志賀云、絶海中の孤島は列國が人口增殖に分案として、海洋を開拓せんとする處の中、將來に當り、遠洋漁業の中心となり、潛水事業の根據地となり、海底電信の中繼所となり、無線電信の電池設置所となり、將來に於ける効用殊に大なるもの今日の目的なり故に目下交上の紛糾は豆大孤島よりの所領問題より廣く發す。

陸島の分布

近海島の大陸に對する氣候上及び文化の上に於ける關係の密なること は本邦及び英國に於て最もよく顯はる。本邦の氣候が他の同緯度の遠洋島に比し冬夏に於て及び晝夜に於て寒暑の差異甚しきが如きは全く大陸の影響に依つて說明せらるべきものなり。氣候既に斯の如く密接の關係あるが故に之に直接の關係ある生物の變化の狀態の所屬大陸と大なる類似を有するが如きも當然の事實と解すべきなり。

世界の地圖を通覽するときは陸島の分布に一大規律の存するが如く見ゆるものあり。六大洲の各の東岸に近く大島の存すること其一なり。亞細亞の日本島濠斯太利のニューギニー島亞弗利加のマダガスカル島北亞米利加のニューファンドランド島の如きは即ち是れにして南亞米利加のフォークランド島は稍南に偏するも尙ほ右の諸島に對せしむるを得べく歐羅巴に於て全く其對比を失ふが如きも一望無涯遙に西比利亞の大平原に連續する東歐大低原の東端に當つてウラル山脈の屹立するは恰かも亞細亞の東海に突立する日本島と同一の形勢と見做すを得。六大洲

中各二大洲の連絡に依つてなれる三大陸塊の中央接合部の東方に當つて一大群島の存ずること其二なり。細濠の間に在る東印度群島及び兩米の間に在る西印度群島は偶然の命名に出づと雖も兩群島の位置より見れば正に東西に相對峙するもの歐弗の陸塊に於て又た其の對比を失ふが如きも希臘の東方に於けるエージアン海に包含せらるゝ多數の群島は正に其れに該當せるものと見做すを得べし。歐亞大陸の連續によつてなれる所謂ユーラシヤ大陸塊の東西相反對の兩近海に形勢の殆んど相等しき二大島國を現出せるも亦其一に加ふるを得ん。（第十圖參照）近海島の大陸に於けると同樣の關係は主要の島國に隸屬する小島に於ても亦た之を認むるを得。但し其異なる所は其氣候上の關係は前者の如く著大ならざるも政治上に於て全く從屬するにあるなり。所謂邊島の名稱は正に此種の島嶼に適用せらるゝもの、而して往々所屬國の國防上重要の位置にあるものあり。

位置を以て分類の基礎となすにつきて尙ほ四周を觀察するときは右の

湖島と人生

河島と人生

他に河島及び湖島の二種を加ふるを得、湖中に散在せる小島が風波の靜穩なる內海或は港灣中に在る小島と同じく一樣平坦なる水面に變化を興へ爲めに特絕せる美景を添ゆることは本邦各戶の箱庭を一瞥するも尙ほ且つ頷推するを得べし。河島に至つては多くは河水の上流より傳送し來れる土砂の沈積して成るが故に風景上に於ては特に見るべきものなくも其の大河の下流に在るものに至りては水運交通の至便の地位にあると土壤の非常に肥沃なることにより自ら人民此處に蝟集し繁盛なる都會を現出するを普通とす。加之、河島は其位置が水運の便よく經濟上に利あるが上に軍事上に於ても其を天然に周繞せる濠渠は對陸より攻め來る外敵を喰ひ留むるの要害となるが故に往古より城砦の建築地に撰定せられ從つて後世の繁盛なる都府の起因をなせる者尠からず所謂三角洲は其の主要なるものにして太田河口の三角洲に於ける廣島城の如きは此の的例なり。

第三節　貿易上及國防上に於ける島

貿易と島

島と戰場

兵器上に於ける島

總じて島嶼が兩陸交通の站路となるによりて貿易上重要の地位を占むることは前にも少く陳べしが如し。ベーリング海峽のロウレンツ島が古き、太平洋中央の布哇島が今尙ほ米細兩大陸の交通の必經地たるが如き、壹岐、對馬が古來日韓兩國の交通の媒介たりと云ふがごと沿路たる島が古來より往々戰爭の巷となりしことは敢て異とするに足らず。歐弗の中間にある地中海のシチリア島、本邦の對馬島等の古來外戰の要衝に當りしが爲めに屢、慘酷酸鼻の歷史を留むるは著しき事實なり。此の二點の關係よりして、島は其位置により、往々商業上の中心點となり、或は兵器上の要點となる。新嘉坡（シンガポール）の如きは前者に屬するものにして地中海のマルタ、日本海の對馬の如きは後者に屬するものなり。而して兵、商の二要點を兼備するものあり。香港の如きは英人が是れに相當するものとして經營せる所なるや疑なしと雖も、今や兵器上の要點としては、稍、兩に僻するに至れり。尤も、此の兩者の一となるに、尙ほ一の考ふべきものあり。

國防上に於ける對馬及び澎湖島

世界に於ける重要なる島嶼

そは島中に大洋航海の船艦を碇泊せしむべき良港を有すると否と是れなり。若し島にして中に天然の良港を備へんか、他國の侵略上に非常なる便宜を與ふるがゆゑに被侵略國に對して却つて不利益を與ふること少からず。臺灣及び南清經略の爲めに、良港を有する澎湖島が、如何に日本軍に便利なりしか、從つて清國に對して却つて如何に不利なりしかは、最も著しき事實なり。肥前の鷹島をして、若しも内に數千の兵船を投錨せしむるの港あらしめんか、夫の七月朔日の颶風も、十萬の元軍を溺死せしむる慘狀は呈せざりしならん。吾人は更に百年前の千島列島、擇捉島の露寇史を觀るに於て、同一の關係を認むるを得べし。要之邊島は多くは侵略せんとする敵國の足場となるにより、國防上に重要の價値を有するものなり。吾人は此の意味に於て對馬及び澎湖島が如何に我が國の生存上に重要なる地位に在るかを知るを得べし。

現今世界に於て重要なる島嶼は、太平洋中央に於ける布哇、支那南海に於ける香港新嘉坡、印度洋の錫蘭紅海口のペリム、地中海のマルタ等なり。布

哇を除くの外は、悉く英國の領土たるは注意すべき所なり。近き將來に於てニカラグワ運河開通の曉には、其西口を距ること遠からざるガラパゴス島は、忽ち重要なるに至らん。然り英國政治家の既に垂涎する所のものなり。

志賀云島は孤懸洋海中に一般社會と隔離するを以て、隱レ場所となるに屈強なり、是れ平氏の殘黨より德川幕府の脱走徒に至るまで島に入りたる所以、田横より鄭成功に至るまで島に入り、羅馬のスキピオよりガ

第四節　島と英雄及罪人

最後に島の尚ほ一の觀察せらるべきは、古來失敗したる英雄豪傑の避難處たり、逃遁處たり、將た流竄處たることたり。鎮西八郎爲朝が、琉球に逃れて島王となれる、九郎義經が蝦夷に遁れて今尚ほ土人にカムイとして尊崇せらるゝ、假令不明なる事實にもせよ、鄭成功が臺灣に據りて明に抗したる、西鄉南洲か三度大島に流されたるが如き、ナポレオン第一がセントヘレナに流竄せられたるが如き、北條義時か三上皇を讃岐、隱岐、佐渡の三島に幽し奉れるが如き、將た北條高時が後醍醐天皇を隱岐に幽閉し奉れるか如き古來其の例に乏しからず。此點より見れば、島は是等の人物の爲めに設けられたる一種の避難所にして又監獄署と云ふべきなり。同一の

リバルディーに至るまで島に入りたる所以。

志賀云島は社會に離れ、人間に境ざかるを以て、世を避くるの所なり。支那福建の海島に、或は海賊を生ずるの所なり。仙人島、蓬萊島、瀛洲島、方丈島の名あり。或は筏に浮び、或は筏に乗じて島に入り、甚だ多し。ガリバルディーがカプレラの小嶼に隱れて海賊を避けたるの例たるも亦此類。

意味に於て、遐島は、又た往々獰猛なる重罪囚徒の追放處となる。北海道が永く全國重罪人の集治場たりしことは、今尚ほ吾人の記憶に新なる所。西比利亞と共に樺太島は、今尚ほ露國の追放處たるなり。

吾人は此等の理由によりて、或る種の島民の人情、風俗の一班を解することを得べし。蓋し是れ幾分は新開殖民地の多くに共通なる所なり。

第五節　開明時代に於ける島

以上列擧したる島國の特質は、之を要するに島嶼が列國と交通以外に在りしにより生ぜし者。然るに海洋航行の發達せる今日に於ては、島國の特質を生じたる障壁は、全く撤去せられたり。是に於てか、前陳の特質の大部は、勢ひ減少せざるべからざるは當然の事なり。殊に全く海洋の爲めに、大陸諸國との國際的紛擾の外に脱出したるによりて、特殊の發達をなすを得たりし、貴重なる天惠は、今や全く褫奪せられたるのみならず、之に代ふるに、此天惠に依賴して、小成に安んじたる、島民に向ては却て禍害を以てせらるゝに至れり。是れ實に多くの島國が其獨立を失ひたる故因にして、殊に殆んど等しき境遇に在りきと見做さるべき大陸内部の小邦に先立ち、布哇が獨立を失ひたるが如きは、其著しき例證なり。啻に海外に於てのみならず、開國當時の我國は、實に之れが爲に累卵の危殆に瀕したりしなり。されど、是れ一種の悲觀的の見に過きず。若し夫れ樂天的に之を觀んか、海洋航通の齎らしたる此災害も、依然として天惠となすを得。今日英國は、實に其見解より、して發達したるものにして、世界の島國に大なる慰藉と勇氣とを與ふるものなり。蓋し海洋航通が、一度、島國民を警醒したる上は、同一の刺戟は渠等をして、活動せずんば止まざらしむべく、而して一たび活動を開始するに當つては、其を圍繞せる至便の通路は、以て他の先進陸國を凌駕せしむべく、大なる幇助を與ふべければなり。斯くて島國の或ものは文明の統治者たるべく、海洋權の把捉者なるべきなり。果して然らば、開明時代に於ける島民は、其天與の位置を以て、滅亡の禍害をなすも、將た其禍を轉して、他の競爭國を凌駕するの福たらしむるも、一に其の自覺に存するものと謂はざるべからず。要するに、進まずんば退く、「先んぜざれば人

志賀云人間に遠ざかり、政治に遠ざかり、大陸地續きせざと、一般社會と隔離し、交通音信も少く、逃亡の患なし。是れ各國、東西洋の何れも島を以て流刑地とする所以、今日にても佛國は南洋のニューカレドニヤ島を流刑地となし、伊太利は地中海中のアヴァッツァナ島を流刑地となし、智利はガラパゴス群島を流刑地とな

に制せらる等の確言は、正に島國今日の境遇に適中せるものと謂ふべし。吾人は此點に就いては、更に第十三章に於て少く觀察する所あらんとす。

し、西班牙はポルト・リコ島を流刑地となしき。特に各國共に、國事犯者を島に流刑するは、島の一般社會と隔離するを以てなり。

志賀云　島は洋海中に孤懸し、一般社會と隔離するを以て、隱レ場所となるに屈強にして、且つ大陸將た主島の變遷に關係すること少きを以て、大陸將た主島に絶滅せし思想、宗旨、文物、言語、歌謠、風俗、物品の島に保存せらるゝもの甚だ多く、一々枚擧するに遑あらず。要するに島は宛も博物館の玻璃函の如く、此函中に有形無形の古物は儼然と保存せらる、是れ島の人文上に於ける大關係の所とす。本著此重要の一點を落じたるは頗る遺憾とす。

志賀云　島は水中に超絶し、人間に遠ざかりて俗塵至らず、神聖清淨なるを以て、世界到る所、社寺を其上に建てり。東京市上野公園なる不忍池の中島にすら辨才天を祀れり、其他日本に於ける實例は枚擧するに遑あらず。支那にては揚子江中なる金島の大浮屠、鄱陽湖中なる鞋山島の塔、甌江中なる霞嶼の江心寺、浙江海上なる舟山島の普陀觀音、閩江中の金山島、青海中の喇嘛寺あり、蘇格蘭のバス岩、佛蘭西の聖ミシェルは共に海上より屹立せる巖巒の島なるが上に寺塔あり、基督教徒の靈場として神聖視する所。本著些も此點に說き及ばざるは遺憾とす。

志賀云　如何なる島に行くと雖も、母陸と事物の頗る殊異するを見る。東京隅田河口の佃島に至りても、住民の東京市中に見る能はざる祭典の古式を守るを見、東京市中に耳にする能はざる歌謠を哦ふを聞くなり。伊豆熱海の海上三里なる初島に渡れば、島內四十餘戶の財產は不平均なき樣に組織せられ、社會論者の夢想せる所のものは現實にせられ居れり。東京灣外なる伊豆の大島に至れば、三百年前の婦女結髮の風、衣裝、歌謠等を見聞するを得。島と人文との關係を攻究せんとする者は、須らく何れの島にても渡航すれば、百聞一見に如かざるの感あるべし。

參考書――志賀重昂氏「內外地理學」第二章▲內村鑑三氏「地理學考」第四章▲ダーウィン氏「生物始源」（立花銑三郎氏譯）▲金田楮太郎氏「人文地理學考」地學雜誌（第八十六卷）

第七章　半島及岬角

歐洲近世の文明が、其源を希臘、羅馬の半島に發せしによりて、半島と人生との關係は、夙に學者の注目を惹けるが如し。吾人は其關係の事實を觀察し、其原因を探るに先立ちて、少く半島其者の物的特質を觀るを要す。

第一節　半島の特質及成因

半島は周邊三面の大部分は、海水を以て環繞せられ、僅に狹隘なる頸部に於て、大陸若しくは母陸と連續するものなれば、其地頸部の如何によりて

219335

は、殆んど大陸と何等の直接の關係なく、全く若しくは多少島嶼の特性を備ふるものなり。例へば、希臘のコリント半島の如き、連續部の甚だ狹隘なるもの或は河、湖、沼澤の半島をして孤立せしむるもの、或はアラビヤ半島の如き、沙漠によりて遮斷せらるるもの等是なり。白頭山脈によりて隔てられたる韓半島の如き、賓達山脈によりて限られたる能登半島の如きも、亦た或る時代に於ては獨立の發達をなさしむるに足る。半島は此等の物的特質によりて、他の大陸將た母陸とは、多少の特色を有する發達をなすなり。然れども其時期たるや、波濤なる危險物を有する海洋を障壁とせる島嶼の如く永からず。人類の少く進歩するに於ては、非常に壯大なるにあらざる限りは、此等の障壁は容易に排除せられ、遂に島質を減じ若くは滅するに至る。去れば、半島は其名稱の表はす如く、陸と島との中間物なり。

半島が斯かる特質を有するは、其成立の原因に關係すること大なり。半島の成立の或る者は、陸島の成立の反對として說明せらる。陸島は中間部の陷沒、若くば海水の洗滌によりて、分離したるものなるが、半島は之に反して、島と陸との中間に、陸地の隆起するか、若くは土砂の堆積によりて連絡したるものなり。支那の山東半島の如き、北海道の西南部に於て半島形をなすものゝ如きは、中間部の隆起によりて說明せられ、島根半島及び印度の半島の如きは、即ち土砂の堆積によりて說明せらる。又た伊豆半島の如き火山岩の噴出によりて形成されたるものあり。

文明の起點としての半島

第二節　半島と文明

半島が文明生起の多少の原因をなせることに就ては、幾多の例證の提擧せらるゝあり。希臘伊太利は、前記の如くなるが、其他基督教及び回々教が、亞刺比亞半島に起りたる、佛教が印度半島に發したる、或は支那に於て儒教の起源が山東半島にありしが如き、固より偶然の關係の混在するは論なきも、此不思議なる一致に就ては、其間に何等かの共通原因の說明せらるべきものなくんばあらざるべし。若し夫れ同一の例證を本邦に求めんか、島根半島に、大古文化の一起點の存するは史上に於て爭ふべからざる事實なるべく、伊豆半島の下田港は米國使節を歡迎したる最初の地として、新日本文明の一起點と見做すを得べけん。同じ半島に我國に於ける西洋形船舶の始造の事實と、之に與

志賀云、三百餘年前、イベリヤ半島（葡萄牙、西班牙）より南歐の文化來り、フラ

シヤルス半島（和蘭）より北歐の文化の來り、共に半島の最も多き九州の西岸に入りて日本の文化を補し、西洋の大開化を容るゝ準備をなし、尋てアンクロ・サクソンの文化、三浦半島の浦賀より轉じて伊豆半島の下田來り、日本歷史の革たるを根本的に改めたる以て日本歷史の半島と大關係あるを知るべし。

志賀云　日本も亦文化の發達に大なる貢献をなしたる江川太郎左衛門の生じたるとは、夙に世に紹介せられたる所のものなり。三浦半島の浦賀に米提督上陸の紀念を留むるが如き、房總半島の南端より宗教改革の巨人（日蓮）を出したるが如き、北海道の開拓が渡島半島に端緒を開かれたるが如きも、亦吾人の看過すべからざる所、觀じ來れば、維新の改革の先導者にして且つ主動者たる所、謂薩長肥土の輩も、亦た半島の性質と何等かの關係なしとは思はれざるなり。蓋し薩や、九州南端の半島形をなす所、長や、中國半島の西端と見るを得べく、肥前に至つては著かに半島の形狀をなす所、獨り土佐に至つては半島形を失ふが如けれど、而も薩と並んで南海に斗立する所は、全く半島形ならずと云ふべからず。土佐灣の陷落をして、今少く深からしめば、四國は著かに二半島となるべかりしなり。若し、又た或る一派の宗教上より觀れば、島原半島を以て一部の文化の起點に數ふるを得んか。著者嘗て札幌に在るや、刀圭家なる一知友と談る、氏其專攻の調査に就いて告げて曰く、種痘法が未だ我邦の內地より北海道に傳來し來らざるに

海に斗出する唯一の顯著なる半島を能登とす。日本海岸は、在來開化の程度に於て及ばず、大平洋岸の如く、日本歷史上に關係せざりき、故に能登も其の日本海岸にあるを以て、日本全躰に然る關係を授ずして、奥羽地方に比例する相當なる日本海岸に對して授與したるなり。

先立ち已に々々、北方より宗谷岬を經て傳來して、土人の間に傳播じたる形蹟ありきと、是れ亦た吾人の無意味に聞き流すに忍びざるの感なき能はざる所、何となれば、北見北端は、之を全きものとせずとも、幾分か半島性を備ふるは爭ふべからざればなり。吾人は此等の具體的事實を結合して一の原則を抽象するに當りて、尙ほ看過す可らざる半島と人生との關係の重要なる事實は、そが文化の傳送者たるにあり。古日本の文明は、殆んど之を韓半島に享受せし所、之を當時に於ける未開の日本より見れば、慥かに其起原は高麗半島にありしなり。然れども、之を更らに其本原たる大陸（支那）より觀んか、此半島は、僅に一の傳送者たるに過ぎず。此の觀察點よりすれば、前記の希臘及び伊太利も亦一の傳送者たりと云ふを得。兩者とも固より亞細亞及び亞弗利加に發生したる初代の文明を受け、之を轉送する迄の間に於て、之を結合して多少の新形式を創出したるには相違なし。然れども當時に於ける先進者たり起點たりし、東洋よりして之を見れば一の傳送者たるなり。東洋文明が希臘半島に傳はるに小亞細亞半島を經

り。文化元年賀(1861)、加藤は、能登七尾の海岸出崎の地に十町許り東の海岸に出崎の地に七尾軍艦を設け、英國より汽船發機丸、孛百里、獨龍丸、長四幅八間三十間の三檣を購ひ、之を搭載して海軍の練習、洋船の講習、修賀

由したるとは、更に著しき事實なり。此事實は又た、コロンブスを起たしめ、歐洲文明を新大陸に傳送したりし、イベリヤ半島を聯想せしむ。要之、初代の文化の轉送は半島の一天職にはあらざるか。否な是れ半島唯一の天職として以上列擧の總ての事實を說明し得べきものにはあらざるか。然らざれば此理由を以て說明し得るもののみ眞理として承認すべきにあらざるが、而して自餘の事實は之を偶然の關係として拋棄すべきものにあらざるか。何となれば、此等は他の複雜なる人生現象と共に多くの原因の複合により成るものなるを强ひて少數の事項に歸結せしめんとする、牽强附會の誤謬に陷るは、免れ能はざる所なるべければなり。抑、古代の未だ海洋航通の發達せざりしゆゑに、海を隔てたる各地に於て、各、獨特の文化を發達したりしや、此等の特發文化の相觸接し、融合して新形式を產出するがためには、自然の勢として甲乙兩地を隔つる海洋の最も近接したる陸路を求めざるべからず。半島の遠く海洋に斗出して、對陸の文化を待つか如きは正に此要求に適應するもの、且つ其大規模に洋中に突出す

に此に始まれり。加之、啓明丸は毎年長崎に航し、外兵器、西洋藥品、書籍を購求し、歸帆に臨み、加賀藩士を爲めに加賀藩に布し、藩士の識間に擴まるに少からず。是より加賀藩士は、長崎に遊學せんと同じ船に便乘して渡航し、長崎に多數の海岸を波光閃かし、文明日本の光を放つ。是れ、明治元年、起れり。官軍の越後を征討するや、其軍艦に搭加賀藩の

る所は、古代の漂流に基く、偶然的移住民を運送する唯一の通路たりし規律的海流に接近するを以て、海外異樣の文化に早く觸接するの機會を得しむるに足り、且つ又た一方の大陸との隔離物は、夫をして暫らく大陸の物質的騷亂の圈外に立ちて、徐かに無形の風化を吸入して、特性を發育せしむるに足る。此見解にして誤りなくんば、是れ實に半島國民が他の大陸國民に比して、先づ醒覺し、依て以て渠等をして暫らく文化の起發點たる賞讃を受けしむる所以のものにあらずして、何ぞや、薩摩の坊津港が疾に琉球貿易地として著はれしが如き、肥前の平戸及び長崎が疾に南蠻貿易に使用せられたるが如き、倭寇の後裔として長州人民が、疾に朝鮮國と交通したるが如きは、即ち維新の先導者たる重なる所以を說明するに足る。說明にあらずや、但し是れ未だ半島の特色の重要なる原因に留まりて、凡ての層精確に近づけんが爲めには、少くも以上の要素に附加するに、その海岸の形狀と、その配置とを看過すべからず。要するに、大陸は、各特殊の文化の

て戰地に到り、當時に軍艦の機關を操る者、大概は歐米人なれども、此時外國人の力を用ひたりし一方は亦たざりしを知らざりしを知る、實に七尾海軍効果明治二十七年、西貨の物産の輸入、月平均二十二年、尾の六十六噸の船に搭載し、自ら其事を幹して、直に露領浦鹽斯德に航し、二週日、爾後屢、往復通商を浦鹽と到る。

第三節　半島の配置并に運命

發する所にして半島は之が傳送者たり、而して島國は此等の文化を結合して大成するものゝ如し。

半島の海岸の屈曲に富むこと并に其特殊の配置をなせることは、半島の特質の幾部を說明するに足らん。茲に半島の特殊の配置として最も學者の注目を匿きたるものを、北半球の大陸が、各〻南方に向つて三個の半島を有することゝなり、亞細亞の印度支那、印度(デッカン)亞刺比亞の三半島に對して歐羅巴バルカン半島希臘を含む)伊太利半島及びイベリヤ(西班牙半島あり。北亞米利加に於ては、右の如く判然せざるも、フロリダ、カリフォルニヤの二半島は右の二半島に相當し、パナマ地峽を切斷せるものと見做すときは、之によりて生すべきメキシコ半島は、他の一半島に對比せらるゝ、即ち是なり。其他、大陸の他の半島及び本邦の諸半島を觀るに、北方に向ふものは、至つて少く、全く若くは多少、南方に向ふことは、又た看過すべからざるものゝ如し。半島の配置の此等一般の傾向が、文化の低緯度地方に發源

第十圖

世界に於ける陸地と海洋とを示す

カリフォルニア
カリフォルニア南島
島ヴァンクーヴル
島ヴィクトリア
島ヴィンランド
島ヴィンランド
島ヴィンランド

遥し、且つ深く西比利亞の内地に入れり、日本海岸に於ける浦鹽斯德直航の先鞭者なり。

して、漸次に高緯度の地方に遷進せんとする勢あるに對して或る關係を有することは當然のことい云はざる能はざるべし。

半島の天職と、其配置とを觀察し來つて、偶々現在の半島國に想及すれば、吾人は無量の感慨に堪へざるものあり、何ぞや、二千餘年の昔他の北方民族が、未だ蒙昧野蠻の生活を遂けつゝありしに當り、既に々々文明の曙光を放ち、以て現今の文明の基礎を遺したる希臘羅馬の半島國は、今や果して如何、印度亞剌比亞の兩半島國に至つては、僅かに史上に其盛名を留むるに過ぎず、イベリヤ半島と、朝鮮半島とに至りては氣息奄々、僅かに露命を繋くの悲境に沈淪しつゝあるにあらずや、不知半島國は悉く斯かる運命に遭遇すべき法則あつて然るか、概するに半島國は、未開時代に於て、文化の曙光を放ちたるのみにして、忽ち他に轉送すると共に終りを告げたる、海命者と謂ふべきか、之を將來に滿々たる希望を有して發育しつゝある、島國に比すれば、其運命に過去と將來との差異あるが如し、蓋し半島が、島と、大陸との中間物なりとの特質は、此事實に對つて幾部の既明を與ふ

る、を得べき乎、夫れ島と半島との異るところは、彼が一章帶水を隔て、永く大陸騷亂の外に超然たるに反して、山脈、湖沼、沙漠等によりて暫く大陸と別離したるにあり、此等の陸上阻碍物が、未開の人民に對してこそ暫らく障壁の効を奏したれ、恒雪線上に脱出したる非凡の高山脈にあらざる限りは、狩獵生活に於て練習したる健脚なる山民の容易に通過し得るによりて、忽ち全く撤去せらるゝこと、決して島國に於ける海洋の夫れに比すべくもあらず、是に於てか、半島の比較的天惠に浴したるによりて、先んじて文化の域に達したる所は、忽ち强暴なる蠻民の垂涎するところとなるは免るべからざる所、然るに、由來險に據りて興りたるものが、險を頼んで安んずるにより、滅亡するは、興亡史上に於て彰著なる所のものなり、斯くて文化の中心點が、大陸若くは、母陸の中心に發生したるときは、最早半島が、其天職を盡したるの時なり、半島國の運命が永からざる知るべきのみ、果して然らば、同一の關係は、未來に運命を有する島國民にも亦警戒すべき所にあらざるか、何となれば、往時に於て、最大の要害として、之に據つて

立つことを得しめたる其障壁は、現今に於ては、却つて至便の通路となりたればなり。

半島の底部と端部

第四節　半島の利用

半島か島性を帶ぶるにより、島と同樣の關係を人生に及ぼすことにして注意せらるべき者は、そが失敗の英豪の隱遁處にして、又た其流竄處たるにあり。頼朝が伊豆の蛭ヶ小島に流竄せられたるが如き、同國の伊東が日蓮の貶謫處たるが如きは即ち是れ。聞く能登半島到る所に、無名の山陵ありと、又以て此事實を證するものなり。

又繁盛なる貿易港が半島の底部に發生するに對し、國防上重要なる軍港が其項邊に存するを觀れば、半島が其部分によりて、多少人生に對する影響を異にするを知るべし。

第五節　岬角と人生

岬角が航海者の目標として、洋海區劃の境界として、一部の人生に頗る特殊の關係を有することは、岬角の名稱が他の部分よりは綿密に命ぜられたるによりて知るを得、然れども其小局部なる所は、特殊の人生に、顯著なる影響を及ぼすに足らず。而して其航海上に於ける僅なる關係と雖ども、便益は其防害と相殺せらるゝものゝ如く、要するに積極的、直接的ならずして、消極的且つ間接的なるに留まる。但し岬角が海流の方向に少からざる關係を及ぼし、從つて人生に大なる關係を有する、魚族の分布に重要の影響を及ぼすことは看過すべからず。後章に於てなほ述ぶる所あらん。

參考要書――▲志賀重昂氏「內外地理學講義」第二章▲メークルツヨン氏「比較的新地理學」第二一九頁▲金田橘太郎氏「人文地理學考」（地學雜誌第八十六卷）

第八章　地峽

第一節　地峽の種類幷びに地峽と人生

陸地の縊れて狹細となりし處、之れを名付けて地峽、或は地頸となす。峽を以て「山峭夾水」を言ふの原義に從へば、寧ろ地頸とするを適當となすべきか。吾人は地頸の完全なる觀念を海水によりて狹ばめられたる陸地に於

て得、然れども地頸の意義を右の如しとすれば、單り海水によりて成されたる者のみに限るべからざるを信ず、地人の關係上より觀れば、海洋に通じたる反對の方向に流るゝ兩河系によりてなされたる狹陸部をも、地頸と視るに妨なかるべければなり、同一の理由によりて一方若くは兩方共に湖水を以てなされたる頸部も亦た地頸となすを得ん、此の如く考察するときは吾人は地頸に左の數類をなすを得、

一　海水によつてなれる地頸

二　河水と河水若くは海水とによつてなれる地頸

三　湖水と湖水若くは河水とによつてなれる地頸

世界の地圖を通覽して、多少繁盛なる都會が、地頸部に發生するを觀れば、地頸と人生との一種特別なる關係の存するを認むるに難からず、蓋し貨物の運搬に、陸路に比して水路が遙かに便利なるとは、人智未開の時代に於て既に認識し、且つ利用したりし所、而して此事は航海手段の發達に伴ひ、倍々彰著となれり、此に於てか、人類は、地頸によりて切斷せられたる水路

に在りては、相對せる兩水路の端を連結する最短線に沿ひて、橫過せんとするを常とす、是故に地頸の橫徑は兩海連結の重要なる通路として、屢々選定せらる、航海機關が愈々進歩して、今や水路は貨物の運搬に至便の通路となりたりと雖も、其發達の影響は、未だ人類其物の運送には普く及ばざるものゝ如く、未開時代の思想の惰性とも見るべき、海上危險に對する恐怖と、多くの陸上生活者の嫌忌する所の眩暈とは、今尙ほ人類の通行に甚だしき迂回と、大なる費用とを要せざる限りは、可成陸路を選ぶの傾向あらしむ、是に於てか兩陸を連結する縱徑も亦人類通路の重要なる者となり、斯くて何れの地頸も此縱橫二要通路の交叉點となりて、貿易上重要なる部分となる、何となれば各通路とも茲に至る迄には、恰も大河が無數の支流を合したるが如く、多くの通路を合併したるものなればなり、尙ほ精密に云ふときは、古來貨物の運搬に對しては、水路は陸路に比し重要なるが故に、都府の發生地は兩水路を連結する通路の一端若くは兩端にあり、又た往々之に添ふを通例とす、札幌は石狩灣と膽振灣により形成せらるゝ

地頸部の最短横徑線内にあり、敦賀、大津及び大阪は他に港灣の原因ありとするも、日本海と瀬戸内海との最狹地頸部にあり、松本は信濃川と木曾川との中間にあり、其他此例を求むれは至る所に多からん。アドリア海と、舟楫を通ずべきドナウ河との間に介する地峽は維也納に於て最も狹く、セーヌ河とロアール河との間なる地峽は巴里及びオールレアンに於て最も狹し。ニュールンベルヒは略ぼドナウ河とマイン河との舟楫の上端の間なる中央にあり。ライプチヒはマイン河とエルベ河との間に、インスブルックはドナウ河とアヂェ河との間にあり。アレッポはエウフラト河と地中海との間にあり。とは經濟學者ロッシエル氏の既に記述せる所なり。

ニュールンベルヒ　ハベリアの市。(49°27N.11°5E.)

アヂェ河　伊太利のポー河の北を流る。

インスブルック　ドナウ河の支流なるイン河の上流に在り。

地峽に對する設備

第二節　地頸に對する近世の努力

地頸の交通上重要の性質を帶ぶる所近世の人類は之に單簡なる陸路を通するを以て滿足せず、更に大なる努力を加へて之を利用せんとしつゝあり。運河及び搬船鐵道は其重要なるものなり。地頸は此等の設備により て海峽と變じ若くは海峽の効用をなすに至れり。蓋し貨物運輸の迅速と、廉費とを計るには單に距離の短縮を力むべきのみならず、荷物の揚卸の手數を省くこと肝要なり。此の目的のためには運河開通は最も適當の方法なりと雖も、是迄の人力に對しては、運河の開通は湖沼の地頸中に存ずるか、其他の之を促する事情なくば、容易に成功せざることは、後章に觀察する如くなれば、堅岩等の障碍によりて、容易に横截する能はざる地峽に於ては、一時他の方法によりて、我慢するに至れり。搬船鐵道は、即ち是にして、其構造は、能く重力の中心を失はざる仕組になし、以て大仕掛に大船巨船を荷物を滿積したる儘、一方の海岸より他の海岸に運搬するものなり。墨西哥のテフアンテペク鐵道は、即ち此種のものにして、北米のノヲ・スコチア半島の頸部を横斷せんが爲めにも、此種の鐵道布設せられたりと云ふ。搬船鐵道が一時人類の交通の望を滿足せしめたるには相違なかりしかども、未だ估息の手段たるに過きざれば近世世界の大なる努力は運河開鑿に最も多く注がれたり。地峽に於ける運河開鑿の計畫せられたる最も大規模のものはスエズ運河に過ぐるものあらず。吾人は佛人レ、セップ

搬船鐵道

運河の開鑿

スエズ運河

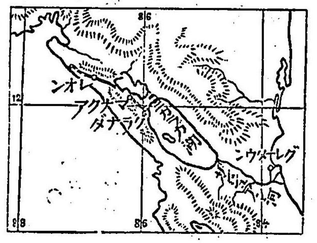
氏の偉大なる精力によりて、現今世界の中心市場と云ふべき倫敦へ凡そ三千浬の近接を得たり。即ち倫敦横濱間の海路は喜望峰を經過せる時代に於ては、一萬三千百餘浬なりしが、此運河の開通によりて一萬十餘浬に減せるなり。

近き將來に於て成功を見るを得べき、ニカラグワ運河の開鑿に至つては、更に廣大なる影響を世界の交通上に與へ、殊に我國の世界に於ける位置に至大の變化を及ぼすものなり。されば吾人は此運河を單に他國の者として輕々に看過すべからず。

ニカラグワ運河

第十一圖　ニカラグワ運河開鑿豫定地

志賀云、近世成就したる運河にして北歐に關係を與へたるものは、バルチック海と北海とを連絡せる鴨逸計畫のキール地峽運河、南歐に關係を與へたるものは、アドリヤチック海と多島海



平洋岸なるプリトー港に出づるものにて其延長百八十六哩餘、深さ二十呎乃至三十呎、其中河湖の利用せらるべき者を除けば運河固有の里程は六十七哩に過ぎず。

大四洋に面するサンヂヤン北河即ち英名グレイタウン港を起點とし、初めはサンヂアン河の水路を利用し途中より之を見捨て、ニカラカ湖を横斷りて大

氏の偉大なる精力によりて、現今世界の中心市場と云ふべき倫敦へ凡そ三千浬の近接を得たり。即ち倫敦横濱間の海路は喜望峰を經過せる時代に於ては、一萬三千百餘浬なりしが、此運河の開通によりて一萬十餘浬に減せるなり。

近き將來に於て成功を見るを得べき、ニカラグワ運河の開鑿に至つては、更に廣大なる影響を世界の交通上に與へ、殊に我國の世界に於ける位置に至大の變化を及ぼすものなり。されば吾人は此運河を單に他國の者として輕々に看過すべからず。

希臘計畫のコリント地峽運河是れなり。將來東洋一帶に關係を及ぼすものは、クラ地峽運河へ馬來半島の頸部、印度洋系と大平洋系とを連絡するものゝ成就是れなり。

とを連絡せる

さて其の開通が吾人に如何なる影響を及ぼすかを見るに運河の一端なる太平洋岸のプリトー港より横濱までの最短距離は大凡七千百四十浬にして又たニューヨークよりニカラグワ運河を經由したる東洋諸港への距離は、從來スエズ運河を經由したりし距離に比較すれば大凡左の如しといふ。

ニューヨークよりシンガポール迄	一萬千五百四十九浬	二十九浬多し
ニューヨークよりホンコンまで	一萬千三百八浬	二千三百六十浬少し
ニューヨークより横濱まで	九千三百六十三浬	五千九百五十浬少し
ニューヨークよりメルボルンまで	一萬浬	四千九百二十浬少し

此の結果ニューヨークより横濱到達の貨物は五千九百浬の短縮をなすを以て、從來スエズ運河を經由したるものは、必ずニカラグワ運河に由ることゝなるべし。又た以て東方亞細亞と亞米利加の大西洋岸地方との近接を見るべし。

此稿將に印刷に附せんとする時、偶ゝ西電はパナマ地峽開鑿確定の報を傳へたり。依つて前記ニカラグワ線との關係を觀るに左の如きものあり。

パナマ運河

ニカラグヤ線は百八十六哩の全長なりと雖も、パナマ線の距離は僅に四十九哩強に過ぎず。又たニカラグヤ線の内には湖水及び河流の利用せらるべきもの百餘哩ありと雖も、パナマ線にも既に佛人レセップの手によりて三分の一以上の工程を終へたるあり。故にパナマ線の殘工事はニカラグヤ線の約三分の一に過ぎざるべし。唯パナマ線の開鑿權が既に佛國パナマ運河會社に歸したるを、ニカラグヤ線に比して不利の點となす。されば北米合衆國の官民の希望は最初よりニカラグヤ線の開鑿よりはパナマ線の買收にありしが如きも右の事情あるにより前記の會社及びコロンビヤ政府等に對する交渉の手段として米國の聯合は益に大統領に條件附にて、兩線の何れかを撰擇決定の任を與へ、以て大統領に臨機應變の處置を爲さしむることゝなせり。斯くて米國は運河の沿岸に於て幅六哩の土地を借入れ、其區域内に於ては米國は自由の警察權を行使し得ることゝなり、之に於てパナマ運河を開鑿することに確定したるものなり。

二十餘年前佛人が大失敗をなせしより、一時は殆んどパナマ線を顧るものなきに至りしも、其のニカラグヤ線に比して幾多の優點あること前陳の如く、失敗の主因は工事の困難よりは不精確なる豫算に隨ひし資本の缺乏にありしかば米國が其豐裕なる富力を以て之に當るに於ては、必ず數年ならずして竣功すべきや疑を容るべからず。其結果は多少東亞殊に我邦との關係に變動を生ずべきは言を俟たざれども而も兩線の距離は左程の遠サにあらざればニカラグヤ線の影響と大なる差異はあらざるべし。

我邦と地峡設備

國形狹長殆んと國の全部が多少地峡の性質を帶ぶるに、且つ半島岬崎に富める我邦に於ては、地頸に對する以上の設備は決して輕視すべきにあらざるを信ず。是に於てか本邦に於ける地頸に對する努力を顧るに冏眼なる達見家は既に々々多少は蹟を遺せり。利根川と江戸川との間に於ける關宿運河は其成功せるものなるが。其他に利根川と東京灣とを連絡すべき印旛沼運河の開鑿及び琵琶湖と日本海とを連絡する鹽津敦賀間の開鑿工事等も數十年の昔に於て計畫せられしなり。

參考要書――▲ロッシエール氏國工經濟論第一章▲目賀田種太郎氏「ニカラグヤ」運河（東京日々新聞卅四年七月

第九章　山嶽及谿谷

島國民にして、且つ山國民たる吾人に對しては、山岳は地表の特殊の部分中、最も親密の關係あるものゝ一なり。邦人の苗字に、山及び山に關係したる文字の最も多く用ひらるゝは、卑近に此事實を表明するものゝ如し。今や此の關係を細視するに當り、山岳も亦他の地表現象の如く、人間に特殊の影響を及ぼす、諸方面に分解するを便なりと信ず。第一に學くべきものを高サとなす。

第一節　山の高度と人生

山嶽は其特質の高度により、多くの影響を人類に及ぼす。されば人間は、此の特殊の影響を與ふる高度によりて種々の名稱を附して山を區別せり。即ち地上、少しく高き所は丘或は小山の稱あり、此名稱たるや、地方によりて其意義を同ふせず。平坦なる國に於ては、僅かに小高き所に猶ほ山の稱を附するか如し。丁抹地方に於ては海面上僅かに三百尺の丘地に猶ほ天山の稱ありと。仍て知る、人類の感覺の異なるに應じて、其呼稱を異に

高度と交通

志賀云、昔時のハニバル、近世のナポレオン第一が越えて以て伊太利の平原に入りたるアルプス嶮は、蓋し軍隊を率ゐて攀ぢ登り得べ

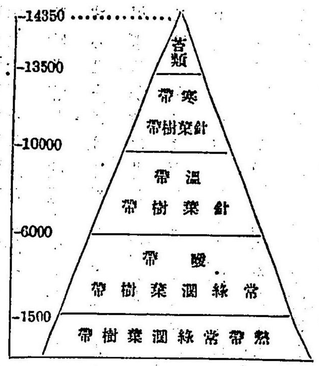
するを然れども、一般に海面上よりの高低によりて、直立千六百尺以下を丘となし、之より七千五百尺までの山を中山となし、之より以上の高度を有するものを高山の部に入るゝを常とす。

山は高度を加ふるに隨つて倍々人類の往來を阻礙す。蓋し地上の一切の諸物と、等しく地球の引力を脱却する能はざる人類には、垂直線内に移動することは水平線に沿うて移動するに比すれば、引力線に抵抗せざるを得ざるか故に非常の勞力を費ざゝる能はず。是故に人間は水平線の大なる延長を厭はずして、可成直立線の延長を避く。函根碓氷の兩峠や、共に三千尺餘の高さに過ぎず、而かも尚ほ七百年間、幕府をして存立せしむるに足り、二万九千尺の高峰を戴くヒマラヤ山脈は、支那と印度との二大民族を離隔して、特殊の發達を遂げしむるに足れり。然れども、一方に於ける、此の障害は、他方に於て、小國民をして、他の大國民の壓制を脱して、獨立せしめ、以て特殊の文明を發生するの好機を與へたるは、其例に乏しからず。尤も此障礙は、人類の攀登方便の進歩と、山骨横截力の發達とにより、次第

き高度の限界なるべしと信ず。

高度と植物

第十三圖　新高山に於ける植物分布の上限界



に其勢力を減じ將來に於て高度の直接影響は殆んど減殺せられんとする傾向なきにあらず。然ども邦國の境界線の多くが山岳の連接線と一致するを見れば其障礙の今猶ほ依然たるを見るべし。

上圖は新高山に於ける植物帯なるが、之によつて南臺灣より北千島列島に至る、一千二百餘里の間に分布せる植物を一山に縮植するを觀るべし。よつて高山は熱帯より寒帯に至るまでに發生すべき、特殊の植物を一ヶ所に集植したる一種の植物園と見做すを得べく、而して高度によりて整然異種の植物を排列する所は、一種の整頓したる草木壇と云ふを得べし。殊に本邦建築材として最も重要なる「ヒノキ」「サハラ」「ヒバ」「スギ」等の針葉樹の如きは悉く多少の高所に於て發生するものなれば山が高度によりて生物の種類を多からしむ

る、を知るべし。

高度と動物

山既に高度によりて、一所に多種の植物を共生せしむ、之れに伴ひて生活する動物に於ても亦た然らざらんや。聞說く、甲州富士川の谿谷の邊り、叢竹積雪の重量に堪えず凄まじき音を發して摧折せらるゝや、野猴其下に在りて是れに驚き、悲鳴を發することは甲州民の常に聞く所なりと。猴も竹も元來熱帯圏中の生物、然るに寒帯の代表者たる氷雪と共に同一の場所に棲息せしむ。之れ到底他國殊に平原國に於て想像し得べからざる所、蓋し又山嶽の賜なり。

高度と水源

山が高度によりて、人間に影響することの更に大なるものは、高山が水源の涵養地となること是なり。海面より蒸發する多量の水蒸氣を含有したる空氣が、山の秀出によりて遮らるゝに當りては、自ら山側に沿うて上昇す。然るに、氣温は地表を距ること遠ざかるに從つて其温度を減ずるものなるが故に、上昇の空氣は、自ら其温度を減じて、空際の氣温と平均すべし。而して同時に水蒸氣を包含する量、即ち飽和點の下るによりて水蒸氣を

高山と大河

山と文化

高度と崇高

游離せしめざる能はず。斯くて游離したる水蒸氣は、即ち雲となり、霧となり、雨となり、雪となりて地表に降下し、以て水源をなす也。果して然らば高度を加ふるに從つて水源の涵養の度も倍加はるべきは理の見易き所斯くて水量の多き大河は大概高山に隨伴する也。若し又た山が單に高サに、よつて、人類の憩息處たる地表面を擴張するのみを考ふるも、人類に影響することの尠少ならざるを觀るべし。

社會學者は海岸線の延長と社會の文明と一致すると同一の理由を以て、國の文明は土地の尨雜と正比例すとなせり。山は高く空際に突出するによりて、及び夫がために谿谷を生ずるによりて地形に變化を與へ、土地を尨雜ならしむれば此點により文化の發達に關係尠しと謂ふべからず。吾人は彼の海岸線なる語に對して假りに之を氣岸線と云はんとす（第十八章參照）

山の高度の影響は之れに留まらず、人間の山に對する崇敬の程度は其の高サの加はるによりて益加はるが如し。高サ一萬二千四百尺、日本第一の

高度を有したる富士山が如何に日本人をして莊嚴の感を起さしめたるか、從つて幾多の壯者信仰者を誘ひて登山の元氣を鼓舞せしむるかは以て此事を說明するを得べきにあらずや。

第二節　山の各部と人生

人類は山を高サと形狀とによりて頂、麓、中腹の三部に區別せり。蓋し此區分を要すべき特殊の影響あればならん。山頂には又た種々の異稱あり。嶽、巔峯等は其重なるもの、高度と共に、山岳に聳拔、峻秀の姿を呈するものは山巔の形狀にあり。然るに、形狀も亦た圓頭形をなすもの、錐形をなすもの、臺狀を爲すもの、將た缺項圓錐形をなすもの等種々の異容あり。以て各種の成因を表現するものゝ如し。就中特に異風を呈するものを火山岩によりて成るものとなす。頂上に圓形の噴火口を留むるによりて缺項圓錐形をなすを普通とすれど、時には火口壁が水蝕風化の作用によりて、崩壞せられたるが爲めに、劍ヶ峯、雷岩、釋伽の割石、以上富士山巔の奇岩等の名稱を以て表はすべき橋奇變幻の姿を呈するもの、或は越後の妙高山、千島の

チヤチヤノボリ等に於て見るが如き、鋭頂圓錐形の上に、更に同容の小峯を戴きたるものあり。山岳崇拜の日本人により命ぜられたる山名には、多くは夫々適應の容姿を表はすを常とす。劍嶽、高千穗峯、五劍山、鬼ケ城山、駒ケ岳、鍵ケ岳、妙高山、恐山等は、其中の最も其山の怪異を表はすもの。此の奇峯に加はりて、更に秀麗を添ふるものは、雪の冠したるなり。

田子の浦ゆうち出て見れば眞白にぞ
富士の高峯に雪はふりける　山部赤人

の如き、或は白山、玉山等の名稱を冠するものゝ如き是なり。

山麓は山岳の立基する周圍の低き處、又山脚の稱あり。山と平地との境界是に至つて判然區別し難しと雖も、而かも少しく注意するときは、特種の影響を人類に與ふるによりて、自ら其區別の心面に浮ぶを覺るべし。此事たる火山に於ては殊に著し。裾野の稱あり。巨智部理學博士嘗て日本風景論を批評するに當り、其著に加ふべしとて左の語あり。山麓と人生との關係を見るを得んか。

本邦風景の秀美を占むる火山の經麓なるは、大に其裾野の形狀如何に由らずんばあらず。富士、島海、若くは海門。裾野の佳景なくんば、又只通常火山と云ふに過ぎざらん。且裾野は土肥えて多く眞種の牧草を產す。故に古來牧場の設あり。又名馬の產地たり。

中腹にも亦種々の異稱あり。坂、登り、半腹、山腰、山懷等。而して其傾斜の急劇をなす所に至りては崖、峭、壁等の稱あり。山腹の人類と關係ある所は、其傾度にあり。山の聳立は人類交通の障礙物にして、交通を阻害せしむるに與つて、大に力あるものは傾斜にあり。何となれば非常なる非凡の超出にあらざるよりは、傾斜緩慢ならんか、人は容易に之を超越し得べけれはなり。至る所の山坂に螺旋狀の經路を觀るは、即ち其傾度を緩うする手段に外ならざる也。蓋し人類の耕作し得べき土地の傾斜は十五度以下となすなり。登りて二十度を超ゆるに至れば、最早牧場とも成し難し。故に此以上の斜面は天然力に、最も多く依賴すべき森林區域となさゞるべからず。而かも尙ほ一定の程度ありて、それ以上の急斜に在りては全く蔓草の蔓延に委せざるべからず。然れども急斜地の利用

は、將來に於て等閑に附すべからざることにはあらざるか、然り山間の農家が南瓜等の栽培に小く利用するを觀れば、他に今少しく有益の利用法なきにはあらざるべし、聞く所によれば某地方には之を葡萄の栽培に利用せるものありと、思ふに蔓草の天然的區域として最も當を得たるものならん、若し果して功を奏すべくば、本邦の如き山嶽國に於ては、一大富源とはいはざるべからずや、而して人間の躋攀し得べき限界は、四十五度以下にして、砲車を牽引し得べき程度は二十八度以下なりと云ふ、九郎義經が鵯越の嶮を冒して奇功を奏したる、平氏か之によりて大敗を取りたりといふが如きも、要するに此傾度觀測問題に歸すべきに似たり、傾斜の度が戰畧上に關すること如斯し、されば土地にして甚しき突出にあらざる小丘と雖とも、若し傾度にして人類の躋攀程度以上にあらむか、能く交通を阻隔するを得べし、古の築城及び防禦の戰畧は、畢竟此の關係を應用したるに外ならざる也、山腹の傾斜が水蝕作用に協合せらるゝことにより、て、人類に關係を及ぼす、他の一二は絶景奇觀を表はすと、地層斷面の露出

とにあり、奇景の造出につきては、水力の協同を要すれば吾人は後章に於て、更に觀察することゝなすも、茲には地層露出を看過すべからず、そは人間生活に直接に要用なる鑛物が之によりて地表に出さるればなり、夫れ現今文明の二大要素とも云ふべき、石炭及び鐵を初めとし、金、銀、銅、鉛等の金屬より、日用住家に缺くべからざる建築石材に至るまで、後章に於て說く如く、元來深く地底の深層に潛在すべきものなれば、山嶽の地表に運送するなからんか、如何てか、地表に出て、人類に利用せらるゝを得む、山が生物界を多種ならしむること、吾人既に之を云へり、今又文明の重要原素が山によりて運はるゝことを知る、宜なる哉、地面の複雜が文化の發達に大關係を有することや、上來、山を各部分に分解して觀察したるものは、吾人の心意の自然の順序と、將た說明の便宜とによりたるのみ、されば吾人は此等の各部分の結合して成る、全躰の影響を看過すべからず、

第三節　山の集合と人生

以上は山の單複を考へずしての觀察なるが、夫れ等の要素と人類との關係は、

各要素が相連合するによりて、更に其勢力を増大することを推定せしむるに足る。吾人の觀察すべき實際の山には、孤立するもの甚だ尠く、多くは群山の相連立し、若くは幾立するを常とし、以て所謂山國となりて顯著たる影響を人類に與ふ。

山塊　群山の相重疊し、叢立するを山叢、或は山塊と稱し、又た蜿蜒して一條の連鎖の如く連立するを山脈と名く。而して此等の山脈若くは山叢が、之を立基せしむる基盤によりて相連絡するときは、之を全躰より見て、山系と稱せり。

山脈

山系

又た山脈の相會合する所に結嶺の稱あり。單一なる山の要素が、人間に及ぼす關係は、複合の山に於ても異なることなきのみならず、相連合するによりて、大なる勢力を成すことは既に注意したるが如し。高サ及び傾斜と交通との關係は、之れに於て最も顯著となる。山が連合して山脈若くは山叢をなし、恰かも墻塀の如く、人間の交通を阻害することは、是れ人類をして分居せしむる所以、而して之によりて、人間社會に特種の發達をなさしむるものなり。此の場合に於て、人間は其山脈中に於ける最も低き點を求めて之を通路となし、山脈の兩側より迂回するも、之によることは、恰

志賀云表日本の主部と東原部との關斷すなわち分水嶺上、即ち攻守要害の處にあり、箱根ノ關本州と中部日本との關斷すなわち分水嶺上、即ち攻守要害の處にあり、

かも河の兩岸に住居する人民が、橋を求めて其に集るが如し。此點に峠、或は嶺の名稱あり。山脈が既に人間分居の區界をなし、以て兩側に特殊の人類を發育せしめたるものなるが故に、此兩人類の要求によつて出來たる通路、即ち峠に古の封建時代に於て關守なるものを置き、通行の人を監督するを常とす。函根の關、不破の關、逢坂の關等の如し。峠が既に關守を置きて、通行の人民を督視するの必要ある所となれば、此點の得喪は、一國戰略上に於て頗る緊要なることとなる。是れ古來多の戰爭が峠に於て交へられたる所以なり。

山の高サが、又水蒸氣の凝結に重要の原因なることは前記の如し。然れば此等の山嶺の連接したる山脈が、下降したる水を分ちて兩側に放出すると、恰も屋棟に於けるが如し。之を分水線とは云ふ。山嶽によりて凝結せられたる雨雪は、斯の如く分水線によりて、兩斜面に放出せらるゝ。此時に於て、彼れの獨特の勢力を奮ひて、山皮を削壞し、之を運搬して、平地に持ち來す。以て地貌を變形するに至る。即ち、山脈は陸地の骨骼にして、地形は殆ん

嶺上、即ち攻守要害の處にあり、雄氷ノ關日本海に向ひて大平洋に注ぐ。

以レ目て攻ちレ目て守レ目て攻ちレ目て守レ目て攻ちレ目て守

三條の往還の輳集する處にして、而かも京畿に入る門戸たり、即ち攻守要害の處なるを以て逢坂ノ關あり。

ど之によりて左右せらるゝものなり。

されば吾人若し地圏上に於て某地の地勢を想像せんには、須らく先づ山脈、河川の方向に注意すべし。山脈と河川との兩要素を觀じて、然る後ち、始めて地圏上に於ける、大陸の地勢を推察するを得べきなり。然るに世間の地理書を觀るに、往々先づ地勢の大略を説明し、然る後、此の觀念の上に山川を結合せんとせるものゝ如し。是れ吾人の心意の運用の順序に逆ふものにして、地勢の説明は勢ひ獨斷的に陷らざる能はざるべし。

第四節　山脈の方向と人生

縱山脈と横山脈

山脈の方向の南北に連るものと、東西に亘るものとに於て、著しく人類に對する影響を異にす。前者は經度線に並行するもの、吾人之を縱山脈と稱し、後者は緯度線に並行するもの、之を横山脈と云ふ。横山脈は兩側の國民を確然區分せしめて、之が統合上に非常の防害を與ふるに反し、縱山脈は之によりて兩分せられたる國民の結合に於て障害とならざるが如し。之れブーエー氏の指示したる事實なるが、各國の歴史と地理との關係を研究するに於て、幾多の例證を擧ぐるを得べきによりて、今や學者の等しく承認せる原則となれり。ヒマラヤ山脈は崑崙天山の兩山脈と共に亞細亞の中央部を東西に走りて印度、支那の二大國民を區別し、西藏は支那の屬國と云ふと雖も其實別國を爲せば寧ろ三國民が區別せらると云ふも不當にあらざるべきか。其言語、宗教、風俗、政治が、此山脈の南北によりて、全く區別せらるゝは著しき事實なり。之と同一の地勢は、歐羅巴に於ても現はさる。即ちアルプスの相並行せる山系は、伊太利、瑞西、獨逸の三國を區別し、而して其宗教、言語、風俗、政治上の大境界線たるは、ヒマラヤ山系に於けるが如し。等しく羅甸民族にして、同一の宗教を奉じ、殆んと同一の言語を使用し、性質亦た相酷似せる佛蘭西、西班牙兩國が、永く同一の國家を組織する能はざるは、僅か四千メートルを越えざるピレネー山脈の東西に亘るものあればなり。蓋し氣候變化の重要なる原因は東西にあらずして、南北に在り。然るに此重要なる原因に、横山脈が墻塀となり、南北の兩地を區劃し、加ふるに反對の方向を取れる二斜面をして、益〻其差異を增大せしめ、所謂陰國と陽國とを生ずるが故なり。這般の關係は、本邦の山陰山陽兩道

志賀云山系の幅廣く綿亘するものと、山系の處々に割斷する處あるものとの差異を生ずるものとす。ヒマラヤ山系の如き、唯だ南方のみ平原に接するを以て、南下する河流のみの水源を成すものとの二種是れなり。二者共に山脈によりて分たれたる兩地の交通上に障礙を與ふるは相等しと雖も、海洋が至便の通路となりし現今に於ては、後者は殆んど防害の事情を消滅したるものゝ如きに反し、海岸線に附近する地方の人文に夫れ〳〵の差異を生ずるものは、今尚ほ交通上に極めて大なる障害を人間に與ふるを見る。前者は海岸と內陸とを隔離せしめざるに後者は全く之を離隔せしむればなり。想ふに人間の發達は多く海岸より始まる。內地の發達は此の至便通路と連絡することにより、海岸は內地の發達を俟つにより、共に始めて其の効力を全うするを得べきに、此兩地を隔離する墻塀あらば其影響の重大なる知るべき也。此事實は本邦奥羽の東岸、及び臺灣の東岸に於て明瞭に表はさる。此等を東海道の山岳と比較するときは更に一層明著なるを得べし。山脈の海岸に對する方向につきて、更に重要なることは氣候、土に及ぼす影響、從つて之によりて人類に及ぼす影響なりとす。氣候中の一要素たる水蒸氣は海洋を其源となす。然るに此水蒸氣の凝結せしむべき山脈が、海岸に並行して遮斷するあらば、兩地の氣候に大差あるべきは當然のことゝ云ふべし。本邦の冬季に、日本海岸地方に深大なる雪國を現出せしむるに反して大平洋岸諸國に晴天を表はす所以のものは中央山脈が海岸の方向を一致する結果なりとす。此事實は更に大觀して歐羅巴洲と亞細亞、亞弗利加、及び濠斯太剌利亞諸洲とを比較するによりて了解するを得べし。

後の三大洲が悉く內部に廣漠荒冷なる沙漠を有するに反し、歐洲の全く之を缺く所以のものは、山脈の海岸に對する方向の差異あるによるなり。南北兩米の地形と氣候とは、一見例外なるか如しと雖も、少しく地圖を細視するときは、其の理由を發見するに難からず。兩米は共に東西に當りて海岸と並行せる山脈を有せり。即ち北米のロッキー山脈とアパラシヤン山脈、南米のアンデス山脈とブラジル山地と是れなり。然れとも兩方に山脈により雨量の遮斷せらるゝあると共に二者共に南北に海洋に向つて展開したり。是れ歐洲の如く沙漠を有せざるに拘はらず、プレリー(北米)パンパス(南米)の乾燥したる草原を有し

に下さず、南米のアンデス山系の如きも亦た然り、唯だ東方のみ平原に接するを以て、下東すること、云ふべし。本邦の冬季に、日本海岸地方に深大なる雪國を現出せしむるに反して大平洋岸諸國に晴天を表はす所以のものは中央山脈が海岸の方向を一致する結果なりとす。此事實は更に大觀して歐羅巴洲と亞細亞、亞弗利加、及び濠斯太剌利亞諸洲とを比較するによりて了解するを得べし。

後の三大洲が悉く內部に廣漠荒冷なる沙漠を有するに反し、歐洲の全く之を缺く所以のものは、山脈の海岸に對する方向の差異あるによるなり。南北兩米の地形と氣候とは、一見例外なるか如しと雖も、少しく地圖を細視するときは、其の理由を發見するに難からず。兩米は共に東西に當りて海岸と並行せる山脈を有せり。即ち北米のロッキー山脈とアパラシヤン山脈、南米のアンデス山脈とブラジル山地と是れなり。然れとも兩方に山脈により雨量の遮斷せらるゝあると共に二者共に南北に海洋に向つて展開したり。是れ歐洲の如く沙漠を有せざるに拘はらず、プレリー(北米)パンパス(南米)の乾燥したる草原を有し

たアンデス山系などに比較すれば、猶ほ且つ幾何か別れ居る部分あるを以て、上記の諸山系は何れも欧羅巴の四方に河水を流下する河流源を此の如く四下般の建河呼に文明起り、邦建たるを以て、欧洲にては上の諸山系の四面に邦建ち、文明起り偶たること然にあらずと知るべし。

て他の暗大洲に類似せる所以なり。

志賀云　陰陽を劃別する山系將た山脈が、人文上に關係あるは顯著なる事實にして、日本の山陰、山陽を劃斷せる山系が、陰陽の人情を斯くも顯著に劃斷するとは、人の驚く所なり、即ち山陰道に到れば、何となく薄暗き氣持をなし、何となく模糊なる精神となり、一度山を越えて山陽道の地に入れば、氣晴れて心地の相違するが如き感をなすは凡百の旅客悉く之れを言ふなり。出雲に素盞嗚尊の簸ノ川上に八岐大蛇を斬るの譚あり、因幡には因幡小僧、白井權八の譚あり、熊坂長範は但馬養父郡の産なりとも云ひ、或は越後中頸城の産なりといふ、又丹波には大江山の酒顛童子の譚あり、越後には黒鳥兵衛の譚あり、越後の中部にて風雨の夜、會々山嶽の鳴動して遙にゴウーゴウーてふ響をなすや、古老は戒めて曰く、黒鳥兵衛が怒つて唸るゝと、黒鳥兵衛なる者は安倍貞任の徒黨にして、貞任亡ぶの後、越後に入り、人を屠りて血を啜り、婦女を掠めて山寨に拉し去りたる兇酋なりとは、中越の小兒の眉を顰めて語る所とす、越後を去りて愈北せば、出羽に講談及び演戲の主人公たる四ッ車大八あり、此の如く日本の中央大山系より陰部の地方は、昔譚、怪談、講談、小說、演戲の主人公を孕み出したるも、中央大山系より陽部にては、此の如きものを多く出したることを未だ聞かず、支那は、其の西境を除くの外、山脈の高度概して日本よりも低し、然れども北嶺の南北、南嶺の南北に於て人情思想等を大に異にするは、支那の歷史家の多く言ふ所なり、ヒマラヤ山脈西藏の高原が、支那の開化と印度の開化とを全く劃別し、印度の開化は東に向ひては高陸の爲めに斯く遮斷せられたりと雖も、西に向

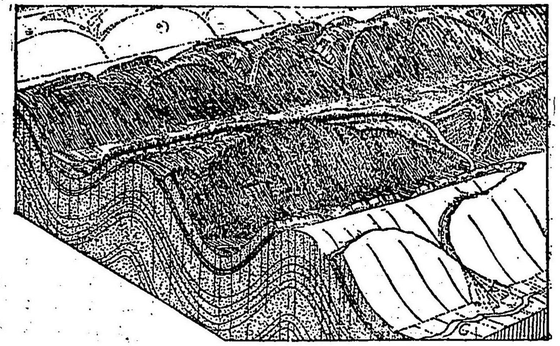
ひては然まての山脈なきを以て、滔々として亞細亞の西部に擴布し、亞細亞と歐羅巴とを區劃せるウラル山脈も、然まての高度にもなく、且つ其の南部は遂に平地の間に消滅するを以て印度の開化と思想とは歐羅巴に入り、希臘、羅馬の開化を神補したる所少らず。

第十四圖　地殼の彎曲を示す

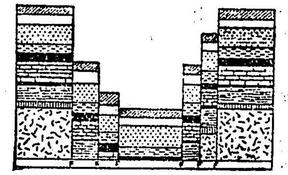
第五節　山脈の成因と人生

山脈と人類との關係は更に其成因の異なるによりて差異あるを見る。山脈は其成生の原因によりて左の數種に區別するを得、

一、彎曲山脈　地球は其成生の初めより、絶えず地熱を放散し、爲めに漸次に中心に向つて縮少しつゝあるものなり。斯くて地球の周圍をなせる部分が、等しく中心に向つ



て垂直に縮少せんとするが故に此際垂直に引かるゝ力は變じて水平に働く力となり、所謂横壓力なるものを起す。之を造山力と云ふ。此造山力の爲めに水平の地層によりて成れる地殼が漸次に褶曲するとき、其壓縮の高壓線は即ち山脈をなす。之を褶曲山脈と云ふ也。此現象は吾人が密柑橙等の乾燥するに當り、表面に皺襞を生ずるによりて容易に説明するを得べし。本邦の赤石山脈、北上山脈、阿武隈山脈等、大陸に於てはヒマラヤ山脈アルプス山脈の如き是なり。

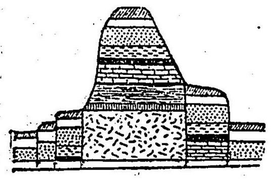


第十五圖　斷層山を表はす

二、斷層山脈　等しく造山力によりて、横に壓せらるゝも、地層に皺襞を造らずして、地殼に裂罅を生じて、斷層を造り、土地の一部分、上下に移動することあり。此原因によりて突出したるもの。兩部分陷落したるによりて殘されたるものは山脈をなす。

三、削成山脈　地面の一部分に激甚の水蝕作用加はり、深谿を刻するにより此兩溪谷に挾まれたる部分は山嶽を形成するに至る。稱して削成山脈或は水蝕山脈といふ。山背は多少高塞狀をなすを通例とす。北海道の東北山脈は此種に屬するものなりといふ。

以上の諸山脈は地殼變動の結果として、元は水平に重疊せる地層より成れるものなれば、他の一種の成因の山脈と區別して構造山脈の稱あり。



第十六圖　削成山及び斷層山を表はす

四、火山岩山脈　地皮の裂罅に沿ひ、地球内部の岩汁の噴出したるものが、地表に出でゝ凝結したるに由りて、造營せるものにして、不規則に聚合せる多少圓錐形、若くは錐狀の山より成りて、外見顯る構造山脈とは異なりと雖も地皮の裂罅たる、多くは線狀をなすを以て、火低相連續したる火山岩の山脈を成す。而して又其裂罅は、地球内部の强壓に對する、地皮の弱點より生ずるものあるに、地皮亂曲の部分は、即ち其弱點に當るを以て、火山の多くは褶曲山脈の山脊に一致するか、若くは之れに沿ひて連亘するを常となす。火山岩の山脈と噴火帶、若くは噴火脈とは其意義を異にすれば明かに區別するを要す。所謂火山とは地皮の罅裂に沿うて地部内部の實質が堆積し、迸出せる所のことにて其噴出物が集つては山嶽をなし、續いては山脈をなすものなれば、火山岩山脈は其噴出物の堆積の狀態を意味し、噴火脈は噴火現象の地帶を表はすものなり。

山の成因と人間との重要なる關係は其產物に在り。有用鑛物是なり。此有用鑛物の產出に鑛層と鑛脈との二種あり。鑛層とは地皮の出來上りと等しく、層々岩石の沈澱して疊積したるものにして、石炭、岩鹽等の、如く層狀をなして產するものをいひ、鑛脈とは噴火山の結果に伴ふものにして、噴

火山の次第に其勢を失ふや、遂に溫熱を低下して溫泉となり、其中に金、銀、銅、鐵等を含む水が地皮の裂レ目に枝狀をなして入り、茲に結晶して鑛脈となれるものをいふ。故に兩者の異る所は鑛層は先づ岩石が出來、以て鑛物が沈澱したるものなるに、鑛脈は既に岩石の出來たる所へ鑛物が脈をなして、其裂レ目に浸入したるものなり。斯く前者は沈澱したるものなるを以て各地粗ほ平均をなすと雖も、後者は不定なりとす。

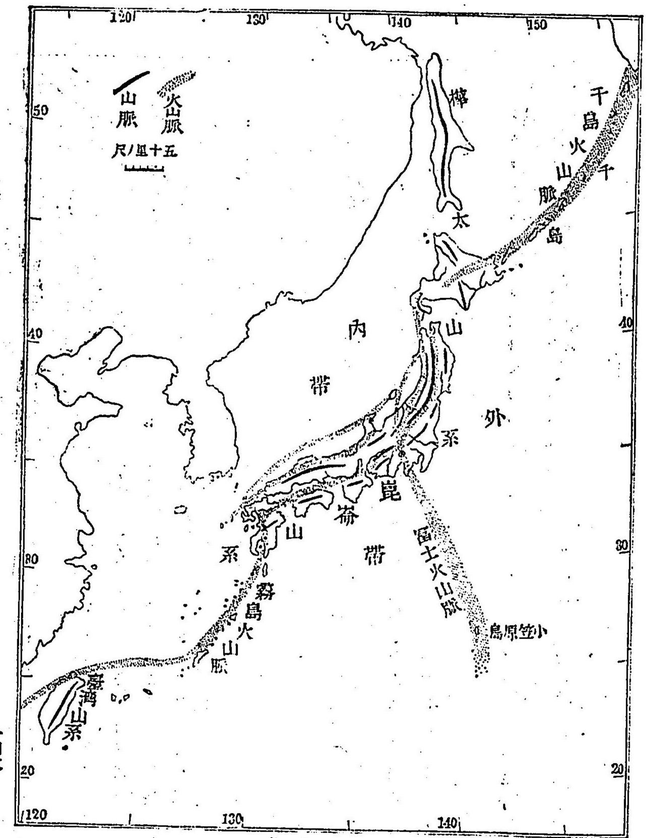
第六節　火山と人生

火山に就ての概念は、世人の往々誤解する所、理學士佐藤傳藏氏の之に對する注意は、頗る適切の感あり。左に其大要を採錄す。

第一　火山は燃ゆる山に非ず、燃るが如く見ゆるは、地中の熔岩熱、未だ全く冷めずして、雲、水蒸氣に反射して、火の如く煙の如く、見るのみ burning には關係なし

第二　火山には山を要件とせず、由來火山は地熱が地皮の弱點を求めて、迸發し其噴出物が堆積して山をなすものなれば、火山の性質上、山といふよりは寧ろ所謂火を吹く穴といふも可ならんか。

第十七圖



日本の山脈及び火山脈

第三　所謂煙の噴出は、頂上に限らず、山腹よりするもあり。鰐梯山の破裂、吾妻山の破裂等は皆山腹なり。

第四　火山は圓錐形をなすもの多けれども、立ちに圓錐形の火山なりといへば謬なり。火山には成層火山と塊狀火山とあり。成層火山は圓錐形をなすを常とするも、塊狀火山に在りては、其噴出物の性質によりて、圓錐をなすと否とあり。其熔岩の性質に三種あり、一は酸性に富むものにして、石英粗面岩等の如く其色白く、半固半液の飴に類し、其結果山の傾斜稍急なれば圓錐形をなさず。次は鹽基性に富むものにして、玄武岩の如く、其色玄し。此熔岩は粘性を有し、充分に熔解し、恰かも蜜の熔解せるが如し。其液体度は前者より強きを以て、流洩し低丘をなす。其結果極めて緩なり。次は中性のものにして、安山岩又は富士岩之に屬す。是れ寧ろ圓錐形に近き形を呈し、時に白扇倒に懸る美觀を呈するものなり。

第五　火山の要件として火口を入るゝは誤れり。成層火山には火口あるを常とすれども、塊狀火山には液体一時に流洩するが故に、火口は填塞して之を有せざるもの多し。

火山と温泉

火山は温泉を副生するによりて、人類の病氣療養に大なる効果を顯はす。温泉の起因は全く火山と起因を等うし、寧ろ緩性の火山と云ふべきものなれば、自ら火山の配置と共に分布せらるゝこと多し。從つて其位置自ら火山岩の幽邃跌宕なる谿間にあるが故に、身躰上に効力あるが上、精神上にも頗る靜養に適す。此關係は本邦の如き火山國に最も親密なりとす。温泉作用の更に重要なる事は、礦脈の起原をなすことにあり。蓋し温泉の礦泉ならざるもの少く、礦脈の根原は、專ら礦泉の所作なればなり。火山作用の尚一の効用は、有機物の岩石を炭化せしめて、人類を益するにあり。火山は地球内部より受けたる、極めて高度の熱を有して、地殼を形成する多數の岩層を貫きて地表に迸發するものなるが故に、其通路の地層中に褐炭、黑炭等の炭層夾在して、其の噴出熔岩の高熱に接觸するときは、恰かも殆んど四圍を閉塞して之れに熱を加へて以て炭素を殘留せしむる木炭竈と全一の作用をなす。其爲めに、褐炭は變じて黑炭となり、或は尚ほ進んで無煙炭となり、黑炭も亦た無煙炭となりて其含炭素の量增加して、高等の石炭に變化す。九州の炭田に於ては、火山岩噴出の爲めに其接觸部にある石炭は變じて骸炭の如き性質に變化せりと。然れば成因上何等の關係を

鑛泉と鑛脈

火山と石炭

有せざる石炭層の如きも此點に於て火山脈に密接の關係を有するを觀るべし。

火山と鹽泉及び金屬

湧泉と礦物との關係の最も親密に表はされたるものを鹽泉となす。會津の大鹽鹽の俣アッシホ。信濃の鹿鹽甲斐の奈良田。越後の本與板。北海道北見のルベシ。肥後の武雄。其他溫泉中之を含有する者甚た尠しとせすと云ふ。彼の佐渡の金山。生野の銀山等の如きは其鑛脈火山岩中にあり。其他本邦著名なる金屬鑛山の火山脈と伴はさるもの稀なるが如き是なり。

火山と風景

火山の人間に於ける重要なる影響は特殊の風景を顯出して無形上に人心を感化するにあり。火山の構造山と異なる所のものは稜々たる山骨の露出にあり。而して其稜々たる山骨を以て一種獨特の端然たる形狀を具するにあり。即ち白扇倒立或は磨鉢を伏せて眺むる等の語を以て表はさるゝ富士姿を呈するにあり。水蝕風化の兩作用に堅忍して能く其特殊の奇骨を維持するにあり。而して火光焰々天日を燒きし當初の元氣を失はす、且つ内部の非常なる火勢を表はすにあり。然れども永き水蝕に逢ふて

同　嶽　火口

山嶽　圖

動活の山火

志賀云伊豆七島は火山脈の大平洋上に幅せるもの古來なれば、噴火すること頻りなり、而して其の噴火を以て神の憤怒するものとなし、古來七島中の神社に贈位せし神津島の物忌奈神社の如きは、千餘年前の京都の朝廷より見れば誠に絶海孤島の一小無名なる祠に過ぎず、而かも仁明、文德兩帝の世(841-55A.D)、僅々十四年の

愈抗抵し得べからざるに當りては、潔よく之に從つて些の未練を留めず所謂磊々落々たるにあり。此特殊なる性質は奇妙にも古來我國特有なる理想の大和武士に酷似するに似たり。此點より觀れば、火山が最も日本國人の嬉好に適したるか、將た日本人が之を嬉好讃美するに適する如く養成せられたるものなるかを疑はざる程なり。此特質を有する火山風景は、所謂跌宕、崇高、壯麗等の語を以て表はるゝものなり。

居常此風景に養はれ此風景を絶愛する日本人は如何なる標準を以て之を賞美するか、這般の問題は「日本風景論」に於て詳論せられたり。其中の名山の標準に就ての左の語あり。

一、山の全躰は美術的體式と幾何的體式とを相調合安排せるもの。

二、然れども一山中の境遇は變化多くにして且不規律なるもの。

是なりと信ず。想ふ全躰の美術的體式と、幾何的體式とを相調合安排すとは、夫の美妙なる圓錐形を隆起せる火山、正に是にあらずや。而して火山中には樓牙詰倔たる岩石あり。石壁峭立せる新火口あり。舊火口あり。副火口あり。硫氣噴孔あり。洞穴あり。火口湖あり。匯水湖あり。草樹の蒼翠秀潤せるあり。境遇の變化多

間、朝廷より從五位下、從五位上より正五位下より正五位上と頻りに進せしめたる火山に關して尙ほ一の注意すべきは湖水を生して產業上及び風景上に影響すること、なり。第一に擧くべきものを火口湖となす。噴火口に雨雪の溜溜し、若くは口底より泉水の湧出して、竟に湖と化成せしものにして、函嶺の絕勝を表はす蘆湖の如きは其著しきものにして、其他著名なる火山の絕頂には、大概火口湖を留む。次に擧くべきものを火山噴起により、溶岩を以て神怒を噴火山灰等の堆積して、其火山又は他岩質なる山嶽との間に窪地を生じ之に雨雪の溜溜するか、若くは河水の入るによりて湖に化生するものにして、富士山麓なる五湖(山中川口西精進本栖)日光山中の中禪寺湖等は其著名なるものなり。此等の湖は多くは噴火脈に沿ひ、且つ火山の頂上、若くは半腹に在るを以て、自ら其中に嶽影を倒映するによりて絕景を表はす。火山の頂上に血の池地獄、油の地獄、鳥の地獄、賽の河原等多くの佛教の經典中の名稱あるを見れば火山と宗教との間に一種の關係あるは疑ふべからざるものゝ如し。

今にして且つ不規律なるもの實に是れに過ぐるなしとす云々。

志賀云、山嶽ある地方は、即ち一般の社會平原地方より超然なるとして別區をなす者なり、故に其狀態は大陸に對する島國の如し、故に隱レ劣敗者の場所となるが如く、山嶽地方は劣敗者の隱レ場所となるもの、如し。概平原には優勝者、居を占め、劣敗者は山中に隱匿するものなり。京都の朝廷が敗るゝ毎に輙ち叡山に走り、南風競はざるや、南朝

第七節　谿谷と人生

谿谷と山岳とは、是を分離して論すべからず。蓋し谿谷とは山間に在る長狹なる地にして、谿谷の大概は兩山脈の山腹と山麓によりて成立せるものなるが故に、其人間に對する關係は常に山岳と協合するを以てなり。谿谷は山脈との關係によりて三種に區別せらる。

一、縱谷、　山脈の主軸に並行するもの。

二、橫谷、　山脈の主軸に直角をなすもの。

三、臼谷、　山脈によりて四周せられ臼狀をなせるもの。

斯の如く山脈により四周を外部より離隔したる處に人類を繁殖せしむるによりて所謂山國を生ず。平氏の遺族を隱遁せしめたるによりて名高き阿波の祖谷谷、南朝の遺臣を庇護したるによりて著しき大和の十津川の如き、多くは平原に於ける生存競爭に失敗せる人間の隱匿處たること恰かも孤島に於けるが如し。

第八節　約論

の朝廷吉野山中に籠ること五十餘年なりき。其他平氏の源氏に敗らるゝや、或は肥後の五家莊、或は土佐、阿波の境上、或は阿波の祖谷、或は越中の五家山、（城端町の奥、庄川の上流）、有峰（常願寺川の上流）、或は越後の三面（岩船郡三面川の上流）等、何れも人跡の到られざる深山幽谷に隱れたるが如き、或は蝦夷人が内地人の北海道拓殖に

以上及ふ丈け、山の人間に及ぼす影響の要素を分解して、之を觀察し、其間に於て此等の要素の結合によりて成せる全体の影響を看却すべからざるを注意したり。然れば吾人本論を結ばんとするに當りて、稍觀察點を變じて、以上分解して論したるものを約論するは避くべからざる順序とす。余嘗て北海道にあるや「山と人生」なる問題につきて、少しく生徒の爲めに講したることあり。今本論を結ぶに當り之を顧みれば、多少重複の點なきにあらざれども、幾多の補缺する所なきにもあらされば、少しく訂正を加へて約論に代へんとす。

試に天魔を衞ひ來り、巨鋸を以て、吾人の生活する、北海道を横截りて、一の平面となしたりと想像せよ、其結果は如何。意ふに諸君の心中には、既に幾多の不都合を想像せむ。其風景に、其物産に、其氣候に、之れ敢て、無益の空想にあらず、世界中、現に、かゝる土地に生活する人類あるなり。曾西亞のステプ、西比利亞のタンドラ、北亞米利加のプレーリ、南亞米利加のパンパス、亞弗利加及び蒙古の沙漠の如き是れ也。夫の

走馬西來欲到天。　辭家見月兩回圓。　今夜不知何處宿。
平沙萬里絶人烟。

唐　岑參

野曠天低日欲西。　北風吹雪雁行低。　黄河渡口行人少。

つれ益々深山の間に入るが如き。即ち此地位例なり。支那の朝廷及び名士の屢々世の亂に遭ふや、獨り逢ふに避けたる羅馬が如き、古羅馬の劣敗者たるレータン人種

一片寒沙沒馬嚼。

明　屠隆

の土地に住居する、人類あるを想像せよ、果して如何、他の事は暫く措き、先つ物産中の動植物に就ての影響を觀むか、第一に困るものは、博物學者なるべし。何となれば、土地平坦なれば、吾人の周邊にある「ナラ」「カシハ」「ヤチダモ」「イタヤ」等の如き、下方濶葉樹帶の植物の外、少しく高地に産する「トドマツ」「エゾマツ」等の如き針葉樹若くは、其以上の植物は、研究し能はざるべければなり。啻に學術上のみならず、實用上にも亦た非常なる困難に遭遇せざるべからず。現に諸君と共に住居せる當校の材料たる「トドマツ」は何れに得べきや、動物に於ても本道の特産と云ふべき者の如は觀る能はざるに至るべし。幸にも北海道は勿論、日本の地體は山脈高く中央に連亘し之を横截するときは三角形をなせば、其頂邊には、半寒帶の植物を生するかと思へば、其底邊には、溫帶中の植物を生ぜり。故に九州の如き、半熱帶に近き地方と雖も、尚ほ溫帶高地帶の植物を觀るを得べし。是れ豈に山嶽の爲にあらずして何ぞや。山上に於て特別の産物を有するに留まらず、山麓

志賀云山嶽は劣敗者の隱場所となるのみならず、防禦的地位に最もある人種の城壁となるものなり、

コーカシヤ山中に於けるツルケス人、オセット人、ビレネー山中に於ける、バスク人、カルパチヤン山中に於けるゴラル人は、實に其山を以て最後の城壁となし、今日に生存するものなり。

志賀云、丹波人の古來勤王心に富みたるは、印度の大半島は殆んど悉く英吉利に服屬せしも、獨りヒに於ても亦特産を觀るを得べし、即ち山麓に一種の牧草ありて牛馬を養ふのみならず、綿羊、山羊を飼ふに適ふ處あるは前陳の如し、然らば則ち山は、動植の産物を多からしむと云ふを得べし、然れども未だ直に山は物産を多からしむとは云ふ能はず、鑛物の多少も觀るの要あればなり、例を遠きに需むるに及ばず、近く石炭なり粘土なり、石材なり其の他金銀、銅、鐵なり、此等のものは悉く山に仰かざるなし、石炭なくんば、何によりて製造業を起すを得むや、石材なくば、何を以てか家屋を建築するを得ん、金屬なくして何を以て器具を作らむ、此等のものなくは、何を以て快樂を得んや、之を要するに、鑛物は山により地表に出さる、若しも山嶽なけんか、有用なる鑛物の多くは、地底の深層に潛在して、之を得る能はざるべし、日本は山脈が中央に縱貫せるを以て鑛物の産出にも都合よき地体と云ふべし、殊に石炭は、國内に延長すれば、他日製造事業の發達には多望の土地といふべし、予は前には、山の動物、植物兩界の産物を多からしむることを述べ、茲に鑛物の産出を陳せり、されど、山は産物を多からしむと斷定せんには、尚ほ一の制限を要す、蓋し有用産物の分量は、平原に比して多きを得べからざれば、然かも山は慥に物産の種類を多からしむると云ふを得、此等の物は、等しく人類の生活に缺くべからざるものにして、又世の開明に進む基となる、此點よりも、山嶽は社會を開明に進むるの効ありと謂ふべし、山嶽は、直接に産物に影響するのみならず、平原をして効力あらしむるも亦、山なり、山岳は凡て水蒸氣を凝結せしむ、下層の濕潤なる空氣は、山脈に横斷せらるゝ時は、高く昇騰せざるべからず、爲に其容積は膨脹せらるると共に冷却を來し、飽和せる水蒸氣を離す、斯の如して水の源をなす、楊子江の崑崙山にガンヂス河のヒマラヤ山脈にライン河ローン河のアルプス山脈に發源するが如く、世界の大河は、世界の大山脈に發すると見るべし、前掲の地表横截の範圍を世界に擴張して想像せよ、果して如何、若し山嶽なかりせば、熱帶地方は、沙漠と變じ、寒帶地方は、堅氷と化し、溫帶地方は、悉く沼澤とならむ、然らば、即山は水源たり、土質の調整者たり、氣候の調和者たりと謂ふべし、メキシコ國をして、七千尺低からしめば、其國人は今

マラヤ深山中にニパール、ブータンの二國は獨立しなる居るなり。而積僅に四方里弱、人口八千人なるサン、マリノが、伊太利の土地に介立しながら、猶ほ且つ千四百年の間、其巖嚴多き山中に獨立して共和國を作すが如き、面積二十五方里、人口一万にも足らざるアンドルラが、西班牙と佛蘭西との間に介立しながら、猶ほ且つ

一千年の間、ピレネーの山中、海面上三千尺の處に獨立して共和國を作すが如き、而積十一方里、人口一万に足らざるリーヒテンスタインが、獨逸、瑞利の間に介立し、アルプスの山中に獨立して中部歐羅巴最古の公國を作すが如き、皆な其の人民が獨立心に富める所以にあらざるはなし。

モンテネグロは露西亞人チェルナゴラと稱へ、其の國人自からカラダーと喚ぶ、モンテネグロは羅甸語の「黒山」の義、チェルナゴラもスラーヴ語の黒山の義、カラダーも亦た蒙古語の「黒山」の義なり、即ち其の山又山にして黒き國なることは名詮自稱の如し、全國は巖多き石灰岩の山嶽より成り、天産物の少なく、何等の製造品なく、國民は唯だ牧畜を業とし、貧窶殊

日の如き生活はなし能はざるべし。

人類は河流の方向に沿ひて遷移す、山脈は河流の分界線たり、是に於てか山は人類遷徙の大防害物となり、遂に人類を區別す、等しく全一の州内にして而かも相隣接する支那、印度の二大民族を觀よ、一は蒙古人種にして一はアーリア人種なり、一は儒、道、佛、諸教の國にして、一は波羅門教國たり、一は其國勢は兎も角も東洋の一大帝國たるを失はすして、一は東洋の一大屬國なり、從て其人情、風俗、政治、言語等全く相異なること、印度洋中の西端にあるマダガスカル土人と、其東端に位する東印度諸島の土人よりも甚し、是れ何故ぞ、他なし、一のヒマラヤ(雪山)山脈横はればなり、ヒマラヤや、高さ二万九千尺、富士山の二倍を越し、之を横過する峠は實に非凡の高峻にして人跡未蹈の太古深林なれば道路のあるべき筈なく、從て之を横過するには非常の困難を耐へざるべからず、彼の印度に起り支那に播布して我國に大影響を與へつゝある佛教も、地續きなる此山脈を越えたるにあらず、異常の熱心ある達磨大師が、颶風の本源とし波濤の大なるを以

て有名なる支那海を經過したるに依ると云ふ、則ち知る、山は分水嶺となるのみならず、人種の區界をなすことを、山は既に人種の區界たり、國民を分つの墻塀たらざらむや、實に國の分界は水によらずして山に依る、滔々たる富士川の激流も、平の維盛をして恃むに足らざらしめたるに、箱根の嶮高しとせず、而かも六百餘年の永き幕府を存立せしめき、洋々たるラインの大河も永く獨佛の境界たる能はざるに、魏たるピレネー山脈は佛蘭西の英雄をして永く西班牙を合一し能はざらしめき、更に日本戰國時代の地圖を繙かば、山が如何に群雄をして割據せしめたるかを知らむ、而して支那の平原に於けるが如き堅牢なる所謂城廓都府の本邦にあらざる所以のものは、全く山の天嶮に依頼すれはなり、甲斐の曰谷廣しとなさず、而かも之に據らは信玄をして威を四隣に振ふに足らしむ、會津の平野又廣しとせず而かも之に據りて薩長に抗せしめば、以て全國の兵を動かすに足る、是に於てか知る、山は封建制度發達の一大主要の原因たることを。

に極まり、其圓數も亦た二十餘万に過ぎざるに、身の丈ケ高く、氣宇高邁に、且つ樸直にして、其の外部より容易に入り込むべからざる山國を以て堡壁とし、屈せず撓まず長へに克くヴェニス人及び土耳其人に抵抗し、一旦土耳其に併せらるゝや、土耳其人と戰ふこと二百年に遂に克く獨立を恢復して其の世襲の君主を愛敬すること猶ほ父の如く、偶々王族に恙あることなるや、國民の之れを憂ふること宛かも自己の身躰に恙あるが如し、氣風亦た簡易にして其王宮と稱ふるもの僅かに日本の小學校の如く、建築の大旅館と云ふも亦た數個の房室に粗末なる椅子を置き、旅客に對して便き麵包、飲料、肉片を供ふるに過ぎずと云ふ。

山は既に國民を小部に區分す、國民の結合は狹小に於て益〻堅固となる、斯くて社會の文明其間に興る、史家は稱す、希臘の文明は其地勢山岳縱横に迤亘して國を小部に分割したるによると、此理由は直ちに歐洲現今の文明を說明す、之を支那の如き大平原に比較すれば歐洲の地勢は實に少しく大なる希臘なり、ナポレヨンの如き大野望家には、歐洲の山嶺が如何に障害なりしか、之に反して此時に當り各小國の民族を山脈が如何に保護せしよ、今日の文明は實に其間に萌し、其間に發達せしなり、端西や寸尺の海岸を有せず、而して其面積僅に我國の十分の一にも滿たず、加之、四隣の狼呑他くなき國民に挾まる、而かも尙七百年間獨立の一國として列國の間に介立し、而して文明の本源たる自由思想の發達したる所以のもの、全く四周の天嶮あればなり、偶々露西亞の如き未開の國民あれば却つて此理由を確むる證據となる、歐洲の地勢は東經二十五度の線により東西に二分せられ、東部歐羅巴は平坦一樣なれど西部歐羅巴は參差錯綜すれば なり、想起す、支那の進歩の遲々たるを、支那の地勢は南嶺北嶺の横出あれども、未だ以て四百餘州を分割するに足らず、是に於て秦の始皇の如き、漢の高祖の如き、其他稀世の英雄輩出し、偶〻之を統一するも、凡庸の君主の之を繼くに當りては、忽ち之を統御する能はず、戰亂亦た戰亂、遂に今日列國をして分割の議を出すに至らしむ、支那をして今少く山嶽の其を分割するあらしめば、今少く强固なる國民を養成し得べきものを、東西に亘れる山脈と南北に連る山脈とは等しく人類に對する影響を異にす、日本の山脈たる支那山系と樺太山系とが地形の如くに西南より東北に連亘すると恰も伊太利のアペニーン山脈、朝鮮の白頭山脈に於けるが如し、是れ日本の鞏固なる結合を防害する能はざる所以なり、然れども少しく着眼點を異にせむか、生産上に於て貳個の中心點あるか如くに、政治上、氣質上、將た習慣上に於ても貳個の中心あるを見るべし、東京は東日本の中心にして西京と大阪とは實に西日本の中心たり、此中心點たるや、維新前迄は現然として存じ、動もすれば東西の人種の間に衝突を免れざりき、之れ何故ぞ日本地躰の骨骼たる山系は粗ぼ南北に向ふと雖も、之れ

系は、地方を東西に區劃し、東西兩部共に氣候、風土、物産は同一なるを以て、隨て人種、文物、思想を區劃すること、東西に駛走する山系の如くに甚しからず。

志賀云山は天然の境界線なり、江戸人は俗に「化物」は箱根より此方には居らぬ」と云ふ、而して三嶋地方(伊豆)の俚言にも「馬鹿と化物とは箱根より此方に居らぬ」と云ふ、即ち箱根山東の江戸人も箱根山西の三島地方の人も、共に箱根山を以て區劃物となし、境界線となすこと、此の如し、但言と雖も猶ほ且つ山を以て劃別す、人種、文物、思想、社交等の山を以て劃別すべきこと推して知るべきなり。

と直角に富士帶山脈の東西に亘るありて古來有名なる箱根の嶮を以て分劃したればなり。其他スカンヂナビヤ半島のキオレン山脈、魯西亞のウラル山脈等も亦共に南北に亘りて兩地に結合を妨げざるを表はせり。

山水明媚なる仙境に於て生れたる我等の目には、前掲の「平沙萬里絶人烟」一片寒沙沒馬蹄」的の風景は如何にも殺風景に感ぜしむるよ、實に平坦は目をして倦ましむ之に反して山の美景が如何に日本人の心情に影響人せしかは左の數句によりて見つべし。曰く

山の姿峨々として嶮岨雷のごとくなるは越中の立山の劍峯に勝れるものなし。

又た山姿のよきは島海山月山岩城山岩鼻山彦山海門嶽なり。皆甚富士に似て一峯秀出畫かけるか如し。

又景色無双なるは薩摩の櫻島也蒼海の眞中に只一の離れて獨立し絶頂より白雲を蒸がごとく煙常に立登るなとは青疊の上に香爐を置きたるか如し(以上橋南谿)

仙客來游雲外嶺。神龍栖老洞中淵。雪如紈素烟如柄。
白扇倒懸東海天。

石川丈山

「心あての雲間はなほも麓にて思はぬ空にはるゝ富士の峯」の如く山の最も姿のよきは火山なり。烟霞靉靆の上に高く秀出して、藍靛色を呈する樣は、若しくは日光之れに映じて全く紫色になるの景は、山にあらずして何れに需めむ。吾等の鬱悒は常に之の景によりて散せらるゝなり。實に山は太地の彩色をなし、土地を綺飾すること、恰かも造化が人目を樂ましめんが爲めに、山によりて四面に美景を撒播するが如し、而して日本は常に美の粹を鍾むること、左の一句言ひ盡して餘蘊なし。宜なる哉、文士、畫家、彫刻家、さては製造品に至るまで、此美景に感化せられ、遂に世界無二の美術國たらしめたること、

鍾得秀靈氣。築成東海灣。天工盡于此。

石野雲嶺

不復出名山。

志賀云山嶽にある人民は、性質衰健にして、思想高邁に、且つ自ら恃み自ら頼るを以て、

既に山の人生に對する經驗的及び推理的交渉を論ぜり。此に於てか山が吾人の悟性的の興味に對して、非常の價値あるを知る。然れども、未だ山と人生の間題を解かんには、尙ほ他の一方面の觀察をなさゞるべからず。何となれば以上にては未だ山と吾人とを相對峙せしめ、唯經驗の材料とし、吾人と異るものと

最も獨立心に富め、且つ何事に附け遲鈍なるが如きも、確固に信義を堅く守り、古風を守りて輕佻浮薄なる女の樣なは貞操に富たる男子は、主王心に勤し、財産能く愛み、平均して土地に傾向し、兼併に隨て地主となる。小作人と隣の保和嶮少く、相相陸し、黨扶け、郷醜の氣に愛す風べ多し。きの

志賀云山國人民は其數平

して觀察したるに過ぎざればなり。

山は、既に、美術的思想を、人類に、與ふ、豈人心をして好まざらしめんや、吾人の幼時に於てや、未だ自己の身躰の機關につき、充分なる智識を得ざるに、最早山水の寵兒となる。此の時期に於ける吾等の游園は周邊なり、吾等の漁場は山間を出つる溪水なり、豈に啻に幼時に於てのみならんや、溪岩岳や圓山や、（共に札幌にあり）現に半歳の冬眠に倦みはてたる吾人を慰藉する絶好の游園にあらずや、川は歩を運はざれば來らず、山は目を開き頭を擡ぐれば直に來る、人間生涯中、山ほど親しきものはなし、諸君それ此鴻恩を忘るべけんや、山は斯の如く吾人を樂ましめつゝある間に、不知不識吾等の心意を開達す、是に於てか、山は人物の育成處となる。ユラの山脈巍峨として雲際に聳え、其翠色ニャーシャテルの湖面に倒映する處、是れ、歐洲、自由の本源にして、人物の發出點たるにあらずや、殊に近世教育の大改良家は多くは此景に養はる、ペスタロッチやアカデスや將たペルバルトや皆此地に養成せられたるもの、日本の瑞西は、夫れ信濃か橘南谿の記文に日本は一

地に比較すれば少數にして、且つ四方へなだれ下り、東西と交通出入せざるを以て、其結婚する範圍は、自ら狹小なる甲溪谷と乙溪谷とに接せる者と相結同婚谷の者か相將結婚溪谷する者か相結婚せざるを得ず。飛驒の白川、山中の如き、從兄弟は固より、兄弟叔姪相結婚し、一家内に十數屋の家族同住するもあり、曾て木曾の山中、伊賀の山中、瑞西の山中に

の島山にして、絶頂といふは、信濃國なり、それより四方へなだれ下り、東西の國あり、南北の國あり、南面北面それ〴〵の向き〳〵あり云々と、支那山系と樺太山系と相衝突する處の近くは正に此國にして、且つ富士帶火山脈の大破裂をなす所、是に於てか、地勢自ら高峻、加ふるに白頂秀峯は、其四周を繞り、諏訪の鏡面、一碧瑩然たる所に、其影を倒映するは、

信濃なるところもか崎を來て見れば　空　海

富士のうへこく海士の釣舟

の絶景を生ず、是を以て信濃人士、亦日本の瑞西を以て任する者の如し、佐久間象山を出し、吉田松陰を養ふの昔を措くも、現に澁閥以外にして、兩渡邊氏を初とし、教育界に辻伊澤、柳澤等の名士輩出して、隱然日本の教育界を左右するの觀あり、其他日本に於て教育の普及し且つ教育事業の進歩したる地方を需むれば第一に指を信濃に屈せざるを得ず、信濃人士の瑞西を以て任するも無理ならぬと謂ふべし、蓋し山の産出せし所、山の人心に影響するは、獨り是に留まらざるなり、山は現に國の境遇たり、野心

も同族結婚行はる、其の結果として住民の精神、肉躰共に頽廢し、或は各種の疾病を忌むべき住民全般に擴げ、癩病の如き同血の結婚より來るもの甚だ多し。

志賀云山國は道路嶮惡に、其數も亦少く、電線、鐵道、橋梁も少く、交通の機關に缺乏するが上に、其物産も亦た少く、事業も少く、變化も亦た少なきを以て、人の出入往來も少く、

家の障害物たると共に國民の墻塀たり、國民は之に保護せられて、各其領土に安堵し、其生命を保ちよりて以て文明の源泉となる、其人民の山を視ること、豈に一般の外界に於けるが如き無情なる經驗材料たるに留まらむや、況んや山は人情を和け人心を啓發するの天師たるをや、必や山によりて愛護せらるゝ國民は、山を見ること恰も子の親に於ける如けむ、誰か山を愛せざるものあらむや、是に至りて是迄自己と相對峙し、自己と異りたるものとせる山は、今や自己と同しく世界の一部員となり、自己と相關の交際あるものとなり、茲に全く有情物と化す、既に有情なる交際物と化す、是に於てか吾人は山と一致せるものとして、俱に苦樂を共にし、山か受くる運命を共に經驗するの感起ると共に、其感情はやがて山によりて保護せらるゝ同社會全躰に向けらる、激烈なる愛國心か山國に於て興起せらるゝは實に之が爲なり、我日本は島國にして又山國なり、愛國の情は二者によりて養成せらる、宜なる哉、萬國に比類なき國躰を維持すると、然れとも吾等日本人は生來此樂園に生活するか故に、平日殆ど何の感も起らす、自から其人民の性情を

隨て外部の空氣に感染せず、自から其人民の性情をして所謂人擦せしめず、最も簡易、素樸ならしむるなり。日本の山陰道の如き、モンテネグロの如き、實に一條の鐵道線路すらなし、（山陰道には昨冬以降二十三哩の鐵道開通せり）、其人民の簡易、素樸たる固より然るなり。

すと雖も、一たび他郷に出てんか忽ち湧出して所謂懐郷の念となる、阿部の仲麿の感慨の如き、或は加藤清正が朝鮮の二王子を誘ひて、咸鏡道に入り、日本海上遙かに芙蓉峯を望みて想はす東拜無限の愛敬を捧けたるか如き、即ち是なり、想うて之に至れば會津藩士が天下の兵を引受けて、其山水と死生を伴にしたるは怪むに足らさるなり、尚ほ會津藩の國歌なりと云ふ、左の一首を玩味せば如何に山が其人心に影響したるか知るを得べし。

會津磐梯山は寶の山よ、笹に黄金がなりさがる。

山既に國の境界たり、從て他國の交通を遮斷し他國の變動に影響せらるること少し、之によりて他國より文明を輸入すること遲く、從て幾分か進歩に後るゝと伴に舊風は永く山間に遺さる、大和十津川の谿谷、肥後球摩川の河谷に在る人吉若くは阿蘇の深山に今尚ほ太古の遺風の存するは即ち是なり、要之國粹は山間に於て保存せらる、國粹保存は一方に保守を意味し、頑陋を意味す、實に山は天然の城壁をなすと伴に國を狹隘ならし

む。狹隘なる山國に養成せられしもの、豈に廣濶なる氣象を得んや。思想狹隘なれば、從て他を嫉妬し、他を排斥し、其極終に內訌爭鬪したる封建時代の風は實に山の影響を多しとす。其風や現今に於ても猶滅却せず、以て自ら島國根性を顯はす。外國貿易の其百般の共同的事業に於て表はるゝにあらずや。是實に日本人の一大缺點にして、敎育者たるものゝ將來大に矯正せざるべからざる所とす。此點よりの觀察によりて吾人は山につき同情的及社交的興味を惹起するを得べし。即ち前の悟性的興味に對して同情的趣味を惹起するを得べし。

山は尙ほ一の觀察せらるべき一方面を有す、宗敎的興味に對する價値これなり。古來世に偉大なる人物と稱せらるるものは、多くは山に於て修行し、山によりて陶冶せらる。殊に宗敎界の偉人に於て然りとす。例を卑近に採らんか、牛若丸は鞍馬山中の靜淑なる所に於て劍道の奧義を極めたると稱せられ、武藏坊辨慶、宮本武藏、岩見重太郎等の人々に膾炙せる傑士は等しく山間の修行により成し、而して多くは所謂仙者なるものに邂逅して

志賀云山には雲烟の美なる奇なるあり、溪水の美なる奇なるあり、巉巖の美なる奇なるあり、草樹の豪健なるあり、萬象の變幻を得て映發するのみならず、山上より下瞰すれば、世界は我に向ひ頭を低平面して來るが如しれに人にして山に登れば自ら意氣を高邁ならしむるも自然なり。支那人の神聖

秘術を傳達せりと傳へらる。事實の正否は別問題とし、暫く之れに就きて少しく空想を恣にせんか、地表上に於て最も靜肅に最も寂寞に、最も幽邃に、最も俗塵を脫出したる所は山間に若くものなし、而して人間精神の凝結は最も寂寞たる所に於てせらる。彼の坐禪なるものは畢竟精神の凝結する方法に外ならず、達磨大師の大悟も此方法によりて心意を凝結したるに過きず、之を思はゝ前の所謂仙者の出顯等は之を牽强附會として顧みずとも山間の四隣寂たる仙境に於て感發したるものにあらざるなからんや、美術家に仙人を畫かしめば必す雲上の美人を以てす、以て本邦人か如何に雲外を想像するかを知る。高山の頂巔は實に此雲外の仙境にして、最も天に近接せる所なり。余や登山を望むこと久し、然れども未だ機會を得ざること遺憾とす。嘗つて故郷なる米山に登りしことあり。時未だ幼年、何の辨別なしと雖ども、今に忘れざるものは此仙境なり。最初山麓に至れば、濃霧大に起り、忽ち四方晦暝となる。山上の眺望を失はんことを患へて漸く登れば、益〻深厚となり、愈〻一行をして落膽せしむ。然れども更に登

なるもの、人間以外のもの、靈的のものを「仙」即ち「山人」と呼ぶもの、自ら此間の消息を悟るに餘りありと云ふべし。

りて半腹を過ぐれば、茲に全く豁然として晴れ頂上に達しては前の雲霧は遠く脚下に在り、遙かに信濃川の洋々たるを眺め、近く航船の來往を瞰下す、子供ながらも是に至りて俗界の人にあらざりき、一千米突を出でざる米山に於て斯の如し、況や。

心あての雲間はなほも麓にて
思はぬ空に晴るゝ富士の根

妙義山のぼりて見れば宿りせし
麓の宿は後の白雲

の如き高山に登りて、誰か羽化登仙せざらんや、宜なるかな、宗教家が山に於て大觀することや、日蓮の身延山に入り、空海の高野山に入り、最澄の比叡山に登り各〻一派の宗教を開くが如きは、日本の宗教が山に於て發達せりと云はしむべし、豈唯日本のみに留まらんや、世界の大宗教は又山に於て發達せり、釋迦牟尼佛がヒマラヤ山中の靈鷲山に於て、佛教三千年の基を開きしが如き、モセスがシナイ半島の山巓に於て十誡を授けられし所

として、今尚ほ大會堂の建立せらるゝが如き、或はアララット山に於て彼の大洪水の時ノアの難を避けし所とし釘無し舟の殘片、今尚ほ見ることを得べしといひ傳ふるが如き、則ち是なり。要するに半島が兩陸間交通の媒介をなすが如く、山は實に天と人とを相接合し交際せしむるものと謂ふべきが。

宗教の開基、天人近接に關して、日本は特別の歴史を有す。そは天忍日命、天津久米命に弓矢を執らしめ、猿田彦命を先導となさしめて、天孫彦火瓊々杵尊の日向の高千穗の峯に降臨ましましゝこと是れなり。かくて日本人は山頂を以て神靈の照臨し給ふ所となし、至る所に神殿を築く。富士、御嶽(信濃)乘鞍、淺間、妙高、日光、岩手、鳥海(七千尺以上)月山、大山、阿蘇、霧島(五千尺以上)等枚擧に遑あらず是に於てか日本の高山は大概ね名山となり、山伏、巡禮等の參詣者をして、登嶽の勞苦を覺えざらしむ。北海道は或は土人の間に多少の山崇拜なきにあらざらむも、新開の地なるが故に發見せられざるに從て未だ頂上に神殿の築造せられざるは惜しむべし。然れとも山嶽

國民の開拓地方たり、豈に永く放棄せられんや、現に吾人の遊園たる藻岩山（インカラシベ）毎年舊曆四月八日に至れば、幌都の翁嫗、孫を連れ杖に縋り、腰の屈めるを忘れ、卅三番の觀世音參詣として、登山するにあらずや、之を顧みば山嶽國の青年たるもの豈屏居すべけんや。

吾人は此等の點より觀察して、天を知り、天を解し、天と融合するを得べし。而して天に近つくと共に、益其勢力宏大無邊なるを知るに比して、自己の微弱なるを知り、是に於て吾人は高等なる一の勢力に支配せらるゝを悟る。是れ宗教的興味のよりて生ずる所なり。斯の如く山を觀察することによりて諸君は山の多方興味に對する價値を解するを得しならむ。從つて地理學の徒らに山川都邑の名稱を暗誦するか如き、沒趣味のものにあらざるを知らむ。既に概念を得ば、次には之れが應用を考へざるべからず。此觀察法は總ての現象に應用せらるべきもの、予は諸君に最も應用の容易なるものとして、島嶼の問題を提出す。少しく之れにつきて同一の思考をなさば幾多の有益なる事實を發見せむ。自然は山を以て高く墻壁を築く

「山の文人と關係を總括すれば、島と人と關係悉く相元來間柄の如く山を觀察することに似たり。今の平原の立せる前の大山に孤立其以水若内嶋に土地なるに、新に沖積と海洋湖海の陸地の隆起と沖積と海洋湖海の水と若しく陸地と化し水若しく

志賀云

たるが爲めに、以前の島は即ち山の化したるなり。此種の實例は世界到る處にあり。枚擧するに遑あらず、東京の如き乳山の如き、太古今の東京平原の海の水に覆はれたる頃、全く一個の島なりし、其地相なり、其草木の工合と云ひ、何となく東京市街の間にありながら、古代の景象あるは偶然にあらざるなり。南米なる伯剌西爾の大

第九節　開明人に對する山

人類交通の障害物としての山、及び之によりて影響せられたる人類の結果に就て以上及ぶ丈けの觀察をなしたり。然かも再思すれば、是等は實に人智の未だ發達せざる時代に於ける總の人類に對しての事なり。而して現今に於ては其勢力は、未だ開明の域に發達せざる人種に對してのみ猶ほ依然として振はるゝが如し。要するに山の人間を制壓する勢力は他の自然力と共に人智の進歩の程度に反比例をなし、開明人に對しては益其勢力を減じつゝあるを觀るなり。即ち一夫道に遮れば、以て萬夫に當るを得べき天下の險道、依て以て關東が七百餘年間の幕府を維持したりし函根八里の峠も、今は隧道により汽車僅かに數分にして交通し得るに至り、茲に全く歴史的名稱を留むに過きずなれり。但し日本人は猶未だ國の中

（北海道師範學校同窓會雜誌第七號）

にによりて山國を成し、海を以て交通を遮斷するによりて島國を造る、以上列擧山國の特性も畢竟交通遮斷により生ずるを知らば島國何ぞ解し難からんや。

國は、山地と平原地との二個に別れ居れり、而して山地を稱へて「伯剌西爾島」と呼べり、是れ名詮自稱の如く、山地は太古、全く島にして、平原地方は常初洋海なりしに、アマゾン大河の土壌沖積と海底の隆起とに因り、其後陸地となりて「伯剌西爾島」と連絡し、斯くて伯剌西爾の大國は山地と平原地とにて成立すること、なれり。

央の分水山脈を超ゆるに、僅かにアプト式の鐵道を以て碓氷峠を通過するに過ぎず、從つて廣大なる信越の物産排出に大なる不便を忍びつゝありし間に、歐人は既に々々往時ナポレヨンの軍が非常なる困難を冒して通過したるアルプス山脈の勢力を無効ならしめたり。シンプロン隧道十二哩三分の一、サント、ゴタルド隧道(九哩三分の一)及びモンセニー隧道七哩三分の二)等にして世界に最大の模範を示したるもの是なり、然ども其の當時に於てこそ、實に非常なりしなれども、是既に驚くに足らざるに至れり、米人の計畫にして、合衆國に於て海面を拔くこと、千八百呎乃至二千呎高き山嶽重疊によりて離隔せられたるコロラド州の數多の鑛業地を聯絡するが爲めに延長三十一哩二分ノ一の廣大なる隧道貫通工事に着手せるもの是なり。

志賀云　島が事實上に於て半島となり、若くは大陸に地續きとなり、大陸の一國となりたるが如く、山地も亦た事實上、山地より脱却して平原地となり、一般社會の仲間入りをなすに至りたるものなり、否な山地は交通運輸の機關發達すると共に、愈〻平原地となり、益〻一般社會の仲間入りをなすに至る傾向あり、道路、鐵道、隧道、橋梁、電線、郵便の益〻山地に施設せらるゝと共に、愈〻山地の人心を發達し、隨て平原地方即ち一般社會と連絡するに至るべき趨勢あり、歐羅巴中原の大山系なるジュラは、五條の鐵道其間に貫通し、アルプスの大山系すら、世界絶無なる三個の大隧道に依りて鐵道を開通し、モン・セニーの隧道に依りて佛蘭西伊太利を連絡し、サン・ゴタルドの隧道、シンプロンの隧道に依りて伊太利より瑞西を經、獨逸を連絡し、即ち地中海と北海、バルチック海とを連絡するに至り、更にアルプス山系中の西部ブレンネルの隧道に依りて伊太利と墺匈帝國を經、露西亞とを連絡し、即ち地中海とダニューブ河の溪谷及び歐洲東北の大平原とを連絡し、斯くて山なるものが在來人種、文物、思想、社交等の境界線をなせしも、今や此の境界線は愈〻抹殺せられ、山地と一般社會との連絡は益〻密接なるに至れり。

志賀云　運輸交通の機關愈〻整備し、隨て山地にあるものは、平原地方より容易に且つ廉價に書籍、雜誌、新聞紙、將た製造の原料、農業の肥料等を輸入するに至り、而して自己よりは容易に且つ廉價に森林産物及び其の副産物を平原地方に輸出するに至り、斯くて精神上の進歩と富の增殖とに依りて、山地は愈〻開發して益〻平原地方即ち一般社會と密接し、加之、近代に至りては、山地の者は家内的の有利なる職業を發見し、例へば甲斐の山中にては各戸に海氣絹を織り、越前の山中にては各戸に羽二重絹を織り、獨逸の山中エルツゲビルゲ、チュリンゲンヴァルド地方にては各戸にてレースを編むが如きに至り、山地の富は愈〻增殖せしを以て、益〻一般社會と連絡し、斯くて事實上に於て山地なるものは全く消滅し